佐野

下高井郡山ノ内町教育委員会

佐野

1967. 11

長野県下高井郡山ノ内町教育委員会

序

まず「佐野」の出版をよろこびたい。この遺跡を天下に顕彰した故神田五六氏や，昭和33年，34年の発掘調査の関係者，爾後の資料整理や報告作製に携わった多くの人々の並々ならぬ努力と労苦とが報いられるからである。またこのような基礎的研究の公表が，学界を裨益するところ多大だからである。

本書では80頁余の内約40数頁の多きを割いて，佐野出土の土器に関する詳細な記載と考察とを行っている。発掘による層序関係は明らかでなかったというが，綿密な分析によって型式推移の迹をたどっており，また型式区分を通じて輸入されたものと，土着のものとを識別しようと努力している。このことは佐野遺跡の帰属を位置づける基礎となるが，なお幾多の解明すべき問題点を残している。それは佐野遺跡に近接した地域において比較さるべき遺跡に対する同様な精度の研究が少いこと，また佐野遺跡の構造を考えるのに不可欠と思われる奥羽地方殊にその西南部に於ける同時期の遺跡の詳密な報告が欠如していることに起因するものと思われる。従って，莫大な量の無文土器の分析を困難にし，各種の石器や土製品の系統関係を不問に付さざるを得なくするのである。

いずれにしても本書のような堅実な報告書が，各地，各時期の遺跡に就いて出ることが望ましい。考古学のように実証性を要求される学問は，確実な資料の蓄積なしには進展しない。

私たちが40年前の時点で考えた佐野遺跡の文化的意義について，この研究がよく数歩を進め得たことに対して敬意を表わすとともに，問題の核心に肉迫するために執筆者諸君の一層の精進を祈って止まない。

八　幡　一　郎

序

私が佐野遺跡に注目したのは，昭和7年考古学誌上に載った八幡一郎氏の報告であったと思う。その頃私は縄文式土器に興味をもち，特にいわゆる亀ヶ岡式土器に対して愚見を述べたことがあった。史前学雑誌に掲載された「関東に於ける奥羽薄手式土器」がそれで，結論からいうと八幡氏の南漸説とは正反対であった。しかし今でもはっきりと思い出すことの出来るのは，八幡氏の土器論についてそれが奥羽文化南漸のコロニーであろうとする御意見であって，大変面白く思ったのであった。その当時私も南関東の遺跡中で，海に近くない内陸の包含地の中に，往々亀ヶ岡式土器がかたまって発見されところがあることに不審と興味とをもっており，佐野遺跡とも類似する点がある点に強くひかれたのであった。

それから約20年の後私は信濃の考古学資料を調査する機会が多くなり，毎年各地の発掘や調査に従事し，ひいては信濃史料第一巻としての考古資料の集成に関係することゝなって，時々思い起したのは佐野遺跡の学術的調査であった。しかしその素志は遂にみのらないまゝに過ぎてしまった。

私は長らく信濃の縄文文化を語る時，佐野遺跡は一つの謎を秘めているものと信じていた。そしてこの謎を解明しなければ，長野県の縄文文化—特に晩期文化—は闡明されないとさえ考えていた。ということは一面において佐野遺跡の学術的調査が行なわれなければ長野県の縄文文化は明らかに出来ないであろうと思っていたのであった。

この私の長い間のさゝやかな念願がこゝにかなえられたのである。地元山ノ内町教育委員会の斡旋により，遺跡の発見者である故神田五六氏をはじめ，斯界の新鋭永峯光一君をはじめ，これを援けて高橋・金井・田川の諸君及び国学院大学生諸君による完璧な発掘調査が行なわれ，更に精緻な記録と報告がこゝに完成して，佐野遺跡はその全貌を学界に露呈するに至ったのである。そして長野県の縄文文化究明に一つの大きい礎石を樹立すると共に，その前進に大きい役割を果したのであった。関係者諸賢の御努力とわが考古学界えの貢献とに対して深い敬意

をさゝげたいと思う。それにつけても残念なことは，この報告書を最も期待し且つ第一の喜びとしておられた神田五六氏の逝去されたことである。恐らく地下に眠る君の霊は本書の成るを知って満足されるに相違あるまい。こゝにも本書刊行の果した一つの意義があったといってよいであろう。

以上請われるまゝに蕪辞を陳ねて序とした次第である。

昭和42年11月

大　場　磐　雄

序

奥信濃山ノ内温泉郷における佐野遺跡は故神田五六氏が土器・石器を表面採集されたことに端を発し，「佐野式土器」の呼称のもとに中部山地の縄文晩期の標式遺跡として学界から注目され，これが性格把握には学術的発掘調査によらなければならなかった。学界からは早期発掘が待望されていたが，なかなかその機を得なかった。幸い昭和29年，遺跡地主が桑畑をリンゴ畑に転換することになり，金井汲次氏（現中野市高社中学校教頭）外関係者が中心に地主の交渉その他緻密な準備計画を着々と整えられ，昭和33年第１次，昭和34年第２次調査が進められ，多数の方々の厚意と努力によって愈々待望の報告書「佐野」が刊行され，その全貌を広く世に発表することのできることは郷土に住むわれわれとして深い喜びであり感激のほかない。土器や土器片には東北亀ケ岡式の影響を受けた佐野独特なもののほか，亀ケ岡式直移入のものや，模倣して作ったもの等が発掘されており，豊富な土器・石器等のうち殊に石鏃の出土数においては驚異的であるといわれている。

この報告書は当地方上古の歴史究明に大きな光明をもたらすにとどまらず，考古学界に寄与すること絶大なるものがあり，この遺跡のもつ意義の大なることを痛感する。汗と油の結晶ともいうべきこの報告書のなるに際し，八幡一郎（日本考古学協会委員長 上智大学教授）大場磐雄（文学博士 国学院大学教授）両先生よりは御多忙中序文をいただき，また周到な計画と旺盛な考古学研究に対する熱意により心血をそそぎ，調査の衝にあたられた永峯光一氏（現日本大学講師）・故神田五六氏・金井汲次氏外関係各位のなみなみならぬ辛労に対し衷心からお礼申し上げる次第である。なおまたこの遺跡の調査に関し物心両面に格別なる支援いただいた下高井教育会・山ノ内町・佐野区ならびに協力を賜った各位に対し改めて深甚の感謝を捧げたい。

昭和４２年１１月１０日

長野県下高井郡山ノ内町長　佐藤喜惣治

例　　言

1. 本書は昭和33年11月の第１次調査と翌34年８月に行われた第２次調査に基づく報告書である。

2. 当遺跡の調査は，佐野遺跡調査会によって実施された。

3. 報文執筆の分担は次の通りである。

　第１章　第１節　　高　橋　　桂（長野県飯山南高等学校教諭）

　　第２節　　金　井　汲　次（中野市高社中学校教頭）

　第２章　　田　川　幸　生（中野市平岡小学校教諭）

　第３章・第４章　永　峯　光　一（日本大学講師）

4. 図版および挿図の作製には，安孫子昭二・可児通宏・中村貞史・松澤芳宏の４氏を煩した部分が多かった。

5. 「附篇」とした故神田五六氏の報文は、特に諏訪考古学研究所長 藤森 栄一氏の好意により，かつて氏が神田氏よりあずかったものをそのまゝ掲載した。

6. 本書の編集には，樋口昇一が専らその任に当った。

7. 本書の出版に当っては，山ノ内町教育委員会・山ノ内町公民館の援助と協力によるところがあった。

目　　次

序　　文　　上智大学教授 日本考古学協会委員長　八幡一郎

序　　文　　国学院大学教授 文学博士　大場磐雄

序　　文　　山ノ内町町長　佐藤喜惣治

例　　言

第1章　研究と調査の経過……1

第1節　縄文式土器の編年における佐野遺跡の登場……高橋　桂　…1

第2節　発掘調査の契機とその経過……金井汲次　…3

Ⅰ　調査の契機……3

Ⅱ　発掘の経過……4

(1)　第1次調査……4

(2)　第2次調査……5

第2章　遺　　跡……田川宰生　…11

第1節　佐野遺跡の環境……11

第2節　遺跡の状態……11

Ⅰ　遺跡地の堆積……11

Ⅱ　遺　構……14

(1)　集石址……14

(2)　石囲みの炉址……15

(3)　埋設土器……16

第3章　出土遺物……永峯光一　…17

第1節　土　　器……17

Ⅰ　A群　いわゆる亀ヶ岡式土器……18

(1)　A群土器の分類……19

〔i〕　AⅠ類　搬入された亀ヶ岡式土器……19

(a)皿形土器　(b)台付皿形土器　(c)注口土器　(d)壺形土器　(e)鉢形土器

(f)縄文を施した粗製深鉢

目　次

〔ii〕　A Ⅱ類　模造された亀ヶ岡式土器……22

(a)皿形土器　(b)壺形土器　(c)鉢形土器

(2)　A群土器の年代的区分……24

Ⅱ　B群　三叉文の種類……27

(1)　三叉文の分類……28

〔i〕 B Ⅰ類　非連鎖的三叉文の種類……28

(a)皿形土器　(b)壺形土器　(c)浅鉢形土器　(d)深鉢形土器

〔ii〕 B Ⅰ′類　数個の三叉文が組合って１単位をなす種類……30

〈1〉三叉文の先端が入組まない種類

〈2〉三叉文の先端が渦巻状に入組む種類

〔iii〕 B Ⅱ類　連鎖状三叉文の種類……30

〈1〉沈線と陰刻による連鎖状三叉文のみが飾られる種類

(a)皿形土器　(b)深鉢形土器　(c)甕形土器

〈2〉連鎖状三叉文帯と縄文が別個に併用される種類

〈3〉磨消縄文を伴う連鎖状三叉文の種類

(a)皿形土器　(b)浅鉢形土器　(c)壺形土器　(d)深鉢形土器　(e)異形土器

(2)　三叉文の系譜……32

Ⅲ　C群　鍵の手文の種類　(付) 入組文……37

(1)　C群土器の分類……37

〔i〕 C Ⅰ類　入組鍵の手文の種類……38

(a)浅鉢形土器　(b)甕形土器

〔ii〕 C Ⅱ類　鍵の手文の種類……38

(a)皿形土器　(b)壺形土器　(c)鉢形土器　(d)深鉢形土器　(e)甕形土器

〔iii〕 C Ⅲ類　入組文……39

(2)　鍵の手文の発生と変化……39

Ⅳ　D群　直線的な縄文帯の種類　(付) 類似する縄文帯の種類……44

〔i〕 D Ⅰ類　直線的な縄文帯の種類……44

(a)浅鉢形土器　(b)深鉢形土器

〔ii〕 D Ⅱ類　綾絡状の結節がつけられる種類……44

〔iii〕 D Ⅲ類　直線的縄文帯に他の形の縄文帯を伴う種類……44

(a)浅鉢形土器　(b)鉢形土器　(c)甕形土器

Ⅴ　E群　刺突列点文帯の種類……46

(a)浅鉢形土器　(b)壺形土器　(c)甕形土器

刺突列点文帯土器について……46

Ⅵ　F群　肥厚した口唇に装飾が加えられる種類……47

〔i〕F Ⅰ類　隆線と縄文とで加飾の集中部が構成される種類……47

〈1〉隆線の構成が複雑な種類

〈2〉隆線の構図が簡単な種類

〔ii〕F Ⅱ類　加飾の集中部が隆線だけで構成される種類……47

〔iii〕E Ⅲ類　沈線だけで加飾が行われる種類……47

佐野のF群土器……47

Ⅶ　G群　有文土器（雑）……48

(a)口頸のくびれた浅鉢形土器　(b)椀状の浅鉢形土器　(c)口縁の開いた鉢形土器

Ⅷ　H群　工字文および工字文に類する種類……48

(1)　工字文土器の分類……48

〔i〕H Ⅰ類　粗大化しない工字文の種類……49

〔ii〕H Ⅱ類　粗大な工字文土器……49

(a)浅鉢形土器　(b)壺形土器　(c)甕形土器

〔iii〕H Ⅲ類　連続した楕円状区画帯が飾られる種類……50

(a)浅鉢形土器　(b)鉢形土器

〔iv〕H Ⅳ類　変形工字文の種類……51

(2)　粗大な工字文土器の年代……51

Ⅸ　I群　凸帯文の種類……52

(a)鉢形土器　(b)深鉢形土器

Ⅹ　J群　口端に加飾のある種類……53

〔i〕J Ⅰ類　凸起を加飾する種類……53

(a)浅鉢形土器　(b)深鉢形土器　(c)甕形土器

〔ii〕J Ⅱ類刻み目による加飾の種類……53

(a)浅鉢形土器　(b)深鉢形土器　(c)甕形土器

Ⅺ　K群　研磨されている無文土器……53

(a)皿形土器　(b)壺形土器　(c)甕形土器　(d)鉢形土器　(e)浅鉢形土器

Ⅻ　L群　無文土器の種類……54

(a)浅鉢形土器　(b)深鉢形土器

XIII　M群　口縁に沈線をめぐらした無文土器の種類……54

目　次

(a)壺形土器　(b)浅鉢形土器　(c)鉢形土器　(d)深鉢形土器
XIV　N群　輪積み痕が残る無文土器の種類……55
(a)浅鉢形土器　(b)鉢形土器　(c)深鉢形土器
粗製土器の系統と変化……55
XV　網代底について……56
第2節　石　　器……58
I　石鏃……58
II　尖頭器……61
III　石錐……61
IV　石匕……61
V　石篦……61
VI　磨製石斧……61
VII　打製器……64
VIII　敲打器……64
IX　石皿……64
X　石臼……64
XI　凹石……64
XII　磨石……64
XIII　石剣……64
XIV　石刀……64
第3節　石製品および土製品……65
I　垂飾……65
II　土偶……65
III　耳飾……65
IV　剣状土製品……65
V　スタンプ状土製品……65
VI　円板状土製品……65
第4章　佐野式土器の編年……永峯　光一　…67
第1節　佐野における土器の組成……67
第2節　佐野式土器の編年……69
あ　と　が　き……75
〔附篇〕　佐野の石器……神田　五六　…77
跋　文……山ノ内町教育委員会
題　字……山ノ内町町長佐藤喜惣治

図 版 目 次

図版1　遺跡遠望
図版2　(上)第1次発掘の状況・(下)Ⅰトレンチ西北壁断面
図版3　(上)A—3区集石址・(下)A—3区集石址と附近の遺物出土状況
図版4　(上)A—5区集石址(6区寄り)・(下)A—5区集石址(4区寄り)
図版5　(上)A—6区集石址・(下)B—1区集石址
図版6　(上)B—2区集石址・(下)B—2区集石址中の土器出土状況
図版7　(上)B—3区集石址・(下)B—3区土器出土状況
図版8　(上)第2次発掘の状況・(下)Ⅲトレンチ炉址
図版8　(上)Ⅰ—4区埋設土器・(下)Ⅰ—4区遺物出土状況
図版10　(上)Ⅱ—1区土器出土状況・(下)Ⅲ—1区遺物出土状況
図版11　(上)Ⅰ—1区石剣出土状況・(下)Ⅰ—2区遺物出土状況
図版12　土器(1)A群 (1～14) ・B群 (15～17) (1／4)
図版13　土器(2)B群 (18～27) (1／4)
図版14　土器(3)B群 (28・29) C群 (30～37) (1／4)
図版15　土器(4)C群 (38・39) D群 (40～43) (1／4)
図版16　土器(5)D群 (44～48・50) E群 (51～55) H群 (49) (1／4)
図版17　土器(6)E群 (56～58) F群 (62～64) G群 (59～61) (1／4)
図版18　土器(7)H群 (67～77) I群 (65・66) (1／4)
図版19　土器(8)H群 (78～84) J群 (85～94) (1／4)
図版20　土器(9)K群 (95～109・111) L群 (110・112～116) (1／4)
図版21　土器(10)L群 (117～124) (1／4)
図版22　土器(11)L群 (125～140) (1／4)
図版23　土器(12)L群 (141～156) (61／4)
図版24　土器(13)L群 (157～169) (1／4)
図版25　土器(14)M群 (170～180) (1／4)

図 版 目 次

図版26　土器(15)M群 (181~191) (1/4)
図版27　土器(16)M群 (192~200) (1\4)
図版28　土器(17)M群 (201) N群 (202~208) (1/4)

挿 図 目 次

第１図　遺跡附近地形図　（１：75,000）……12
第２図　遺跡実測図……13
第３図　Ⅰトレンチ西北壁断面図……14
第４図　Ⅲトレンチ石囲みの炉址実測図……15
第５図　A群土器　（拓影）……20
第６図　A群土器・B群土器　（拓影）……21
第７図　佐野遺跡出土土器の非連鎖的三叉文模式図……32
第８図　羊歯状文と連鎖状三叉文の関係図……37
第９図　鍵の手文および入組文の種類と系統図……40
第10図　A群・B群・C群・D群・F群土器　（拓影）……45
第11図　長野県小諸市石神遺跡発見の粗大な工字文土器（拓影）…49
第12図　網代底　（拓影）……57
第13図　石鏃・石匕実測図……59
第14図　石鏃・尖頭器・石錐実測図……60
第15図　石器および土製品・石製品実測図……62
第16図　石器実測図……63
第17図　土偶……65

第1章　研究と調査の経過

第1節　縄文式土器の編年における佐野遺跡の登場

先史文化が，その中心地域から周辺地域へ波紋状に影響を及ぼし，そこに新たな様相をもつ文化を開花させた例は，わが国の先史時代においても幾つかの場合をあげることができる。その中にあって，亀ヶ岡式文化の南漸はもっとも顕著な例として，早くから問題になっていた。

大正13年，鳥居竜蔵博士は〔諏訪史〕第1巻で「出奥派土器」という名のもとに，出奥式つまり亀ヶ岡式土器の間接的な影響をうけた亀ヶ岡的な様相の指摘がある。そこにはすでに亀ヶ岡式文化の影響に対する考慮の先駆がみられるのである。

同じ立場に立って積極的に亀ヶ岡式文化の影響を考え，その拡がりの抽出を試みたのが八幡一郎教授の「奥羽文化南漸資料」である。昭和5年に〔考古学〕に連載されたうち，その(2)として中部地方のすでに報告されたものからの抽出，および新らしく検出された資料を列挙し，亀ヶ岡式土器のいろいろな形が，広く分布する状態を明らかにした。

大正末年から昭和初年にかけては，山内清男・八幡一郎・甲野勇3氏を中心として，縄文式土器編年の大綱が樹立されつつあった時期に当る。その研究が開始されるや，関東地方の諸貝塚において稀に検出される亀ヶ岡式土器の存在が改めて注意され，その混在の意義についていわゆる南漸説と北漸説とが対立して論議されるに至った。しかし，北漸説は昭和3年に甲野教授の「埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告」（史前学研究小報2）が発表されるに及んで，非常に影の薄い所説となった。その後，前記した八幡教授の「奥羽文化南漸資料」によって，形勢はいよいよ決定的となり，更に昭和5年，山内博士の「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」（考古学1ノ3）が公表され，亀ヶ岡式土器の変遷とその分布の状態が体系的に理解されるに至って，亀ヶ岡式文化が周辺の縄文式文化に及ぼした影響は，もはや疑いのない事実として受け取られるようになったのである。また，山内博士は同じ論文の中で，亀ヶ岡式土器の系統的発達は奥羽地方で行われ，関東や中部地方で発見される同式あるいは類似の土器は，奥羽地方から器物として移入されたか，またはその上模倣されたものと考えられることを指摘している。さきに甲野教授によって説かれた土質の粗雑さの点ばかりでなく，類似の著しい中にも文様の内容，位置，配合におのおの少差が認められる現象も，模倣の具体的な現れである。それは一方，奥羽地方で亀ヶ岡式が行われつつあったとほぼ同時期における関東・中部地方の土器

型式の存在を示すべき現象と考えなければならないのであって，直ちに単なる奥羽文化の南漸というような一方向的影響のみと解してはならない点を注意した。つまりそこには亀ヶ岡式文化の伝播における原則性が明らかにされているのである。換言すれば，亀ヶ岡式文化は東北地方に特有かつ若干の期間継続する文化圏を作っていて，その亀ヶ岡式と同様な状態を関東・中部では全く認めることができない。しかし，亀ヶ岡式と文化的な交渉を持つ地方的な文化が，亀ヶ岡式の周辺に存在するということであった。

この段階では，中部山地に亀ヶ岡式の前半および後半の特徴を伝える土器が点々と散見されることの指摘に止まっていて，まだ佐野の土器は姿を現わしていない。晩期の縄文式土器の編年における佐野の登場には，なお若干の歳月が必要であったのである。

昭和6年，周囲の人たちにはむしろアララギ派の歌人として知られていた故神田五六氏が，穂波小学校の訓導として赴任してきた。氏は学校の隣接地に多量な散布をみせていた土器や石器に深い興味を抱き，やがて暇さえあれば採集に熱中するようになった。このことが，後に郷土の考古学研究家としての道を氏に歩ませる契機になったといわれる。ところで，故神田氏の採集した遺物は八幡教授の眼にとまるところとなり，昭和7年に「信濃国下高井郡佐野の土器」（考古学3ノ3）となって世に紹介されたわけである。その報告には，佐野の土器には山内博士のいう亀ヶ岡式土器の2～3の型式や安行的な色彩を保有する土器などが含まれているという様相の紹介と同時に，後日，批評の的となったコロニー説が述べられている。亀ヶ岡式文化の波及は全面的と行われたものでなく，土地土地の文化の中に微弱に浸透し，稀にはコロニーを作ったという趣旨である。コロニー説はいろいろ批判されることにはなったが，佐野における地方的にはとびぬけて多量な搬入土器の存在を思うとき，多少ニュアンスの違いはあるが，改めて検討されてよい問題だと考えている。

こうして佐野の土器は，信濃における晩期縄文式土器の好例として知られることになったのであるが，昭和7年に発表された山内博士の「日本遠古之文化」（ドルメン1ノ6）に中部地方の亀ヶ岡式後半に比較しうるものとして三河：保美貝塚の資料とともに佐野の名があげられている。更に，有名なミネルバー論争の中の「日本考古学の秩序」（ミネルバー1ノ4）には，亀ヶ岡式土器発達の5または6の段階に属するものとして具体的な言及がなされ，また，附随する編年表では庄ノ畑式に続く型式に佐野の名が冠せられた。5または6の段階とは大洞A式またはA′式に相当する。そしてその所説は，「縄紋式土器の細別と大別」（先史考古学1ノ1）の附表で，信濃における晩期終末の位置に，型式名ではなく他地方の特定の型式と関聯ある土器を出した遺跡名として掲げられた根拠となっている。

山内博士が5または6の段階とみなした佐野の土器は，おそらく八幡教授の紹介図版の中にある粗大な工字文土器であったと考えられる。博士はその工字文土器を地方的な様相とみな

し，それを出土した佐野遺跡をもって，仮りに信濃の晩期末を代表させたのであろう。

戦後における調査の進展は，幾多の新しい資料の発見をもたらし，それによってこの地方の晩期縄文式土器の編年は密度の高いものに発展してきたかにみえる。だが，基本的には先学によってすでに指摘されたことがらが，新資料の発見に伴い次第に明瞭化してきた過程であって，佐野の調査もその帰着点の主要な一つであったといえるだろう。（高橋　桂）

第2節　発掘調査の契機とその経過

1　調査の契機

本遺跡から採集された土器は，「佐野式土器」と呼称され，中部山地の縄文晩期の標式遺跡として，夙に学界から注目されていた。しかし学術的発掘調査によったものではなく，表面採集によったもののみであった。したがってその性格把握は充分とは申しがたく，前々から発掘調査を望まれていた。

立地する遺跡の所在地は農耕畑であるため，発掘調査ができないまま今日に至ったが，地主滝沢恵一郎氏は桑畑を果樹園に転化することを計画されていたのである。4年前に桑株の間にリンゴが栽植され，苗が充分育ったので桑株は抜根し，リンゴ樹単一にされるということであった。これを伝え聞くに及んで，この機会をのがすと再び発掘調査は望めないと考えられ，山ノ内町教育委員会は初夏の頃から地主との交渉をはじめた。この間金井喜久一郎氏，山本政己氏・宮崎栄氏等が数次に亘って仲介の労をとってくださった。中秋を迎えるころ地主滝沢氏も，学術的発掘調査の意義を認められ諒解されるにいたったのである。それによって各般にわたって対策がたてられた。発掘調査実施にいたるまでの概要をしるすとつぎのごとき経過である。

10月29日（水）　発掘手続完了。各方面へ書類その他を発送する。

11月4日（火）　小林復起氏・山本政己氏は山ノ内町南小中学校へ赴かれ，発掘調査について協力かたを依頼された。

11月5日（水）　桐原・金井は調査の細目について打合わせる。

11月6日（木）　神田五六氏は地主滝沢氏宅を訪問し，発掘調査の日時・方法等について連絡協議された。宮津静雄・佐藤亮三・大月松二・小林復起各氏と金井は山ノ内町役場で連絡協議会を開く。下高井教育会は，この事業に対し後援されることに決定した。発掘開始を21日とする。

11月7日（金）　金井は神田五六・地主滝沢両氏宅を訪ね，昨日の模様を連絡する。

11月14日（金）　桐原・金井細目打合せ。

11月17日（月）　発掘調査本部は穂波支所に置くことにきめ，宿舎は山本政己氏が交渉をはじ

められた。

11月18日（火）　文化財保護委員会から今回の発掘調査を認めると公文書到着（地文記第1154号昭和33年11月8日）。調査員の宿舎は山本政己氏の交渉により，穂波温泉武田屋旅館に決定した。

11月20日（木）　神田五六氏・桐原・金井は宿舎で最終段階の打合わせをすませ，関係方面へあいさつ廻りをする。現地に赴き発掘予定地をきめる。

Ⅱ　発掘の経過

(1)　第1次調査（昭和33年度）

11月21日（金）快晴　午前9時30分作業を開始する。トレンチは2本設定することとし，農作物に支障のないように考慮し，道路に垂直にAトレンチ（29m×1m），Bトレンチ（16.4m×1m）に縄張りを行う。各トレンチとも5mごとに区切って「区」を設定。Aトレンチは上方より1～6区（6区は長さ4m），Bトレンチは1～3区（3区は6.4m）とする。

まずAトレンチに鍬入れをし，地表下30cmまで掘りさげる。1～3区までは遺物の検出はほとんど皆無といってよい状態だった。

1区は表土が浅く10cm以下は大礫が多く遺物は皆無だった。2・3区は表土下20cmで砂礫層に達し，氾濫の影響と思われる土層であった。4・5区には遺物が多く，土器片多数と石鏃3，凹石1を得る。付近の表面採集によって石鏃3，石錐1，土器片多量を得た。遺跡は桑園だったため抜根後の残根が多く，作業は難渋をきわめた。作業終了午後4時30分。

11月22日（土）　晴後曇　霜が真白におりて，霜どけのため地表は濡れて作業は難行した。午前9時作業開始。Aトレンチは昨日に引き続き発掘し，特に4～6区に重点を置く。35～65cmの層中には遺物が多く，また，3～6区には河原石を集めて不規則に積んだかと思われる遺構があった。4区から石皿・木炭片，5区の集石址の間から石鏃・獣骨片の焼け痕のあるもの，6区からは多量の土器片を得た。その中に注口土器片が1点あって注目された。また集石址の中から獣骨片多量が出土した。

Bトレンチも鍬入れを行う。1区は30～45cmに遺物の層があり，土器片のほか，石錐を得た。2区の表土下30cmに集石址があって，その間から土器片多数と石錐，磨製石斧片を検出した。3区の35cm下らかは土器片のほか石鏃を得た。

発掘地の道路をへだてた西隣の富沢均氏から双頭石器の提供をうけた。富沢氏が去る9月末に庭の地下1m下から発掘され，その際土器片多量を得たが皆部落の人に譲ってしまったということである。

11月23日（日）　曇後小雨　勤労感謝の日で温泉街には早朝から国旗がひるがえっていた。9

時20分に作業を始めたが，10時すぎにちょっと小雨があった。小雨の間，少し作業は中止し，土器洗いをはじめる。11時すぎから再び発掘を継続。

Aトレンチ1～3区は地表下50cmまで掘り下げたがあいかわらず黄褐色の砂礫層のみで遺物はないため中止する。Aトレンチ4～5区の集石址を清掃し，実測後写真に収める。その後，石を取り上げると下から土器片・石鏃等が検出された。6区からは獣骨片多数を得る。午前中でAトレンチは完了とした。

本日の作業の主体はBトレンチに注いだ。Bトレンチには3群の集石址があって，2区のものには石の上及び集石の間から10余点の石鏃が出土し，焼土と共に石の一部に火焼の痕をとどめているものがあった。3区の地表下80cmからは土偶左腕片（亀ヶ岡系），土製耳飾片2点を発掘した。その他炭化したクルミ片も出土した。午後は遺跡全体，遺構の実測を行い，写真撮影をすませ，午後3時30分に作業を完了した。

11月24日（月）　快晴　山ノ内町南中学校3年生全員の協力を得て発掘地の埋め立てを行った。関係各方面へあいさつ廻りをしのち遺物の整理をする。

11月29日（土）　晴　神田五六氏・金井，中学生5名によって遺物を整理し，収納箱に入れすべて終了する。

地主滝沢氏宅を訪問し，本年度の成果を伝え，来年度も継続したい旨を申し入れると諒とされた。

(2) 第2次調査（昭和34年度）

第1次発掘調査が終了し，地主滝沢氏は当遺跡の調査研究をすすめる上で再び発掘調査をすることが至当であると認められた。リンゴ樹に支障を与えぬ限り第2次調査を諒承されたのである。

そこで昭和34年度は，年度頭初から発掘計画を樹て，予算を計上して着々とその準備をすすめたのである。なお，下高井教育会は昨年同様に後援を約し，物心両面に亘る協力をおしまないということになった。

第2次発掘調査は8月1日から6日間を予定し，発掘本部は第1次同様南部公民館をあて，調査に当る者で宿泊を要する参加者はすべてここで宿泊することにした。遺跡からは東北へ200m離れた場所で，調査をすすめる上できわめて有利であった。

8月1日（土）　晴　発掘本部で打合会を行う。中学生（中野平中・平岡中・山ノ内南中）の発掘協力者に対し神田五六氏・磯崎が発掘調査の趣旨，発掘要領等を説明した。

午前10時鍬入れ式を行う。トレンチは第1次調査の折に遺物の多量に出土した地区を中心に道路に並行して2本を設定しⅠ・Ⅱとする。トレンチは長さ10m，巾1.5mとして各2m

ごとに区切り区を設けた。

本日はⅠトレンチに重点をおき，まず表土から10cmを掘り1層とし，以後10cmずつに2層・3層・4層とした。Ⅰトレンチは3層（表土下30cm）まで掘り，土器片多量，石鏃19点，石錐1点を得た。Ⅱトレンチは1より東へ4mの間隔をおき，昨年のA・Bトレンチに略々直角にとった。規模はⅠトレンチ同様10m×1.5mとし，1層を発掘したが遺物はほとんど検出されなかった。作業は午後5時30分に終る。

8月2日（日）　晴　8時作業開始。ここ2週間，この地域は降雨なく天地は乾燥しきって炎暑はきびしかた。そこで日中の炎暑をさけ，朝はなるべく早く，昼休みを長くとり，夕刻は日没頃まで作業をすることにした。

発掘はⅠトレンチに主力をおき4～5層を精査する。本日の検出遺物は次のとおりである。

層＼区	1区	2区	3区	4区	5区
4層	土器片（多）把手 土製円盤(無文)3 石鏃7　石錐2 骨片（多）小石	土器片多　石鏃3	土器片 石鏃4 石鏃1	土器片（多） 打石斧1 石鏃4　石錐2 （小骨片少） 炭化物	土器片（多） 石鏃5
5層	土器片 磨石斧片1 石鏃6 骨片 （礫多）	土器片（少）	土器片（多） 浅鉢土器1 石鏃1	土器片（多） 石鏃1 剝片（多）	土器片（少） 骨片

午後6時30分作業終了。夕食後広間において打合会を開く。

8月3日（月）　快晴　作業開始午前8時。昨日同様Ⅰトレンチに主力をおき発掘をすすめる。Ⅰトレンチの成果は次のとおりであった。

層＼区	1区	2区	3区	4区	5区
6層	土器片（多）無文多し，土製円盤1 磨石斧1 石鏃6　骨片 炭化物	土器片（多） 石鏃1 獣骨片	土器片(多)無文多し　土製耳飾1石鏃1	土器片 石鏃5 石器片（多）剝片（多） クルミ炭化片 獣骨片	土器片（多） 石鏃 黒耀石片多
7層	土器片（少） 石鏃1	土器片（多）集積して出土	土器片（多） 小石，	土器片 異形石器（ペーパーナイフ型） 石鏃4　剝片	土器片（小） 石鏃5
8層	石鏃2	土器片（少）	土器片 石鏃1 獣骨片	土器片 鉢形土器（中に石鏃1点） 獣骨片 クルミ（炭化片）	土器片（少）
9層	遺物なし	遺物なし	土器片（細片少）		遺物なし

本日は中学生の作業協力が多かったのでⅡトレンチの発掘も進んだ。Ⅱトレンチ全般に黄褐色の堅い土に礫まじりの土層のため作業は難行した。3層から包含層となり，4層には遺物が多かった。Ⅱトレンチ1区3層では亀ヶ岡系の壺形土器1点を検出。2・4区には径30～40cmの礫群があったが，第1次の時の集石址とは趣を異にする。朝から飯山南高校生5名が応援に来てくれたので土器洗いを開始する。NHKのニュースで発掘状況の報道があったためか参観者は急に増加した。午後6時作業終了。夜打合会を開く。

8月4日（火）　快晴　作業開始午前8時。連日の快晴続きで太陽が出るとすぐ炎熱きびしく作業は難渋した。昨夕から口縁を現わしはじめたⅠトレンチ4区8層の土器は径40cm近い底抜けのものであった。付近には土器片と共に拳大の礫がみとめられた。Ⅰトレンチの9層には遺物がほとんど認められないので，以下の発掘は中止し，Ⅰトレンチ北側へ巾80cmの拡張区を設けることにする。午後はⅠトレンチ1・2・5区の北側を拡張し，1′・2′・5′と呼称することにした。1′区7層からは石棒を検出，周辺には土器片が多く，それにまじって土製円盤数点も得た。Ⅰトレンチ4区とⅡトレンチ4区の間に巾2m，長さ4mの拡張区をつくりⅢトレンチを設定し，表土をはぐ。午後7時作業終了。

8月5日（水）　快晴　朝8時発掘作業を開始する。1′・2′・5′区を昨日に続いて発掘。土器片多量と石器多数を得た。3′・4′区の発掘をはじめ遺物多量の検出をみた。Ⅲトレンチも全面的に発掘し，各層から遺物を得た。午後5時すぎにⅢトレンチ1～2区間で石囲炉址を検出した。それは地表下80cmのところで7個の石で囲んであった。

山ノ内町・東・西・南の3中学校生徒の作業応援があって，作業は非常にはかどってきた。新聞・ラジオの報道によって，急に参観者が増加し，神田五六氏はその応待に1日を費やされた。午後4時30分から発掘本部の二階広間において発掘調査中間発表会があって，会は次のように行われた。

1. 開会のことば　宮津　静雄
2. 経過報告　湯本政治郎
3. 講演
   - 佐野遺跡発掘調査中間報告　永峯　光一
   - 考古学上よりみたる山ノ内町　神田　五六
4. 閉会のことば　佐藤　亮三

約2時間にわたる講演会には80余名の来聴者があって盛会であった。その後有志による懇親宴会がもたれ，有意義な一夕をすごすことができた。

8月6日（木）　快晴　午前8時作業を始める。Ⅲトレンの石囲炉址をていねいに発掘し，全貌を把握できるまでに完掘されたので，実測し，写真に収める。各調査員は分担のト

レンチを清掃し，実測する。その後写真撮影をすませた。全体測量も午前中に完了。

午後は要所に砂を入れて遺跡の埋め立て作業を実施する。山ノ内町南中学校3年生全員が出動し，男生徒は埋立作業，女生徒は土器洗い作業を実施してくれた。遺物は日陰乾しをするため発掘本部に並べたが，各部屋に一杯になってしまった。午後6時解散式を行う。

8月7日（金）　快晴　夕方俄雨，神田五六氏と金井は関係各方面へあいさつ廻りをすませる。高橋・関は平岡・中野平中学生と共に遺物の整理をする。

8月10日～13日（月）～（木）　金井・高橋・関は遺物の整理を実施。中野平中学生竹内照夫君他5名も泊りこみで作業に協力し，主要遺物に註記をすませる。

8月21日～27日（金）～（木）　高橋・関は遺物の整理にあたり主要遺物の実測，写真撮影を済ませた。なお26・27日は全遺物を収納箱に納め，発掘本部の倉庫に搬入して整理を完了する。

調査会役員および調査員

待望久しい本遺跡の発掘調査実施にあたりその円滑推進のため調査会役員を構成した。役員は町当局の理事者をはじめ，学識関係者，地元の方々，下高井教育会関係の代表者等で14名であった。構成は次のとおりである。

調査会役員構成

顧　問	山ノ内町長	小林　茂
	長野県文化財専門委員	金井喜久一郎
	下高井教育会長	大月松二
会　長	山ノ内町教育委員長	湯本政治郎
副会長	山ノ内町助役	宮津静雄
	山ノ内町公民館長	宮崎仲次
	佐野遺跡保存会長	古幡忠二
委　員	山ノ内町教育長	佐藤亮三
	山ノ内町町会議員	宮崎修
	〃	児玉恒春
	下高井地域調査委員長	小林復起
	山ノ内東小学校長	高池義則
	山ノ内南小学校長	本山静夫
	山ノ内南中学校長	山崎章

第１・２次の調査員は次のとおりである。（調査当時）

			第１次 昭33	第２次 昭34
発掘調査員責任者	山ノ内町教育委員長	湯本政治郎	○	○
指導者	日本考古学協会員	神田五六	○	○
	日本考古学協会員	永峯光一	○	○
調査員	山ノ内南中学校教頭	山岸藤男	○	
	山ノ内南中学校教頭	荒井太一郎		○
	平岡中学校教諭	金井汲次	○	○
	飯山南高等学校教諭	桐原健	○	○
	山ノ内南小学校教諭	田川幸生	○	○
	国学院大学学生	磯崎正彦		○
	〃	高橋桂	○	○
	〃	関孝一		○
	〃	依田千百子		○
	山ノ内町教育委員会	篠原正幸	○	○
特別参加	日本考古学協会員	上原甲子郎		○
	日本考古学協会員	岩野見司		○
	木曾東高等学校教諭	樋口昇一		○

調査協力者

宮崎亀三郎・檀原長則・畔上秀雄・山上右八・田中清見・丸山正太郎・土屋益雄・横田仙寿宮崎孝道・清水悦郎・井上仁・土屋州造・吉松雄一・池田富男・田尻二郎・藤沢万之亟・山本政己・宮崎栄・小林東助・中原庄人・山本テル子・山ノ内南中学校市川幸男君他43名・山ノ内西中学校畔上政男君他10名・山ノ内東中学校黒岩君他16名・中野平中学校竹内照男君他12名・平岡中学校出川富男君他10名・飯山南高校小林光子さん他７名・南宮中学校生４名

主な参観者

倉石義次・古幡清・斉藤二六・関完三郎・富岡敬・湯本軍一・花岡健次郎・中沢宗三郎・山本秀太・滝沢利八・斉藤理平・堀内安雄・青木利美・宮崎祐治

（金井汲次）

第2章　遺　跡

第1節　佐野遺跡の環境

奥信濃の上信国境山地における志賀高原の麓には，上林・渋・安代・湯田中あるいは角間・穂波などの温泉群が噴出し，古来，湯治地や行楽地としての集落が発達してきた。最近では山ノ内温泉郷と呼ばれている。これらの温泉集落の立地する山麓地帯は，西側に低い箱山山塊が南から北へ細長く突き出して，中野扇状地との間を区切り，袋状の小盆地を形成する。山ノ内盆地という。山ノ内盆地は標高 500m～800m を示し，ほぼ中央を夜間瀬川が流下する。夜間瀬川は源流を志賀高原の湖沼湿地帯に発し，山麓で幾つかの小支流を集めながら高社山の山麓に沿って流れ，有名な栗林遺跡のある高丘丘陵の北端で千曲川に合流する。

夜間瀬川の左岸，山ノ内盆地の南西部には，なだらかな傾斜地が展開する。盆地の出口で夜間瀬川に流れ込む伊沢川の扇状地である。伊沢川は盆地南縁を画する三沢山塊に水源を発する2本の支流が山麓を少し離れたところで合流してできた小河川である。西側の支流を三沢川といい，東側の支流を内角間川と呼び，それぞれに扇状地が形成されている。

佐野遺跡は，内角間川扇状地の西端，三沢川扇状地との複合地帯附近に立地する（図版1・第1図）。内角間川扇状地は，遺跡附近から上流はやや傾斜が急で，小礫まじりの乾燥地をなし，現在は主に集落地や果樹園として利用されているが，遺跡附近から下流の一帯は谷地といわれ，扇状地末端の湧水によって灌漑される水田地帯が開けている。図版1の遺跡遠望は，西方の更科峠から望見したものである(第1図の矢印の方向)。扇状地帯における乾燥地帯と湿潤地帯の関係を読み取ることができると思う。つまり，遺跡は内角間川扇状地末端の湧水地帯に隣接する砂礫地帯を選んで営まれたものと考えられる。先史の時代ばかりでなく，この湧水は佐野の集落の形成に重要な依拠となっているのである。

遺跡の地番は下高井郡山ノ内町佐野区畑中 1,175 番に当り，穂波小学校々庭と農業協合組合の建物に北東と南西を挟まれ，西北の県道に面したリンゴ畑の傾斜面に所在する。（田川幸生）

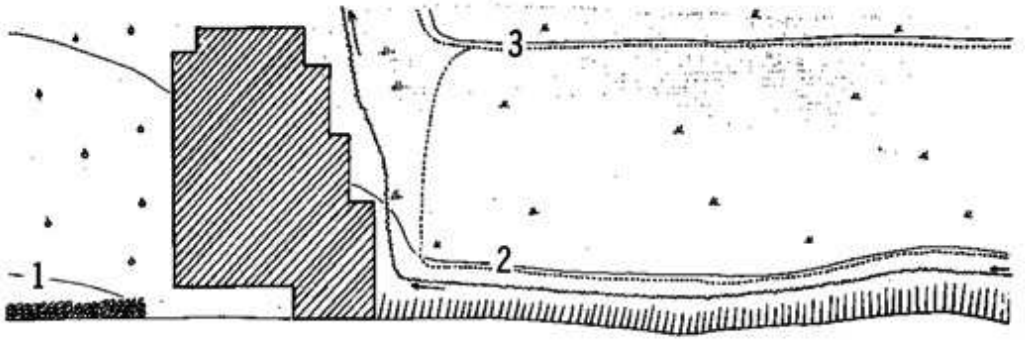
第2節　遺跡の状態

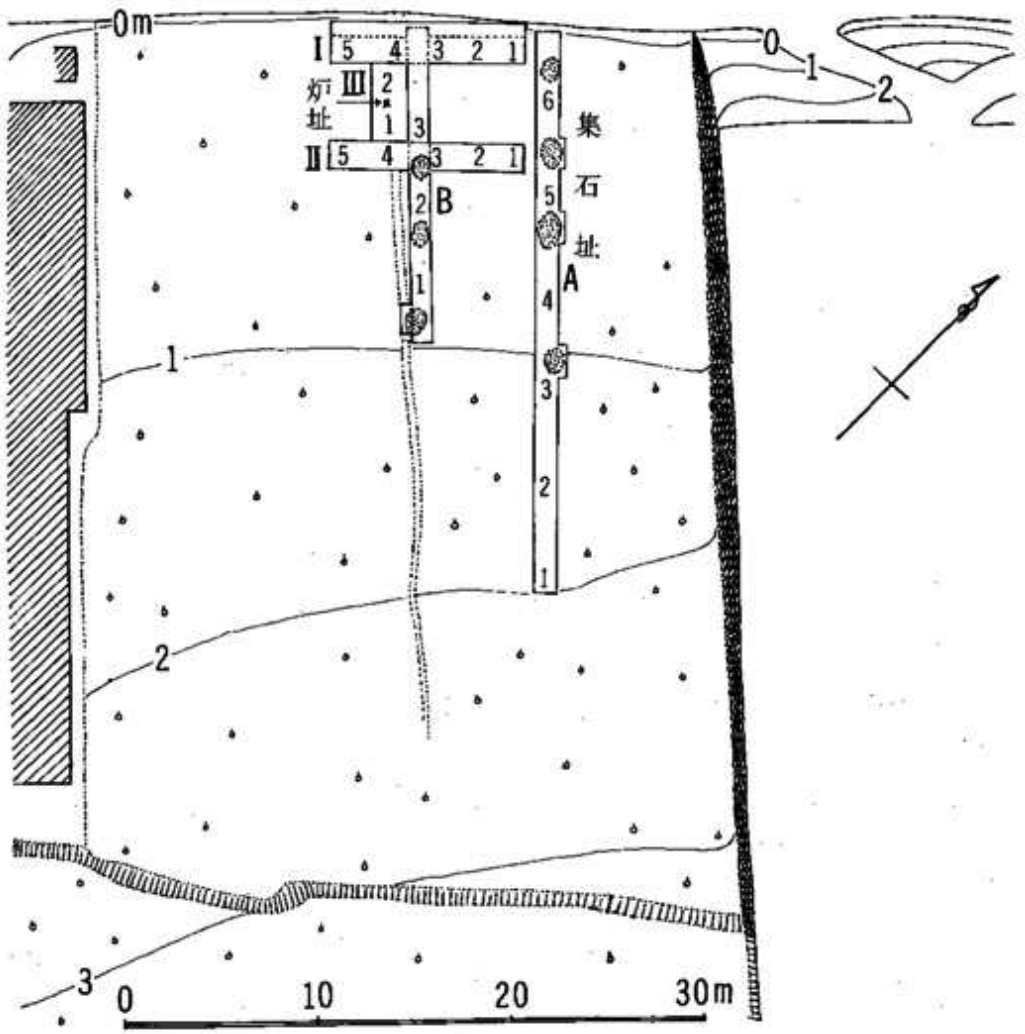
I　遺跡地の堆積

遺跡の立地する場所が，そもそも扇状地の砂礫地帯であるため，大小の礫が非常に多く混在

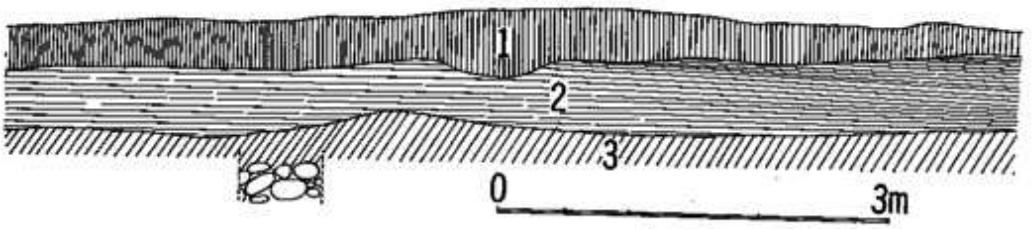
第1図　遺跡附近地形図—中野図幅(1：75,000)

しているが，標準的な土層の堆積状態は第3図に掲げたⅠトレンチ西北壁（県道側）の一部の断面に現れている（図版2，下）。第1層（表土）は細かい礫が混入する褐色砂質土層，第2層は細礫混入の黒色砂質土層，第3層は拳大の礫を多く含む黄褐色の砂質土層で，20cm～30cm下では，川原石が累々と重なる扇状地特有の礫層になる。遺物の包含層は主として第2層にあり，第1層からの遺物出土量は場所によって差が認められるが，概して少量，第3層では稀存な状態であった。ただし，第2図に示した1m等高線附近から上方は第2層の存在がなく，第1層が第3層の上に重なっている。従って，Aトレンチの1区および2区で遺物の出土量が微少であったのは，第2層の分布を欠く地帯であるからに他ならない。第1層は10cmから深い





第2図　遺跡実測図(1：400)



第3図　Ⅰトレンチ西北壁断面図(1：60)

ところで 50cm に達し，また第2層は 20cm から 60cm 位までの振幅が認められ，斜面の下方ほど，おのおのの堆積が厚くなる傾向がある。

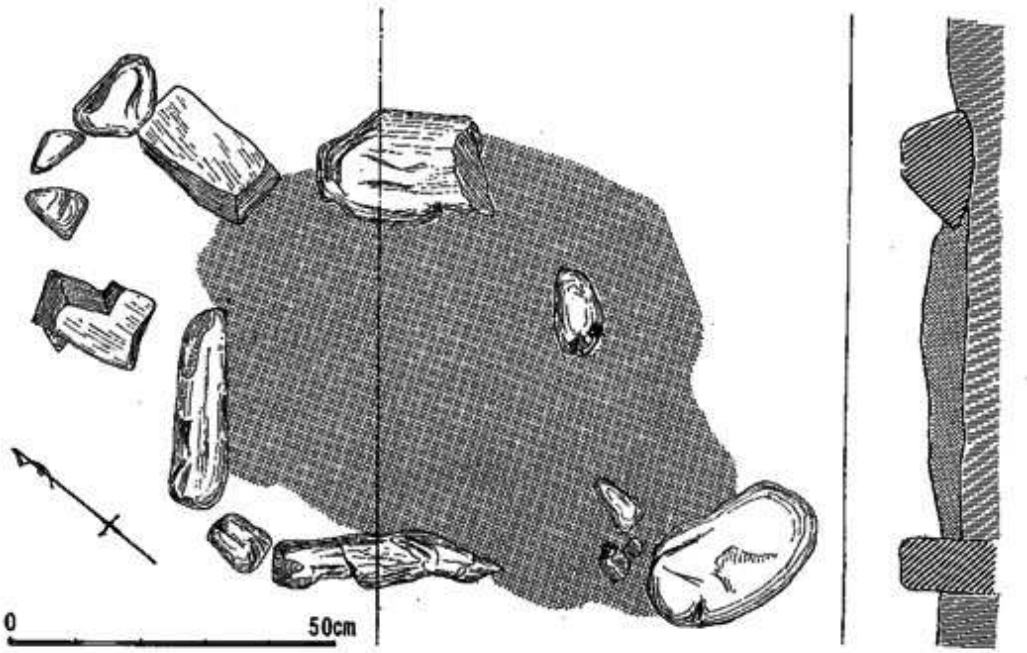
遺物の包含量を平面的にみると，県道寄りに多い。これは第1層と第2層，特に第2層の堆積の状態と密接な関係があるように思われる。また，発掘地点と西南の農協の敷地の間にも多量の遺物が出土し，県道を越えた民家の庭にも若干の散布がみられたというから，遺跡の中心はⅡトレンチ附近から，現在県道が舗設されている地点にまたがっていたものと推定される。第2次発掘では，土器の年代的な包含の層序を探索するために，10cm ごとに発掘層を区切ってみたが，後に各層包含の土器の比較をしてみたところ，それぞれの間に年代的な違いは認められるに至らなかった。しかし，後に述べる各種の遺構が第2層の下部に基底を置いていたことを考えると，佐野遺跡の主な生活面は，第2層下部に存したと考えてよいであろう。

Ⅱ 遺　構

(1) 集石址

第1次発掘の際，トレンチの各所で異状に大小の礫が固っている部分が注意された。はじめのうちは扇状地の礫石が多量に偏在している状態かと思われたが，それらの集石附近には特に遺物の出土量が多いことや，中には明らかに人工的な積み上げの状態を示しているもの（図版3の上）があることから，人為的な集石の址であることが判明したのである。Aトレンチ3区に発見されたもの（図版3の上）は積み上げ方に何かの作意が認められるが，その他はすべてただ雑然と大小の礫を寄せ集めたにすぎないという状態で，いづれも第2層下辺に基部を据えている。Aトレンチでは3区のほかに，5区に2個所（図版4の上，下），6区に1個所（図版5の上）発見され，Bトレンチでは1区に1個所（図版5の下），2区に1個所（図版6の上）3区に1個所（図版7の上）検出されており，合計7個所の集石址が認められたことになる。いづれも集石の下に土壙のようなものはなかった。なお，AトレンチとBトレンチにおける集石址の配置をみると（第2図）あたかも対象的な状態を示しているが，リンゴの樹列の間をぬってトレンチを設定したにすぎないから，全体的には果して規則的な配置であったかどうか疑問である。

また，注意しなければならないのは，集石址附近に遺物の出土量が多かった現象とともに，Aトレンチ5区および6区の集石址の間から比較的多量の獣骨―主としてシカ―が発見されたことや，Bトレンチ2区の集石址では，石塊の間に10余個の石鏃が混入し，焼土もみられて一部の石塊には明らかな火焼痕が認められたことである。縄文晩期におけるこの種の遺構は，群馬：千網谷戸の積石が早くから知られているが，佐野の調査関係者が調査した例だけでも，新潟：緒立，長野：大明神[1]，長野：保地[2]の3例もある。近年の例では埋葬に関係ある集石址に特に注意が払われ[3]，縄文文化の各年代にわたって非常に多くの例が知られるようになった[4]。しかし，佐野の集石址が埋葬に関係する遺構としての兆候はまず認めることができないとしてよいであろう。広く何かの儀礼的な行為に関係ある遺構と考えておきたい。



第4図　Ⅲトレンチ石囲みの炉址（1：120）黒点部分は焼土

（2） 石囲みの炉址

Ⅲトレンチの1区と2区の中間，第2層の下部面に6～7個の大きな川原石で囲った不整形の炉址が発見された（図版8の下・第4図）。焼土は長径約 90cm，短径 65cm ほどの範囲に拡がり，3cm から 7cm の厚さに堆積していた。周囲の石には焼けただれているものも見受

註 (1) 藪田芳雄「千網谷戸」
(2) 永峯光一他「新潟県西蒲原郡緒立遺跡の調査」日本考古学協会第26回総会研究発表要旨
(3) 樋口昇一「長野県西筑摩郡大明神遺跡」日本考古学年報15
(4) 関孝一「長野県保地遺跡発掘調査概報」考古学雑誌51ノ3

けられた。当然，住居址に伴ったものと思われるが，土壌の性質上，竪穴の壁あるいは床面のような跡を検出できなかった。

（3） 埋設土器

Ⅰトレンチ4区において，底をぬいた甕形土器が第2層下辺に埋設されているのが発見された（図版9の上）。使用された土器は，56の列点帯が胴部に施される甕で，口縁から20cm以下は比較的きれいに打ち欠かれていた。（田川幸生）

第3章　出土遺物

第1節　土　器

佐野の土器が，亀ヶ岡式土器の変遷に照らして晩期の数型式を含むことは，昭和7年に採集資料が紹介された当初からすでに判明していたことであった。そしてそれらが，新古の系列と同時代的な構成とに，どのように組み合せられるかということに調査のもっとも主要な目的があったのである。だが残念なことに，包含の層序も特定の土器群の分布についても，分析に価する現象はついに把えることができなかったのである。

ところで佐野の土器は，地域的な様相がかなり強く，近隣の地方における同時期の発展過程に一概に同定できない面があり，また，強い影響を受けたと考えられる亀ヶ岡式土器の変遷上の約束を忠実に受け継いでいない場合もある。亀ヶ岡式土器の影響がその時期その時期において，併行する地方的な型式に必ずしも鋭敏な反映をみせず，大勢としては亀ヶ岡式の推移に対応しつつも，同時に地域性の保有が強化される現象は，何も佐野の土器だけに限らない。それにしても地方色の強い表出にもかかわらず，この地域には型式の分離について適切な遺跡の存在に多くを望めない現状は，佐野の土器の編年的な編成をむづかしいものにしているもっとも大きな原因と考えられ，また，亀ヶ岡式土器に現れる年代的な尺度の適用が万能とは思えない傾向も，問題の解決を一層困難にしていることを否定できないであろう。またその反面，佐野遺跡に後期の発掘資料が絶無といってよいことはまことに恵まれた条件といわなければならないであろう。単に取り扱う年代の巾が狭まることだけではなしに，個性に富み，その上，比較資料に乏しい一つ一つの資料の分類が，どれだけ容易であるかわからないからである。

ともかく，佐野の土器に混在する諸型式の生成と展開とにおいては，亀ヶ岡式文化の伝播地域としての共通性を示しながらも，そこにはむしろ小地域的な特色の表出が卓越した状態がみられるといってよい。しかし，変化の基調はやはり亀ヶ岡式土器の変遷に由来する現象と考えられることは，亀ヶ岡式文化の周辺における型式の本質的な性格に関係するのである。

幸い，佐野には多量の亀ヶ岡式土器が搬入され，模造されている。もっとも明瞭な手がかりとしてまず取り上げてみよう。

なお，説明に当っては模式図を主にしていきたいと思う。拓影や写真はたしかに資料そのままの姿を示すことができる。しかし，大部分が破片である場合には遺物の全容を伝えにくい

し，その上，佐野の土器のように地方色に富み，類似資料に比較的乏しいものは，なかなか器形や文様構成を復原的に理解していくことがむづかしい。そこでいろいろな角度から検討を加え，器形の想定はもとより，文様帯の構図がこのような意図をもって描かれたものであることを，それぞれの模式的実測図に表現したつもりである。報告の手段としては，同時に欠陥ともなり得る場合も考えなければならないが，足りないところは随時他の方法によって補うことにして，第一義に土器の様相を理解し易くすることを考えたわけである。

I　A群　いわゆる亀ヶ岡式土器

亀ヶ岡式土器とは，比較的小形の精製された有文土器を代表として，東北地方の晩期に作られた土器の総称であることはいうまでもなく，多分に感覚的に呼ばれる場合が屢々である。だが，狭義の亀ヶ岡式文化の中枢は東北地方でもいわゆる奥羽の地域にあり，その中にも幾つかの地域圏があると考えられている。また，西は近畿，北は北海道南部にわたる広域の分布圏のうち，東北南部から新潟辺までが第1次伝播圏，関東や中部山地は第2次伝播圏，北陸・東海・近畿が第3次伝播圏というように，ほぼ同心円状に影響の密度を薄めていく分布の状態が跡づけられるようになった。

第1次伝播圏においては，亀ヶ岡式本来の規格に則った土器と若干地域化した土器が混在するが，両者の関係は非常に密接で，第2次伝播圏以西の土着的土器とは大きな違いがある。第2次伝播圏では亀ヶ岡式土器の伝播に伴って生起した土着的な土器に対して，少量の第1次伝播圏を含めた東北地方の土器が搬入され，あるいは模倣されている。更に第3次伝播圏に移ると，在来的な土着の土器が主体となってそこに亀ヶ岡式の影響によって生じた少量の土着的土器，あるいは模倣した土器が客体として混在し，稀に第2次伝播圏に関係なく搬入されたとみなされる土器も存する。亀ヶ岡式土器の伝播を図式的に説明すれば，以上のような現象を大まかに表現できるであろう。

ところで第2次伝播圏に入る佐野の亀ヶ岡式土器は，実際上，隣接する第1次伝播圏から搬入されたものであろう。従って，中枢地本来の規格を保つ土器と第1次伝播圏的な規格に変容をとげている種類があるはずである。だが，第1次伝播圏を含めた東北地方の亀ヶ岡式の地域性については，まだ体系的に記述される段階に至っていないので，その違いが明瞭な場合，例えば粗製深鉢形土器などについて，両者の区別を指摘することが比較的容易であるほかは，地域性についての詳しいことは充分にわかっていない。また，模倣品の場合には比較的忠実に規格を守っているものより，模倣が甚だ粗雑で原型における約束が便化してしまった方の種類が遙かに多く，中には果して亀ヶ岡式の名称のもとに一括してよいかどうか疑問となる例もあるが，ここでは極めて常識的な区切りをつけておいた。

(1) **A群土器の分類**

〔i〕 ＡＩ類　搬入された亀ヶ岡式土器

胎土には精良な粘土を用い，灰黒色に勝った色調を呈するものが多く，薄手である。また，亀ヶ岡式土器の規格的な文様，器形，突起などがみられ，加飾部位にもほとんど変化はない。一見判別が可能である。次の種類がある。（注記のないイタリック数字は図版番号，〈 〉内は同一土器をさす）

(a) 皿形土器

〈イ〉　発達した雲形文が飾られる種類（*1*〈第５図２〉・*2*〈第５図10〉・第５図３～６・８・９・11～15）　体部文様に発達した彫刻的な雲形文を描き，ほぼ直射状に開く形態が圧倒的に多いが，中にはやや内彎気味の第５図５・14・15もある。口縁部の明らかなものでは２個１対をなすいわゆるＢ突起の列が飾られるのが普通で，第５図５のように平縁の形態は稀少である。底部は揚げ底である場合のみが認められる（*2*・第５図８・９・11）。

体部の雲形文には，磨消縄文を伴うものと少量の縄文のない場合（第５図11・15）とが含まれる。縄文はすべてLRである。また第５図５の口頸部には２溝間の截痕がみられ，第５図15では赤色塗彩の痕跡が認められる。次の〈ロ〉の種類に対して段違いに多い。

〈ロ〉　体部文様の描かれない種類（*3*・第５図７）　〈イ〉のように華麗な体部文様をもたず，その部分を縄文の回転によって充塡しており，使用される原体はLRである。器形は〈イ〉と変らない。*3*の口端には凸起列が加飾され，頸部には３条の平行沈線がある。７は頸部文様として２溝間の截痕が重ねられている。なお，この〈ロ〉の作りは〈イ〉に較べるとやや粗雑気味である。

(b) 台付皿形土器

4〈第５図１〉は極めて規格的な亀ヶ岡式の形態であって，体部には発達した雲形文が描かれ，器面には黒漆状の顔料が塗られている。坏の部分は皿と変らない。

(c) 注口土器

5〈第５図19〉は上半部を欠損しているが，算盤玉状の典型的な形態をとることがわかる。体部には彫刻的な雲形文が描かれ，稜をなす部分には凸起列がめぐる。文様帯の縄文はLR。

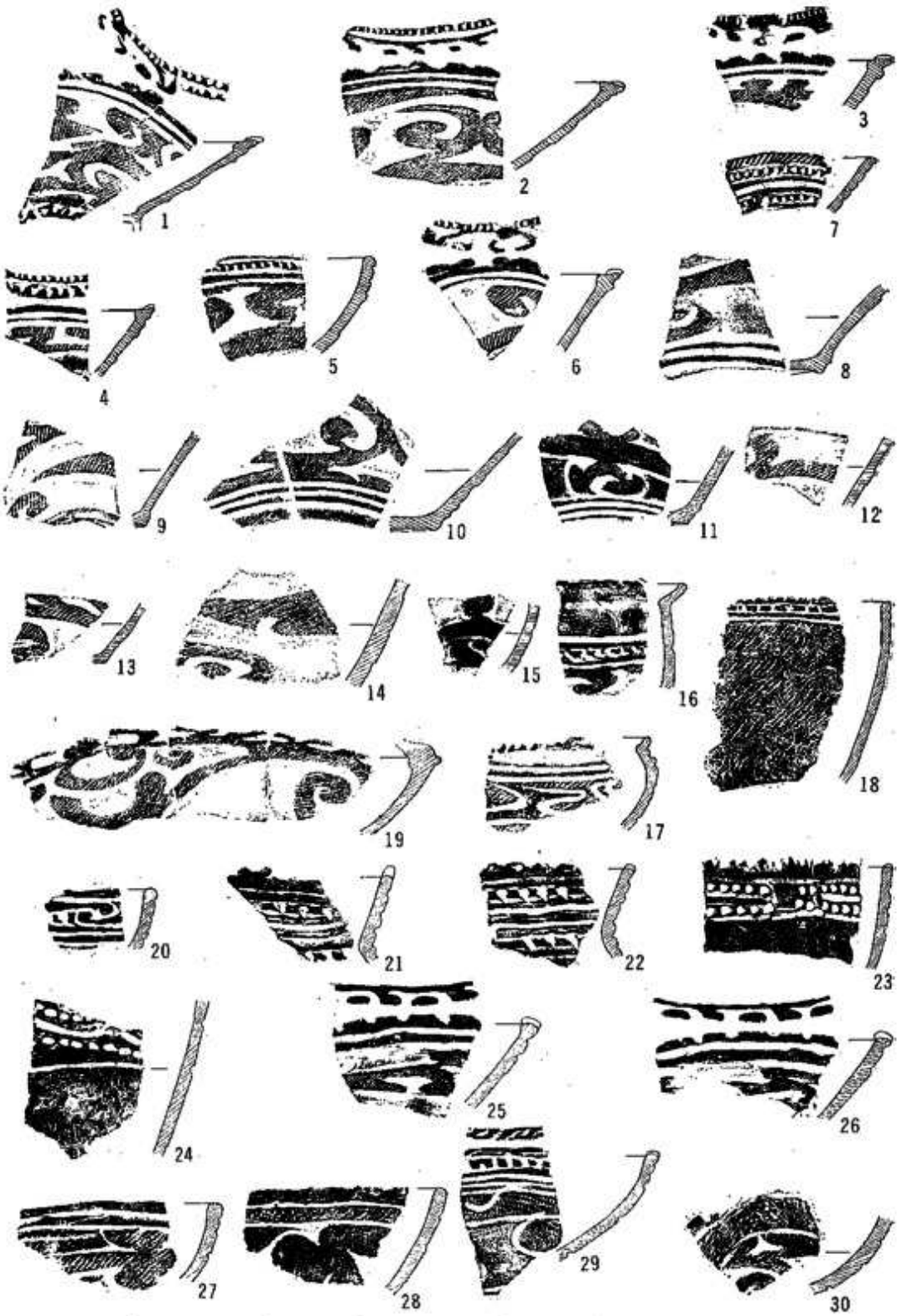
(d) 壺形土器

図示した筒形の壺（*7*〈第５図16〉）のほかに広口壺の種類もある。７の体部文様は縄文のない半肉彫の雲形文で，刺突文帯を伴う。

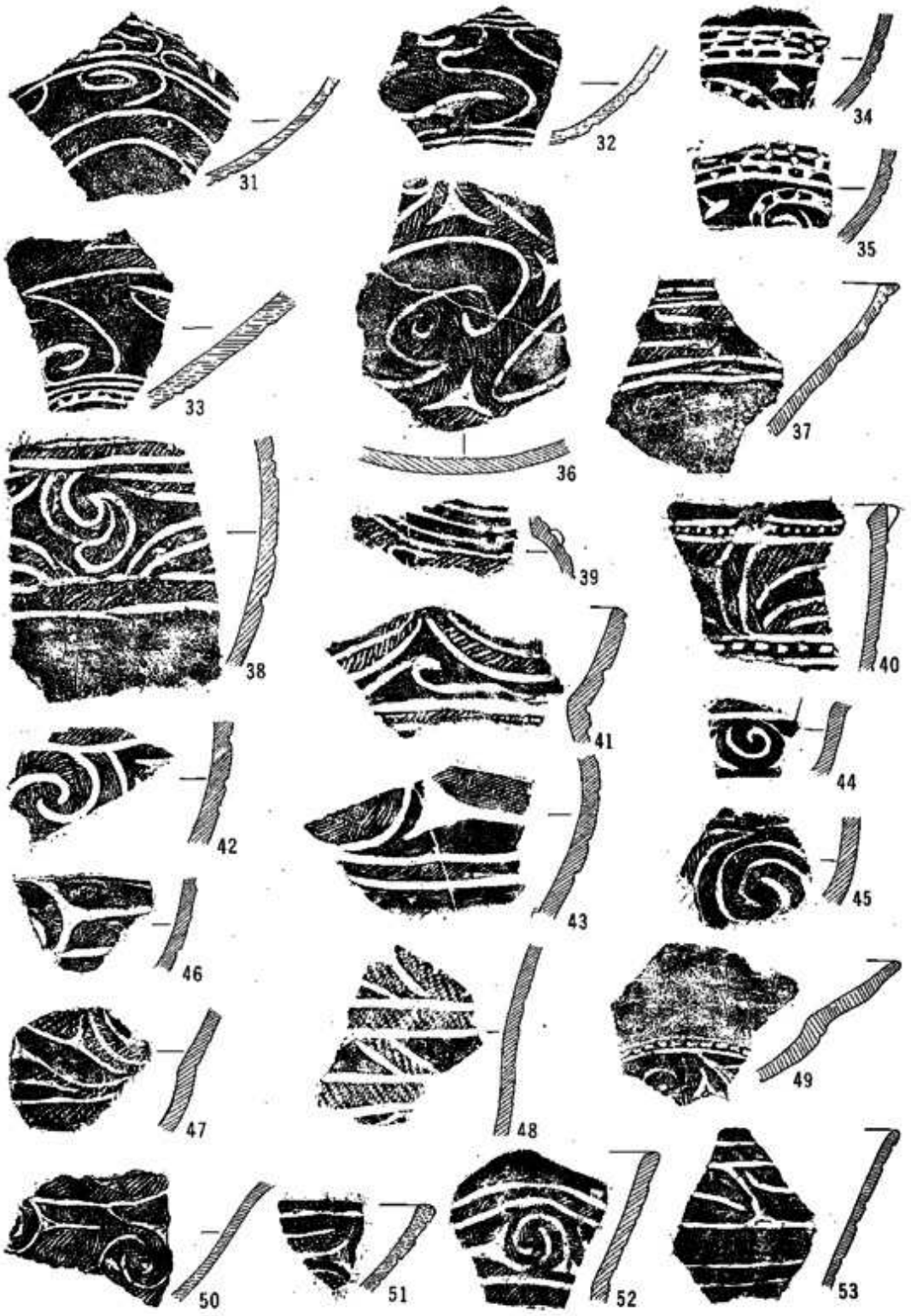
(e) 鉢形土器

体部文様を有するものと然らざる種類とがある。更に体部文様にも２種類ある。

〈イ〉　発達した雲形文が飾られる種類（*6*）　口縁が内屈した浅鉢。体部にはLRの縄文がつ



第5図　A群土器(1～30) (1：3)



第６図　A群土器(31～39)　B群土器(40～53)(1：3)

けられた雲形文が半肉彫風に描かれる。口頸部には彫刻的な截痕を伴う平行沈線がある。

〈ロ〉平行化した雲形文の種類（*9*〈第5図17〉）　短かい口縁部が外屈し，肩の張る浅鉢。口端には2個1対の凸起が配され，そのほかの部分には截痕が加えられる。口頸部は平行沈線で埋められ，体部に磨消縄文を有する平行化した雲形文が沈線によって描かれる。縄はLRである。雲形文の沈線の用い方がやや粗雑で，搬入品とするには若干のためらいを感じたが，胎土の精良さでここに分類したものである。

〈ハ〉体部文様をもたない種類（*8*〈第5図18〉）　口縁が多少内彎気味で，体部はLRの縄文によって満される。口端には細かい截痕が施され，頸部には2溝間の截痕がある。なお，縄文部分の下は沈線によって区切られる。

(f)　縄文を施した粗製深鉢

中部山地における晩期後半のはじめまでの粗製土器には，無文土器が地域的な存在として認められる。そこで僅かに混在している縄文がつけられた粗製土器は，まず搬入品と考えてよいであろう。胎土が無文土器と明瞭に異なることもその裏付けとなろう。

〈イ〉斜縄文の種類（*10*〈第10図57〉・第10図56・58）　*10*は口縁が内彎する形態でLRの縄文が横帯をなして重ねられる。なお，図示しなかったが，羽状縄文をなす小破片があった。56・58も斜縄文であるが，*10*のように明らかな横帯をなさず，58では斜方向の回転も併用している。

〈ロ〉縄の結節が現れる種類（第10図59～64）　LRの縄の結節が横のS字状圧痕となって続く。ただし，64は2条の太い縄によって，別に結節をつけている。

〈ハ〉網目文の種類（第10図65・66）　単軸にRの縄を十文字に絡め，横に回転させることによって生じた網目文である。

〈ニ〉撚糸文の種類（第10図67・68）　R⁻の縄を単軸に右巻きのコイル状に巻きつけて描き出した斜行する撚糸文。

以上の粗製土器は無文の粗製土器に対して，極めて微量な存在にすぎず，〈イ〉斜縄文，〈ロ〉結節のある斜縄文，〈ハ〉網目状撚糸文がそれぞれ数個体づつほぼ等量に認められるほか，〈ニ〉は図示した破片だけに止まる。器形を推察できるのは*10*・59だけであったが，他のものもほぼ内彎気味の口縁であったのであろう。胎土には小石粒を含有するが，よく焼きしまり器形の大きさの割には薄手であった。

〔ii〕　AⅡ類　模造された亀ヶ岡式土器

搬入されたものに較べ，胎土は精良さを欠き，概して厚手となる。また文様が便化し，あるいは稚拙な模倣に止まる。器形にも地域的な様相の現れる場合がある。

(a)　皿形土器

口頸部文様に羊歯状文を有するものと，体部文様に各種の雲形文が飾られる種類とがある。

〈イ〉羊歯状文が飾られる種類（第5図20）　多少内彎した口縁の外側に先端の噛み合った羊歯状文がめぐる。佐野では唯一の例で，また，このような器形の口頸部文様に羊歯状文が採用された例は珍らしい。

〈ロ〉磨消縄文による雲形文の飾られる種類（第5図25～30，第6図31～33・36）　亀ヶ岡式土器における雲形文を模倣あるいは模倣しようとした意図が汲み取れる一群。だが，精粗巧拙の振幅は著しい。25・26などは搬入された種類に近いが，それでも全体的に手法が鈍であって，ことに口唇の凸起列の表現は明らかな形骸化を示し，27・28はそれに近いものの明瞭に模倣とわかる例である。25・26のように亀ヶ岡式の規格に近似し，手法も良好な種類を当地方における模造品として決めてしまうことには問題がある。あるいは第1次伝播圏の所産かもしれないが，模倣，搬入の実態は一様でないという含みをもたせて，ここでは模倣品として扱っておきたい。

また，30の縄文は細くまばらであり，29・31～33・36は本来の半肉彫の手法に代えて，沈線で雲形文を描いているが，雲形文そのものは稚拙な構図に変化している。なお，36は算盤玉状の注口土器である可能性をもつ。

〈ハ〉沈線による曲線的文様の種類（第6図34・35）　この種類には磨消縄文は用いられず，曲線的な区画帯を刺突状の刻み目で塡め，空間部には三叉文を伴う。曲線的な区画帯はおそらく雲形文か唐草文の構図をまねたものと推定され，上部にある平行線間の刺突文帯は2溝間の截痕，あるいは羊歯状文を現わそうとしたらしいが，そこには僅かに亀ヶ岡風の意匠をまねようとしたことがうかがえるのみである。

(b)　壺形土器

比較的忠実に亀ヶ岡式風の文様を描いたものから，脱化の著しい種類まで各種存する。

〈イ〉入組帯状文の種類（*12*）　徳久利形の壺の下部で，入組帯状文がみられる。しかし，沈線による区画帯内の縄文が磨消されているのは，東北における場合の逆である。LR。

〈ロ〉雲形文の種類（*11・14*）　*11*は体部文様に発達した雲形文が飾られ，彫刻的な浮文帯を伴う。口縁が外反し頸部が短い特有の器形である。*14*は広口壺ともいうべきで，口縁に2個1対の凸起がある。文様帯には花弁状の区画帯があり，内部の縄文は磨消される。雲形文から脱化した意匠と考えられる。

〈ハ〉頸部に瘤状凸起の飾られる種類（*13*・第6図39）　頸部に瘤状の凸起がつけられているが，*13*のように比較的大形で刺突文帯を伴うものと，39のように小形で，雲形文帯を伴うものとがある。亀ヶ岡式では，この種の瘤は普通四方につくが，ここでは8個になっている。*13*の体部には文様帯が飾られなかった公算が大きい。

(c)　鉢形土器

羊歯状文がつけられる土器と，雲形文が飾られる種類とがある。

〈イ〉羊歯状文の種類（第5図21～24）　何れも平行沈線間の刺突文帯が2条乃至数条重ねられて口頸部文様をなしている。21・22は頸部がくびれた鉢，他は普通の鉢形を呈する。また，21の口端には小突起，22には粗い截痕，23には細かい刻み目がみられる。

この種の刺突乃至截痕帯を羊歯状文の変形として取り扱うことは，なかば習慣化しており，また現に独特の描写法をもって，2段あるいは数段重ねられるのが普通である。口頸部文様としての羊歯状文は広く近畿地方にまで模倣され，単独に用いられることがほとんどで，土着化しない曲線的な磨消縄文そのほか，亀ヶ岡式の規格的な文様に併用して模倣される場合は，少くとも第2次伝播圏以西では指摘が困難であろう。

〈ロ〉磨消縄文による雲形風文様が飾られる種類（第6図37・38）　37は直射状に広がる浅鉢，38は多少胴のふくらんだ鉢で，ともに器体上半に崩れた雲形文風の磨消縄文帯が飾られる。

(2)　A群土器の年代的区分

A群　いわゆる亀ヶ岡式土器	AI類　搬入された亀ヶ岡式土器	(a) 皿形土器	〈イ〉発達した雲形文が飾られる種類 〈ロ〉体部文様が描かれない種類
		(b) 台付皿形土器	
		(c) 注口土器	
		(d) 壺形土器	
		(e) 鉢形土器	〈イ〉発達した雲形文が飾られる種類 〈ロ〉平行化した雲形文の種類 〈ハ〉体部文様をもたない種類
		(f) 粗製深鉢形土器	〈イ〉斜縄文の種類 〈ロ〉縄の結節が現れる種類 〈ハ〉網目文の種類 〈ニ〉撚糸文の種類
	AII類　模造された亀ヶ岡式土器	(a) 皿形土器	〈イ〉羊歯状文の種類 〈ロ〉磨消縄文による雲形文の種類 〈ハ〉沈線による曲線的文様の種類
		(b) 壺形土器	〈イ〉入組帯状文の種類 〈ロ〉雲形文の種類 〈ハ〉頸部に瘤状凸起のある種類
		(c) 鉢形土器	〈イ〉羊歯状文の種類 〈ロ〉磨消縄文による雲形風文様の種類
		(注口土器)	

第1表　A群土器における器形と文様の組合せ

A群土器の中には，すでに明らかなように数型式にわたる変化が予想されるとともに，それに則応する器形と文様との組合せが存在する。前条においては，器形と文様の組合せによって包括される類形を分類したが，それらをどのような型式上の系列に置きかえることができるであろうか。

A群土器は精粗

とりまぜて一見複雑な展開をみせているようである。しかし，器形と文様の組合せの類形に分類すると，それは意外に限られた範囲の変化にすぎないことがわかる。分類した類形を整理してみよう。

第1表の通り，器形の基本的な類形は6種，加飾の方法もまた基本的には5～6種類に限られていることがわかるであろう。それらが相互に組合せられて，分類できた20種類に表出されているにすぎないのである。

さて，これらの土器群を年代別に整理する場合，もっとも指標になるのは文様帯その他の加飾，および器形との組合せであろう。そのうち文様帯としては発達した雲形文，平行化した雲形文，羊歯状文があり，加飾としては口唇などの凸起列，頸部の瘤状凸起などが手がかりとなるであろう。ただし，搬入された亀ヶ岡式土器の場合は躊躇なく対比できるにしても，模造されたものについては，稚拙な模倣による崩れた文様そのものから，モデルを推定するにはいろいろ問題が残る。便化の著しい雲形文もその例にもれない存在である。

亀ヶ岡式における体部文様としての雲形文は，たしかに大洞C_1式に至ってもっとも発達し，主体的な文様として存在するが，その初源はすでに大洞B式の一部に唐草文風の磨消縄文帯として現れる。だから原形を模倣し，しかも著しくかけ離れて単に曲線的図案となった文様の原形が，どの時期の亀ヶ岡式に対比できるのか，文様だけでは比較できない場合があるわけである。AⅡ類a〈ロ〉に分類した皿のうち，沈線で縄文部分に曲線的な文様を描く第5図29・第6図31や，AⅡ類b〈ロ〉とした壺の*14*およびAⅡ類c〈ロ〉の鉢のうち第6図38などはその好例である。そこで亀ヶ岡式の規格をみると，大洞BC式以前において体部文様に唐草文と呼ばれるような曲線的な磨消縄文帯が飾られるのは原則的に丈の高い壺や鉢の種類であって，浅い皿のような器形には，非常に少ないといって差支えない。また，一般に大洞BC式土器が模倣される場合，羊歯状文が2～3の形で単独に飾られるのが普通である。口頸部文様として唐草文などと併用され，あるいは唐草文などの体部文様だけが模倣されることは，第2次伝播圏以西の地方では指摘できる明瞭な例がないとしても過言ではない。そういう傾向からみれば，佐野における模倣の本体が明瞭でない便化した磨消縄文帯の種類が，C_1式の雲形文を模倣しようとしてできた図案としても大きな過りはないであろうし，口頸部文様としての羊歯状文の種類を伴う兆候が認められないことも，C_1式以前ではない裏付けとなるだろう。

また，AⅡ類a〈ハ〉に分類した皿の文様も比較の対象を亀ヶ岡式に求めようとするには，あまりにも崩れている。その上，口頸部に3段に重ねられた刺突文帯は，3段にも重ねた点2溝間の蘇鉄の模倣とすれば稀少な例となろうし，羊歯状文の便化とすれば体部文様に併用して模倣された珍らしい例になる。いずれにしても，対比させる原形をきめかねるものである。

そのほか，AⅠ類e〈ロ〉の平行化した雲形文の鉢が大洞C_2式への傾斜を示すことは明らか

であり，AⅡ類b〈イ〉入組帯状文の種類は晩期初頭の文様を写したものといえる。更にAⅡ類b〈ハ〉の頸部の瘤状凸起がC1 式に多用され，一部はC2 式にも及ぶ加飾物であり，AⅠ類fの粗製深鉢が，亀ヶ岡式の前半から後半にかけてほとんど変化なく用いられていた保守性の強い形態であって，そのうち網目文や結節を伴う種類が，東北南半から新潟方面にかけて一般に行われていたことは，いうまでもないであろう。

A群土器の年代的な区分を整理すれば，第2表のようになる。

分類		器形	大洞B　大洞BC　大洞C1　大洞C2	個体数と概数
AⅠ a	イ ロ	皿		約20
AⅠ b		台付皿		1
AⅠ c		注口		4
AⅠ d		壺		9
AⅠ e	イ ロ ハ	鉢		1 1 1
AⅠ f	イ ロ ハ ニ	深鉢		2～3 1～2 1 1～2
AⅡ a	イ ロ ハ	皿	?	1 約10 1
AⅡ b	イ ロ ハ	壺		1 9 2
AⅡ c	イ ロ	鉢		10余 7
		(注口)		(1)

第2表　A群土器の年代的区分

AⅠ類とした搬入品についてみると，鉢の1例を除いたほかは，精製土器のすべてが大洞C1 式によって占められるという顕著な現象がある。また，おのおのに数量的な差はあるが皿・台付皿・注口・鉢・深鉢と亀ヶ岡式の基本的な器形を網羅していることも注目される。模造されたAⅡ類においても，やはりC1 式の時期にもっとも多く作られていて，器形の種類も多様である。大洞BC式に併行しては，皿および鉢に羊歯状文の飾られる場合があるだけである。

更に，具体的に趨勢を明らかにするために，A群土器に含まれる類形それぞれの個体数を調べてみよう。

佐野の2回にわたる発掘で検出された土器片は，リンゴ箱にぎっしりつめて30余箱に達した。そのような膨大な数量の破片の過半数あるいはそれ以上と思われる分量は，無文土器または無文部分の破片によって占められる。だが，整理復原の作業が有文の種類を主として一通り行うだけの機会しか得られなかったので，細かい数字をあげることができない類形がある。特に無文土器については，口縁部破片について検討しただけであるから，その膨大な破片量から推定して，更に増加を見込まねばならないであろう。それでも明らかにできた個体数の量は，

全体でおよそ500個体を超えるものと推察された。また，A群土器についても類形的な小破片を多量に残す種類は，その概数を推定する以上のことは困難な状態であった。

A群土器の個体数および概数は第2表に記した通りである。その総数はAⅠ類で約40個体，AⅡ類では40個体を若干超えている。明らかにされている土器の総量に対して，驚くほどの高い比率であるといわねばならない。

AⅠ類の精製土器の大部分がC_1式によって占められていることは，すでに明らかにしたが，その総量は30数個体ある。そのうち皿が約20個体で過半数に達し，次いで壺が4分の1程度，他は附随的な存在にすぎない。つまり，C_1式の時期には皿を主体として搬入されている現象が認められるのである。それはAⅡ類にも共通する傾向になっていて，C_1式に年代を同じくして模倣された種類では，皿がもっとも多い。しかし，他の器形—壺や鉢との比率は搬入された種類のように甚しい差はなくなっており，20数個体余のうち，皿が約10個体，壺が9個体，鉢が7個体と近似した割合になっている。

BC式については，搬入された形跡が全くなく，羊歯状文およびその変形的な模倣がやや目立つ程度である。皿の1例を除いては鉢に10数個体が認められる。C_1式の時期に較べると数量的には，著しく低位にある。

以上のように，佐野における各種の亀ヶ岡式の状態から考えれば，大洞C_1式に比定される多くの土器が搬入せられ，また，それに対比できる多量の模倣がなされていて，圧倒的に強く亀ヶ岡式文化との交渉をもっていたのが，この時期であったことがわかる。なお，BC式の時期にも若干目立つ対比例をあげられるが，数量的な差違だけに限らず，それらはすべて模倣された場合のみである点，C_1式の時期とは著しく異なるものを感じられる。B式については，入組帯状文以外は他と明瞭に区別のつく小形の精製土器が一般的な存在となっていない時期であるため，その年代以降に較べると判然としない点が多い。その他，三叉文の中で亀ヶ岡式本来の形を保っているものも，けっして多いとはいえない。

このような亀ヶ岡式との関係における時期的な偏向は，数時期に分れる佐野の土着的土器それぞれに大きく作用していたに違いないから，これからA群以外の土器を分析し，編年的に編成する上に，基本的な指標として常に考慮しておかねばならないであろう。

Ⅱ　B群　三叉文の種類

佐野における各種の三叉文は，多くは磨消縄文を伴ってかなり目立つ存在である。だが，三叉文・三叉入組文だけで文様帯が形成される場合は少く，大部分は入組文や渦文などに組合され，むしろ補助的な存在といっても過言ではない。とはいっても，文様帯の構成の変化に伴って三叉文の配置や形態にも変化があり，むしろ三叉文の使い方如何が文様帯の形態を左右して

いる。その意味で関係する文様を三叉文・三叉入組文の変化に基いて考えてみた。

いうまでもなく，三叉文は大洞B式の時期にもっとも多用されるが，関東の安行Ⅲ式を通じては亀ヶ岡式における変遷とは対応しない独特の展開がみられ，北陸地方では晩期初頭の地方的な発達もある。佐野の三叉文もまた，それらの地方にみられる推移と関係を保ちつつ，地方色が強く表出されるようになっていく。

(1)　三叉文の分類

三叉文はその展開の過程で殊に入組文と密接な関係を有し，その上，描写のスタイルが非常に狭い範囲での変化に止まるため，それが地方的な特色とからみ合って発達の段階を区切るような変化の段階を見出しにくい点がある。佐野にみられる三叉文を通観した場合，次の2グループに基本的な大別ができる。一つは連鎖的な横帯に入組む場合であり，他はそうでない種類である。

まず，あまり広くない文様帯を構成する要素として用いられる場合，沈刻される三叉文自体は入組まず，入組文または渦文・円文などと対照的に，稀には非対照的に併用されることが多く，また，先端が噛み合い入組んではいても，連鎖的な横帯をなさない様相がある。それを非連鎖的三叉文と呼ぶことにする。しかし，三叉文が他の文様と併用されるものでも，胴部全体にわたる，例えば唐草文とか雲形文などの間隙に不規則に配されるものは含めない。この非連鎖的三叉文の種類は，まだ地域的な色彩の稀薄な段階であって，周辺の地方の三叉文と共通する面が強い。

非連鎖的三叉文が入組文などに併用されて文様帯を構成する主体的な要素となっていないように，連鎖的な横帯をなす三叉文も，三叉文というよりはむしろいわゆる入組文を表出しようとする意図に基く文様であって，三叉文はその陰刻部とみなすべき存在であるといえる。しかし，入組文の変化は明らかに三叉文の駆使の仕方に基いている。また，磨消縄文が併用される場合が大部分で，そのため文様帯に強いアクセントが現れている。この種類を連鎖状三叉文と呼ぶことにする。非連鎖的三叉文に較べると，非常に地域的な色彩が濃い。

ところで，非連鎖的三叉文のうちで，特定の器形だけに描かれる構図がある。3個乃至4個の三叉文が左右上下に配置されて一単位の文様を構成する場合であって，山形口縁をもつ深鉢形土器だけに飾られることが注意される。多くの非連鎖的三叉文が地方色に乏しい様相を呈する中にあって地域的な特色を有し，今のところ極めて限られた分布が認められるにすぎない。非連鎖的三叉文のうちで，特に抽出して分類しておきたいと思う。

〔i〕　BⅠ類　非連鎖的三叉文の種類

(a)　皿形土器（第6図51）

口頸部文様として互に異方向の三叉文が1対となって横帯を作り，その間に弧線が配される。三叉文と弧線にはさまれた部分には，細かい刺突が施される。文様帯の上下は沈線によって画されているらしい。文様の構成としては，いわゆる三叉連結文に通じるものをもっている。

(b) 壺形土器

口縁が外屈し，胴部が比較的張った丈の低い形態をとるものが多いらしいが，いづれも小破片のため全形をうかがうことができない。

〈イ〉 上胴部の文様帯に同一方向の三叉文が陰刻される種類（20） 口縁および上胴部にはLRの縄文が施られ，同一方向の三叉文が横に並んで陰刻される。口頸部を区切って二本の沈線がめぐり，その間は刺突文で填められる。三叉文帯は単独に文様帯をなすものでなく，おそらく入組文帯と併用されたのであろうが判然としない。

〈ロ〉 上胴部の縄文帯に異方向の三叉文が1対となって並列する種類 口縁部に無文，上胴部の沈線に区切られたLRの縄文帯に異方向の陰刻された三叉文が1対となって，横方向に並ぶ。三叉文の底辺が背中合せになる部分とに沈線が1本描きこまれて，文様に変化を与えている。第7図の模式図で示せば3の種類に当る。

〈ハ〉 胴部の縄文帯に沈線による簡単な渦文状の入組文を中心として，三叉文が配される種類 口縁部は恐らく無文。第7図8の文様に当る。

〈ニ〉 上下異方向の三叉文が交互に組合されて並列する種類（23） 異形の壺形土器。小形で丸底をなす下胴部の縄文帯に上下異方向の三叉文が交互に組合されて並列する。異様に拡がった上胴部の上縁には，直線的な縄文帯が描かれる。

BⅠ類の三叉文の壺には，三叉文だけが文様帯を形成しているものはなく，三叉文が渦文や縄文帯と併用され，また，直線間の列点，直線的な縄文帯なども同時に飾られているようである。

(c) 浅鉢形土器（第6図44・47・49）

口頸部と胴部のくびれる浅鉢。44は口頸部下に沈線による渦文と三叉文とが配され，47は同様な沈線文に縄文が伴う。49もおそらく渦文に三叉文を組合せたもの。ともに地文をなすLRの縄文は部分的に磨消される。

(d) 深鉢形土器

上胴部がくびれる種類と円筒形または朝顔形のものとがある。

〈イ〉 上胴部がくびれる深鉢（第6図41～43・45・46） 胴部文様に沈線で描いた渦文に陰刻三叉文が配され，その上下に直線的な縄文帯を伴う。文様帯内の縄文LRは部分的に磨消される。そのほか，円文を中心に異方向の三叉文が相対して1単位を形成するいわゆる玉抱き三叉文第7図7や同じく9のような三叉文の場合も見当る。また，9のような若干噛み合った三叉文が，他の沈線文帯と重ねられるものもある。中には明らかな文様帯をなさない場合

もあるが，何れにしても横方向の文様として他の文様とともに胴部を飾っている。

口頸部文様としては，第6図41のような入組文と縄文帯の組合せもあるが，多用される例とはいえないであろう。山形口縁をなす場合が多いようである。

〈ロ〉円筒形または朝顔形の深鉢（第6図40・48・53）　40は円筒形の深鉢。口縁外側には刻み目をつけられた縦長の突起があり，口頸部文様として刺突文帯に上下を画された三叉文がある。同一方向に並列する種類で，三叉文の間には横または縦の弧線が，隣り合う三叉文の1辺と平行に加えられ，LRの縄文は部分的に磨消される。胴部文様は不明である。48は口頸部から体部にかけて数帯の直線的な縄文帯がめぐり，その間，口頸部には三叉文帯，体部にはおそらく連続山形をなす直線的な縄文帯が飾られる朝顔形の深鉢である。区画帯外の縄文は磨消される。この土器の縄文がRLであることは特異である。53は口頸部に上下交互に配される三叉文に弧線が配されたもので，第7図6のような形態である。縄文を伴わない。

〔ii〕 BI′類　数個の三叉文が組合さって1単位をなす種類

この種の三叉文は篦描き沈線による区画として描出され，すべて深鉢形土器の口頸部文様として描かれる。

〈1〉 三叉文の先端が入組まない種類（*28・29*）

5個の頂部をもつ山形口縁の深鉢で，胴上部がくびれ，口縁は外傾し内側にやや肥厚する。口縁に沿って弧状の凸帯がめぐり，連続刺突が加えられる。山形口縁の頂部には1対，裾に1個の瘤状凸起がある。三叉文帯は下部を直線的な縄文帯に画されて口頸部文様として存し，三叉部分の配置は不規則である。体部には上下の縄文帯の間に，同一方向の三叉文（*28*）とその変形と考えられるT字状文（*29*）が飾られる。区画帯の内部は割合いに規則的な縄文の磨消が行われ，文様効果をあげている。LRである。

三叉文の組合せは，山形口縁を中心とした部分の5個所におのおの1単位づつみられ，その間は*28*では縄文帯，*29*では刺突のある凸帯によって区画されている。

〈2〉 三叉文の先端が渦巻状に入組む種類（*26・27*）

*27*の器形および文様帯の配置は〈1〉と全く同じである。ただ，三叉文の配置が規則的で，その上，先端がカールして入組む点〈1〉と異なるだけである。*26*は1単位をなす三叉文の組合せの間に区画が描かれず，連続文様として口頸部をめぐる。その構成は*27*と全く同じである。体部文様帯は存在しない。山形口縁は4個，器体の側面は曲線的で，甕の形に近いものになっている。

BI′類の非連鎖的三叉文をもつ深鉢は，今のところ佐野以外では1例をあげうるに止まっている。縦横に重畳された三叉文は，飾るべき口頸部の広い大きな山形口縁をもつ深鉢の器形と関係があるに違いない。

〔iii〕 BⅡ類 連鎖状三叉文の種類

更に3つの類形に分けることができる。

〈1〉 沈線と陰刻による連鎖状三叉文のみが飾られる種類

(a) 皿形土器（15）

丸味を帯びた方形の皿であって，口縁の角に1個，その間に1対の小凸起がある。三叉文はそれぞれの側面に4対が対照的に描かれ，3条の沈線によって画される。底部には円文がある。

(b) 深鉢形土器（16）

4個の山形をもつ口縁は外反し，頸部はくびれる。山形の頂部には刻みがつけられ，裾には小凸起が貼りつけられている。口縁に沿って刺突が加えられて凸帯がめぐる。小形である。文様帯は上胴部のみに施される。

(c) 甕形土器（17）

口のすぼまった甕の口頸部文様として連鎖状三叉文が描かれ，その上下には沈線が施される。この〈1〉は器形の分化に乏しく，全く縄文などを併用しないこと，焼成が悪く胎土も黄灰色であるなど，明瞭に区別ができる。

〈2〉 連鎖状三叉文帯と縄文が別個に併用される種類（18）

胴上部がくびれ，口縁が外反する浅鉢である。口縁部にはLRの縄文が飾られ，胴上部に2本の沈線で区切られた連鎖状三叉文帯が描かれる。口縁内側には1本の沈線が加えられる。仕上げが非常に良い。

〈3〉 磨消縄文を伴う連鎖状三叉文の種類

(a) 皿形土器（19）

口頸部に直線的な縄文帯があり，その下に先端が「の」の字状に入組んだ三叉文帯が飾られる。区画帯内の縄文は一部分が規則的に磨消される。三叉文帯の下部にも多分直線的な縄文帯が存したものと思われる。

(b) 浅鉢形土器（21・第6図50）

上胴部がくびれる浅鉢形。21は口頸部に細い縄文帯がめぐり，上胴部にはT字形の刻みが交互に加えられた横帯と連鎖状三叉文帯とが重ねられる。三叉文の手法は(a)と全く同じである。50の連鎖状三叉文帯には直線的な縄文帯を伴う。

(c) 壺形土器（22）

口縁が外屈し，算盤玉状の胴形である。文様帯は上胴部に施され，上下を縄文帯が挟む。三叉文の噛み合う部分に1本の弧線を加え，三ヶ月状の部分を作り出す。縄文の磨消は規則的に行われる。

(d) 深鉢形土器（24・25・第6図52）

24は8個の頂部がある深鉢で，山形口縁の間に2個宛の小凸起が加えられる。口頸部文様として2条の連鎖状三叉文帯があり，その上下は縄文帯によって画される。三叉文の部分では入組文状に磨消縄文が残されている。体部文様は明らかでない。25は多分7個の頂部がある山形口縁。口縁部の反りはにぶく，上胴部の張りが強い。口縁に沿う刺突のある凸帯と縄文帯とにはさまれた部分の口頸部文様として，大形の連鎖状三叉文帯が存する。縄文は入組状の部分に残される。52は24の器形に似るが，三叉文先端のカールが著しい。

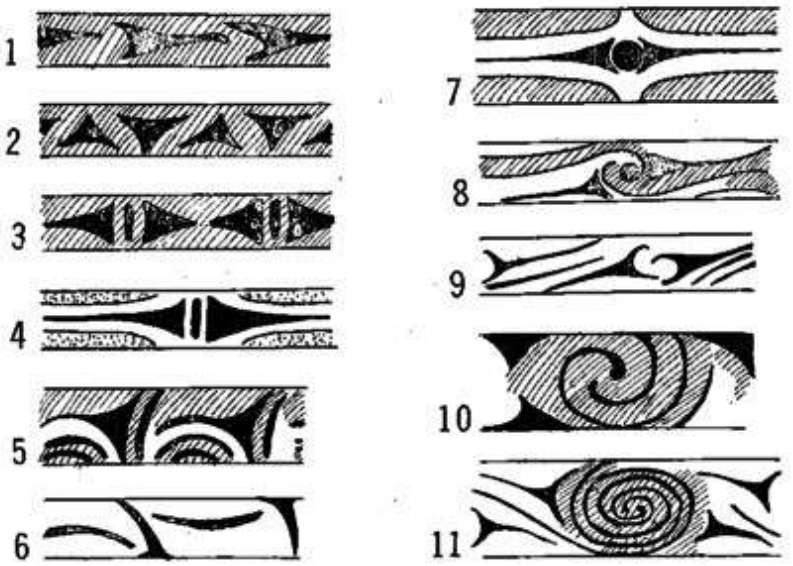
(c)　異形土器（第10図54）

胴下部が稜をなして著しく張った異形の土器である。稜の部分は瘤状凸起の列によって飾られ，胴部には幾つかの四角な縄文帯の区画があり，内部に先端が著しく巻いた三叉文が，区画に沿って配されるらしい。

(2)　三叉文の系譜

佐野でみられる非連鎖的三叉文の種類は，資料に良好なものが得られないため，器形全体にわたる文様帯の配合はよくわからない。従って，型式的な分類上，姑息な方法であっても三叉文自体の変化に基準を置かなければならないわけである。

第7図は佐野に存在する非連鎖的な三叉文の形態を模式化して描いたものである。ただし，



第7図　佐野遺跡出土土器の非連鎖的三叉文模式図

同図8・10・11の種類では，渦文の構成に三叉文が関与して，三叉文の1本の先端がカールして入組み合う構図になっている例がある。そこでみると，規則性に乏しい複雑さを思わせる非連鎖的三叉文も，意外に簡単な基本形に整理されることがわかる。それらが器面を飾る主文様

帯となったり，あるいは補助的な文様帯になったりしているのであるが，そのように他の文様帯と併用されることが多いことと，個々の場合によって文様帯の巾が広くなったり狭くなったり，重畳して明瞭な文様帯を形成しなかったり，または縄文や沈線が加えられたり加えられなかったり，若干ずつの変化の振幅があることなどが，文様描写の稚拙さと相まって煩雑な展開をしているように思えるわけである。

晩期前葉の非連鎖的三叉文には，第7図に掲げた以外になお相当の類例がある。だが，それらをすべて抽出することが，この場合必須のことがらとは思えないので，佐野にある11種の形について，その動向をたどっていきたい。

この11種には，同一のモデルから派生した変化が幾つも存するから，類形として更に少数の種類にまとめることができる。そうしてみると1・2，3・4，5・6，10・11などは同一の意匠の範囲で作られた変化であるといえるし，更に7と3・4，8と9などの間にも密接な関係を認めないわけにはいかない。しかし，これらの文様のバラエテイが生じた基本にはどのような形態の種類が存在したかということについては，やはり亀ヶ岡式本来の非連鎖的三叉文の発生と展開の過程で，検討しなければならない問題であろう。

亀ヶ岡式における非連鎖的三叉文の基本的形態の問題はさておき，佐野で使用されている三叉文のうち，亀ヶ岡式の規格的な形態を保つものは7・8・9であり，多少の違いはみられるが10もおそらく含めておいてよいであろう。もちろん，このほかに幾つかの種類が加って大洞B式の標準的な文様の一部となっており，一方，10のようなものは祖形はB式にあっても，むしろBC式になって現れてくる文様と考えられるものであるが，7・9のような種類は頸部文様，8の種類は体部文様として使用されていることが多いという大まかな傾向があるらしい。佐野の非連鎖的三叉文の種類と加飾位置を整理すれば，第3表のようになる。

三叉文	皿		壺		浅鉢		深鉢	
の種類	口頸	胴	口頸	胴	口頸	胴	口頸	胴
1				○				
2				○				
3				○				
4	○							
5							○	
6							○	
7								○
8				○				○?
9								○
10						○		○
11								○

第3表　非連鎖的三叉文の加飾部位

亀ヶ岡式に在来的な三叉文は，周辺の地域で模倣される場合，文様自体が多少ずつ変貌するとともに，先述した加飾位置の大まかな傾向も必ず踏襲されているわけではない。佐野の非連鎖的三叉文においてもその傾向が認められるのである。だが，明瞭な地方色となる現象が検出できるかどうか，今は判然としない。

ところで，第7図7・8・9のような三叉文

は，その一種類または数種類が，他の形態の若干の三叉文や入組帯状文，入組文など大洞B式に在来的な文様とともに，近畿地方を西限とする広い地域に普遍的に伝播し，それぞれの地域に新しい土着の土器を発生させたり，あるいは在来的な系統をひく土着の土器にまじって，客体として存在したりした。大洞B式の影響のもとに形成された地方的な土器群の中で，もっとも著しいのは関東の安行Ⅲa式土器であり，以後，関東では三叉文の系統が晩期前半を過ぎる頃まで独特の発達をとげることとなった。また，北陸では八日市新保式，御経塚式が晩期初頭の地方色豊かな三叉文系の土器群として展開し，中部山地の北半を中心として存在する佐野の仲間も，大洞B式の強い影響をうけて生起した三叉文系の土器といえる。そして周知のように，亀ヶ岡式の第2次・第3次伝播圏に当る関東，北陸，中部山地，東海道，近畿の各地間では，それぞれの土着的な土器が交互に侵透し，強くあるいは弱く影響し合っている。

佐野における非連鎖的な三叉文のうち，1のような同一方向に向いた横の配列と，2の上下異方向の楔形三叉文の交互組合せは，北陸の御経塚式の特徴的文様につながるし，3・4の異方向三叉文が1対となって並列する場合も北陸の規格[1]に関係がある。八日市新保式の連結三叉文はT字形の沈線文であって，佐野のように楔形の彫り込みではないが，隣り合う三叉文[2]の先端が連結すれば直ちに連結三叉文に転化するものであるから，3・4と北陸の連結三叉文とは極めて親縁の関係にあるとしてよいであろう。これら1・2・3・4の種類は大部分が1個体ずつの出土に止まっているところをみると，北陸の三叉文の受入れあるいはその影響によって描かれた構図と考えてよいであろう。1・2の種類が北陸以外の地域で発見されたのは佐野だけであり，また，3の種類は千曲川沿岸地方では稀に存し，4の種類が東海の清水天王山の中層a類の中に1例認められる以外は，今のところ全く見当[3]らないようである。とにかく，特殊な分布を示すことになりそう[4]である。

5は横に並ぶ同一方向の三叉文の間に沈線の加えられることが基本の形であろう。三叉文間の沈線は狭い縄文帯や列点帯におきかえられる場合もあり，基本形を同じくする文様は御経塚式の主要な構図の一つでもある。しかし，御経塚式のそれは，口頸部や体部の巾が狭い文様帯として使用されており，佐野のように巾の広い文様帯として描かれることはない。それよりも，新潟の信越国境山地の葎生[5]や願聖寺[6]に全く同一例が発見されていることを重視すべきだろう。

註(1)　高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」押野村史
(2)　(1)に同じ
(3)　永峯光一「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて」石器時代1
(4)　清水市郷土研究会編「清水天王山遺跡」
(5)　中川成夫・岡本勇・加藤晋平「葎生遺跡」立教大学博物館学講座調査報告4
(6)　浦川村教育委員会編「願聖寺遺跡」浦川村文化財調査報告1

10の渦文に三叉文を配した構図の原形は大洞B式の口縁部などによくみられる中心に円文のある楕円形の素文部の周囲に三叉文を配置した文様ではないだろうか。しかし，円文が渦文に変化するのは，筆者の乏しい知見による限りでは，大洞BC式の時期に移ってからのようである。そして，東北地方における渦文は，土器の文様としてよりも，土偶・土版・岩偶・岩版の文様としての方が一般的存在になっており，時代が降るに従って渦が発達する傾向にあるらしい。また，前述した渦文の構成に三叉文が取り入れられ，三叉文の端がカールして互に入組む状態となった形も少くない。その場合，同様にして8から変化した文様とそれだけでは区別をつけられないことがある。両者とも亀ヶ岡式の規格的形態が変形をした姿である。11のように渦文が螺旋状に発達した状態は，もはや晩期初頭の規格でないといえるであろう。そして文様帯部分に附加されている縄文を取り去れば，安行ⅢC式の構図に酷似する文様となってしまう。直ちに安行式と結びつけるわけにはいかないが，考慮しておいてよいことからである。

BI′類として特に抽出した深鉢は，土器の全容をつかみにくい非連鎖的三叉文の種類にあって，珍らしく器形と文様の様相を明瞭に知ることのできる例であり，そこには地域的な色彩を濃厚に持ちそなえる姿がみられる。*27*～*29*の器形にまず注目する必要がある。5個の山形をもった大きな口縁部，くびれた頸部，肩が張った比較的急にすぼまる胴部の構成は，関東地方の後期後半に確立された深鉢の系列に由来するものであることは，一見明らかであろう。口縁部に瘤状の凸起が残っているのも同じ趨勢に基く現象であろう。

1組をなす3～4個の三叉文が，横ばかりでなく上下にも重ねられる形状は，山形口縁のように一部分の巾が広くなる場所を埋めるために，当然起りうる口頸部文様の手法であった。そしてその文様帯が山形口縁の数に準じて区切られることは，第7図5の三叉文のあり方と関係をもつ手法としてよいと思われる。三叉文の配置は次第に規則的になっていく傾向をたどることができ，*28*—*29*—*27*の順にその過程が認められ，更に文様帯が区切られない*26*に通じている。また，三叉文の配置が整ったBI′類〈2〉の段階においては，三叉文配置の中心に渦文が置かれ，その構成に三叉文が関与して尾がカールし，互に入組んだ状態となる。第7図10の段階の三叉文になっていることがわかる。体部文様としての同一方向を向いた三叉文の配列は，もっとも口頸部文様の整っていない*28*にその原形を止め，それは第7図5と同趣の種類である。それが*29*・*27*のような直線的な区画帯に変化することは，まず疑いのないところであって，口頸部文様の変遷にも則応している。

さて，BI′類の三叉文は，そのもっとも整った段階において，関東的な山形口縁の深鉢から，大きな山形口縁をもってはいても器体の立ち上りが曲線的な器形*26*に移される。そしてそこには口頸部文様の区切りはなくなり，体部文様も失われ，関東的な色彩をもはや感じさせることはなくなっている。この系統は連鎖状三叉文をもつ甕に受け継がれ，更に鐃の手文や綾

絡状入組文が飾られる土着的な甕形土器に続いていくことになる。

この種類の深鉢は，前条で触れたように，今のところ同じ千曲川沿岸の長野：保地[7]で1例を指摘できるだけである。

晩期初頭から中葉にかけて，地方的な土器の特性が次第に蓄積されていく過程の所産であろう。

連鎖状三叉文は，広い意味では入組三叉文または三叉状入組文などと呼ばれている形態と同種であるといってもよいが，向い合った三叉文の先端が互に噛み合っているとか入組んでいるとかいうことだけでは，充分な説明とはならない。異方向の三叉文が1対づつ連って横帯をなす場合，隣り合う単位どうしが三叉文自体の長さとほぼ等しいくらい重なり合い，あたかも鎖状のつながりのようになっている状態を呈することが重要な条件であって，単に向い合う三叉文が噛み合うとか入組み合うということばかりではないのである。そこに連鎖状三叉文と呼んだ理由があった。

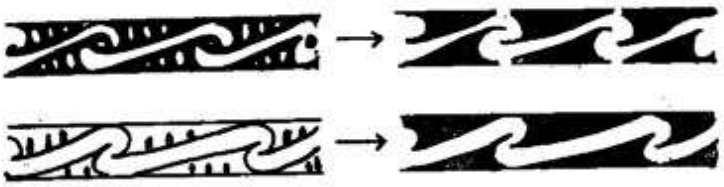
連鎖状三叉文を含めた入組三叉文について，一般には三叉文自体の変化によって生じたと解釈されることが多いようであるが，入組文や渦文に附随する三叉文が，入組文や渦文に連結することによって生じた変化の方が大きいのではないかと考えているし，連鎖状三叉文の発生も三叉文帯が自然に整った連鎖状の横帯に変化したのではなく，そこには何か原因となる事態が想定されてよいのではないかと思っている。

連鎖状三叉文と親縁性の強い種類に北陸：中屋式[8]のいわゆる三叉状入組文がある。だが三叉状入組文は文字通り入組文からの発展形と考えるべきものであって，連鎖状三叉文のように文様部分に縄文が加えられたり，先端がカールして入組んだり，弧線が附加されたりすることは全くなく，はるかに単純な様相であるが，文様帯が重ねられる特徴がある。文様帯を重ねることは，連鎖状三叉文では2段の場合が1例だけ認められるにすぎない。

亀ヶ岡式の伝播圏のうちでも，関東・中部山地・北陸は晩期中葉までは三叉文が盛用されていた地方で，その基礎は大洞B式の規格による三叉文の伝播あるいは模倣と，それに伴う土着的な三叉文の生起によって形成され，以後，長い伝統をもつことになったのであった。とにかく，晩期初頭には三叉文を好んで使う素地が，それぞれの地方にできていたといえるであろう。そのような状態のところへ新しく羊歯状文が伝播してくる。羊歯状文は原形を模倣する手法に巧拙の差はあっても盛に作られると同時に，地方によっては三叉文帯を描写する手法に羊歯状文の構図が導入される。そこで発生したのが非常に整った横帯をなす連鎖状三叉文の構図であると考えたい。第8図に模式的に示したように，先端が噛み合う羊歯状文でも，噛み合わ

(7) 関孝一「長野県塩尻郡保地遺跡発掘調査概報」考古学雑誌51ノ3
(8) 沼田啓太郎「旧石川郡安屋村中屋遺跡調査報告」石川考古学研究会誌8

ない種類でも，基本的な下図は連鎖状につらなった三叉的図形であると考えられるから，三叉文と羊歯状文は結びつき易いこともあったのであろう。



第8図　羊歯状文と連鎖状三叉文の関係図

連鎖状三叉文のうちで，BⅡ類〈1〉に分類した種類は全く縄文を欠き，その上胎土が違い焼成も悪い。ひと目で区分することが可能である。また，おのおの1個体が検出されたに止まり，明らかに客体的存在である。ことに *15* の方形皿の形制は安行Ⅲ式的である。地域的な系統を異にするものであろう。

なお，*21* の浅鉢には，上下異方向をなすT字形の沈線文が交互に配置される文様帯を伴うことが注意され，深鉢の種類には体部文様帯が飾られない特徴がある。*24* の深鉢の器形は東北南部の新地式以来，晩期初頭まで存続する深鉢の形態を踏襲しているものと考えられる。

BⅡ類〈3〉とした磨消縄文を伴った連鎖状三叉文は，千曲川沿岸地域ですら明瞭にそれと指摘できる例は報告されていない。佐野においては特徴的な一群をなし，皿・壺・浅鉢・深鉢と一応の器形はそろっていても，量的に少ないことと関係がある現象であろうか。連鎖状三叉文の拡がりについては，なお検討を重ねる必要がある。

Ⅲ　C群　鍵の手文の種類（付）入組文

鍵の手文とは，多くの場合雷文または雷文風と呼ばれている種類のことである。しかし，雷文とは元来，方角をなす螺旋状の文様を指す言葉であって，縄文晩期におけるこの種類の文様はけっして雷文の構成をとっていない。雷文といえるものは弥生式の時代となって稀少例が指摘できるだけである。だから雷文という名称を，晩期におけるこの種類の文様の本態を表現するために適切なこととは思えない。よく使われている言葉の中では，鍵の手文という名称が，一番合理的であると考えられる。

また，三叉文がそうであったように，鍵の手文も本来の意味の入組文と造形上の意識が深く結びついているばかりでなく，別個の文様帯として同じ器面を飾ることもある。だが，入組文だけが単独で用いられる場合は，佐野では甚だ少ない。そのような点から，鍵の手文の項で入組文も説明しておこうと思う。

(1)　C群土器の分類

鍵の手文の種類は，佐野の土器をもっとも特徴づけている文様ともいえるものであって，他の遺跡に較べれば，極めて多彩な内容をもっている。基本的には次の2つの形態に区別できる。1つは文字通り「互」の字形に上下から入組んだ形，他は入組まない形である。

〔i〕 CI類　入組鍵の手文の種類

(a) 浅鉢形土器 (*31*)

口縁がやや内屈し，大きく開口する大形の皿ともいうべき浅鉢で，口縁に直線的縄文帯があり，その下に縄文を地文とした文様帯がめぐる。また，肥厚した口唇には，縄文を地文とし隆線がつけられた部分を起点とする沈線が施される。縄文の部分はすべて赤色に塗彩される。

(b) 甕形土器 (*35*)

球形に近い胴部に外屈する短い口縁がつく特有の形態で，口端には1対をなす凸起がつけられる。上胴部に直線的な縄文帯を挟み，入組鍵の手文帯と連鎖状三叉文帯とが飾られる。文様帯の中の縄文は部分的に磨消される。内面には輪積みの痕跡が明瞭である。

〔ii〕 CII類　鍵の手文の種類

(a) 皿形土器 (*30*)

上胴部に列点文帯に上下を画された文様帯がある。列点文帯は赤色塗彩され，口唇には複雑な装飾凸起があり，内側には1条の沈線が加えられる。

(b) 壺形土器 (*34・36*)

*34*は球形に張った胴部と外屈する短い口縁の大形壺で，文様帯は刻み目をつけられた隆帯を上下に伴う。鍵の手の間には点状の刺突が加えられている。口縁には1対をなす凸起があり，その直下に2孔が焼成後あけられている。外側はLRの縄文で満たされ，内側には1条の沈線がめぐる。因みに口縁部に孔があけられる例は，佐野でもまま認められる。有文土器にもあり無文土器の場合にもある。2孔がもっとも多く1孔がそれに次ぎ，3孔は1例だけである。*36*は外屈する口縁の形態や内外の装飾は*34*と全く同じであるが，肩はなだらかな線をつくり，下胴が張る形態らしい。鍵の手文帯の上半部に縄文が加えられる。

(c) 鉢形土器 (第10図55)

口縁が深く内彎して椀形を呈する。鍵の手文は方角とならず曲線的な曲り方をしている。羊歯状文からの変化を示す痕跡的な現象といえよう。数帯が重畳しており，文様帯部分の縄文はやや規則的に磨消される。

(d) 深鉢形土器 (*32・33*)

*32*は口縁が外屈し，胴のすぼまった形。上胴部の文様帯には，列点帯と縄文LRを伴う。口縁には1対の凸起が6組つけられ，内側には1条の沈線がみられる。*33*はなだらかに開く口縁とやや張った胴部とをもつ。上胴部文様帯は，弧線と直線とによって描かれた特殊な鍵の手

風の文様で，2段重ねられて縄文を地文とする。

(e) 甕形土器（*38・39*）

この種類の甕はいづれも外屈する短い口縁と球形に近い胴部との結合による形態で，CI類の甕とともに大きな特色をなしている。口縁には1対をなす凸起と，斜めに押した刻み目とが飾られている。

*38*は列点帯を挟み，鍵の手文帯と綾絡状入組文帯とが交互に2帯宛，都合4帯に重ねられる。それぞれの文様帯には加飾のあるものとないものとがあって，同一の形態ではない。*39*の鍵の手文は，文様帯の巾が広くやや異相を呈する。鍵の手文も縄文帯によって表現されている。LRの縄文である。

〔iii〕 CⅢ類 入組文

口縁が短く外反する類形的な壺の上胴部に沈線の入組文がみられる。波頭状に傾いた形である。口縁部には縄文がつけられ，頸部に列点帯がある（*37*）。

(2) 鍵の手文の発生と変化

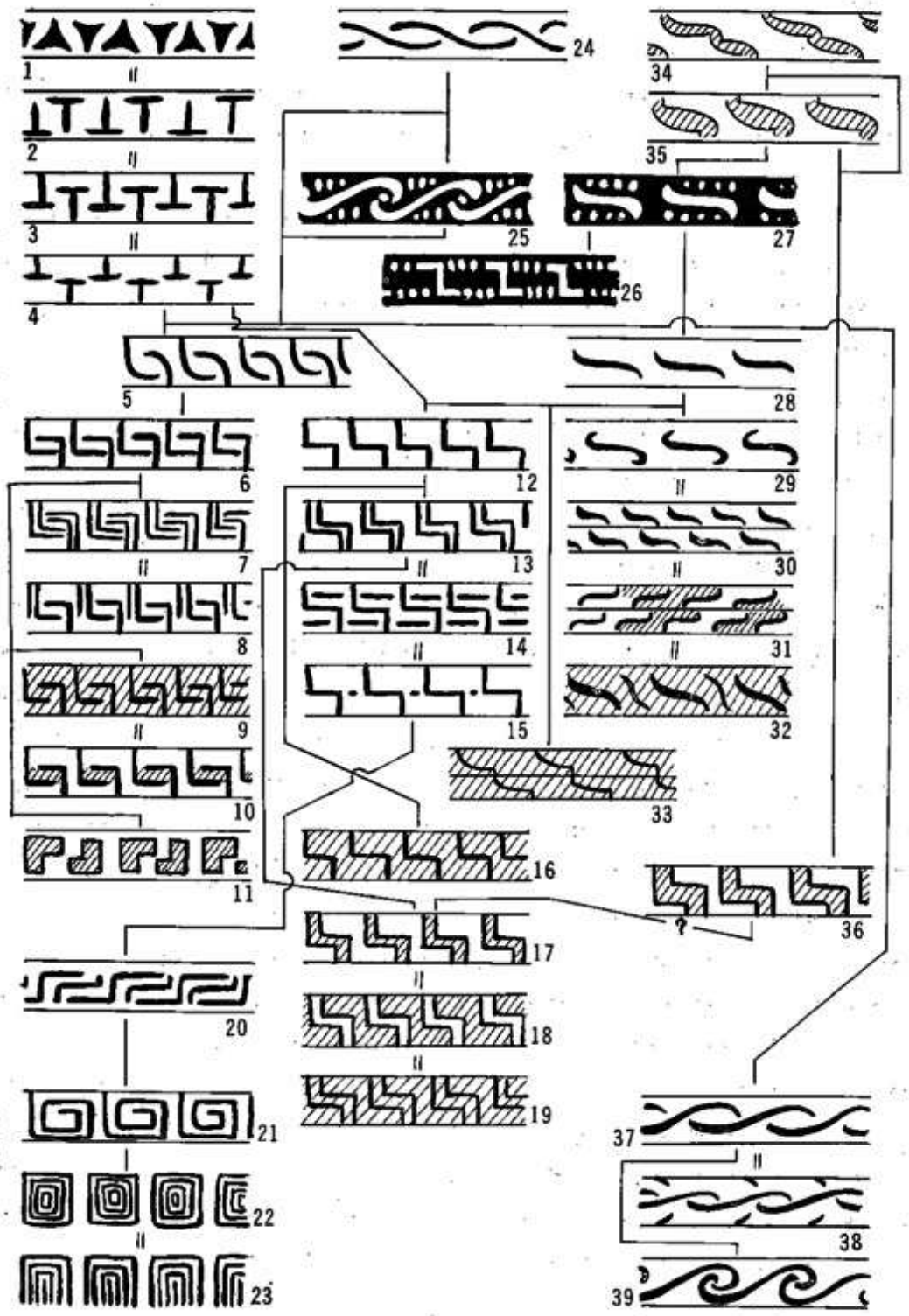
鍵の手文の発生と変遷については，市原寿文氏の所論がある[9]。氏は上下に方向を逆にするT字形の刺り込みを交互に横に並べることによってできた工字文風の文様から発生し，文様の描写が次第に洗練されていく。清水天王山においては中層b類（大洞BC式併行）に分類された中に出現し，上層a類（大洞C_1式併行）にかけて，その経過をたどることができると考えた。しかも，中層b類のものと上層a類のものとでは，後者が1本の沈線で描かれる違いがあるという。1本の沈線で描くというのは，多分入組まない鍵の手文のことであろう。向坂鋼二氏の見解[10]もほぼ同様である。しかし，はじめに述べたように，晩期の土器に現れる各種の文様は，幾つかの系統の文様の造形上の意識がからみ合っている場合が少なくないので，一つの文様の発生について，一系的に系統をたどるには，むづかしいことの方が多いのである。

幸い，鍵の手文の種類は大部分のものが規則的に繰返されると考えられるので，三叉文などに較べれば構図の復原は容易である。そこで類形を集めて，第9図のように整理してみた。鍵の手文には地域を問わず右傾するものが圧倒的に多いので，第9図では左傾する例だけが存する場合（大部分は1種1例に止まる）以外は，右傾のものとして描いてある。

CI類とした入組鍵の手文6は，1～4のような上下に異方向の三叉文が交互に並んだ種類に系統の流れがあることは，市原氏の考えた通りであろうと思う。ただし1～4のT字形が6にみられるL字形に自然的に変形したとは考えにくい。T字形の形態は地方化した三叉文の1

註(9) 「清水天王山遺跡」前掲註4に同じ

(10) 向坂鋼二「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」第四紀研究2ノ1



第9図　鏡の手文および入組文の種類と系統図

形として，それなりに根強い伝統に掉さすものであるからである。それに1～3のような三叉文の種類は，北陸の晩期初頭に典型的な構図で，周辺の地方では中部山地に僅かに伝わっているだけであるが，その本拠地である北陸地方での鍵の手文の存在は，痕跡的かつ種類の分化にも乏しいという事実がある。従って，入組鍵の手文が1～4のような三叉文（またはこの種の三叉文を駆使することによって生じた工字状文）の直系と考えるには不都合な現象であり，同時に鍵の手文の発生的中心が，北陸以外の地方にあることを意味している。そこで，入組鍵の手文は，T字形三叉文を描く造形上の意識と，24に基本形を示した入組文の造形上の意識とが結びついて発生した構図と考えたい。実際的には，入組文の発展形としての噛み合った羊歯状文25の伝播による影響であったのであろう。その場合，入組文の造形意識に対して，T字形三叉文のもつ方角に文様を描くという意識が影響したと考えた方がむしろ適切で，いわば入組文の方が土台になっていたわけである。市原氏が祖形として抽出した5の丸味を帯びた線の入組みは，入組文の構図が方角の造形意識の影響で変化しつつある過程を暗示している。

入組鍵の手文の基本形は6で，7・8のような変化があり，また，6でも縄文がつけられる9・10のような小変化や11のような区画帯化したものもみられる。

CⅡ類の鍵の手文が27のような噛み合わない羊歯状文の変化であろうことは，すでに指摘されている。現に第2・第3次伝播圏にみられる27の地方形である28およびその変化としての29～32と鍵の手文12との類似は否定することはできないであろう。[11] 27の羊歯状文が地方化し模倣される際に，方角の造形意識が加わって，12の鍵の手文を生じたとみられるのである。33は両者の中間的な形態といえよう。なお，26のような鍵の手文を構図の中に取り入れた羊歯状文が存在することも，CⅡ類の鍵の手文と羊歯状文の関聯の強さを如実に物語っている。

12の鍵の手文は，バラエテイとして13～15の形態をもち，小変化として縄文のつけられる16がある。13の2本の平行する沈線によって，いわば鍵の手の区画が作られる種類には，附加する縄文の使い方によって更に17～19の小変化がある。そして12～15の系列は20の形態に続く。吉胡晩期新の時期で，[12] これから更に真の雷文としての21が登場してくるのではないだろうか。この段階はもはや弥生式土器（唐古式）に移っており，やがて東日本の古式弥生式土器に時おり出現する重圏方角文22やコの字重ね文23に至るのであろう。

27の羊歯状文が，28の省略記号「～」形をした形態に変化することは，前に述べたが，その変化としては29～32がある。

一方，東北地方には入組帯状文34およびその変移形35に出自すると考えられている36が認められる。管見に触れたものは極く僅かであるが，巾の広い部分を飾る文様帯として用いられた

---

(11) 前掲「瘤生遺跡」註5に同じ

(12) 山内清男「第2トレンチ土器概説」吉胡貝塚　埋蔵文化財調査報告1

らしい。岩手：舟沢例は入組帯状文からの変化と考えられていて，後期後半の所産とされ，また，福島：寺脇貝塚では晩期初頭の帯状文からの変化とされている[13]。17～19のうちにも比較的巾の広い文様帯をなす場合があるから[14]，両者の関係を一応考慮する必要がある。しかし，入組帯状文は亀ヶ岡式土器の第2次・第3次伝播圏において，模倣（搬入された場合もあったであろう）され，あるいは土着的な土器群を飾る文様の一部として用いられることはあっても，土着の土器の文様形成に変化を与えるほど影響力は強くなかったらしい。それに対して羊歯状文は帯状文よりはるかに多く搬入され模倣され，土着の文様形成に大きな影響を及ぼしたことは，連鎖状三叉文やこの鍵の手文の例をみても明らかであろう。そのような状勢を考えれば，36との関係を全く考慮しないというわけではないが，同一の構図をとってはいても，実際的には17～19が36とはほとんど別個に存在したものとみてよいであろう。

では鍵の手文の変化が，地域的にはどう現れているか第4表に整理してみよう。

地域的な分布をみると，まず，CI類入組鍵の手文の存在が大部分東海道方面に片寄っていることに気がつくであろう。ことに基本形と考えられる6が，中ノ沢の1例以外，すべて東海地方に集中している観があり，またその変形の所在も同方面に顕著に現れている。その反面，CⅡ類の鍵の手文は中部山地にもっとも分布が濃く，基本形12の存在が東海地方では大変薄いことがわかる。おそらく，入組鍵の手文の発生的中心は東海地方にあり，そうでない鍵の手文は中部山地に中心があることを示している現象に違いない。だが，鍵の手文の種類が盛用された地域がむしろ中部山地であるらしいことは，佐野における多彩な展開によって推定することができるだろう。

そのほか，各地域で共有されている幾種類かのものも，直接あるいは間接的な地域間の交流を物語るものとしてよい。

また，縄文がつけられる鍵の手文の種類は東海道以西においては稀有であって，愛知：稲荷山の11を除いたほかは，すべて器面の滑沢部に描かれた文様として存在する。それは土器の製作手法の精粗に関係なくとらえられる現象である。縄文時代全般を通じて持ち続けられた縄文の使用に関する東と西の違いが投影されたことがらであろうか。

鍵の手文における二者が，年代の相違によって現れるものではなく，地域差に基いた現象であることはすでに明らかであるが，清水天王山で6の形と12の形とが，別個の文様帯として併用されている例があるのは，その有力な裏付けとなろう。また，佐野では12と15が併用されており，2つの基本形の幾つかずつの小変化が年代的な相違によることではないらしいと予想されるし，個々の場合についても，それぞれに併存する土器の間に年代的な共通性を見出しうるものがある。そして昨今では，各地の遺跡の伴存関係から，ほぼBC式からC_1式に併行する時

(13)　芹沢長介「石器時代の日本」口絵説明
(14)　馬目順一「後晩期土器の編年構造」寺脇貝塚

種類 / 地名	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	26	28	29	30	31	32	33	37/35
岩手・舟沢																									●
福島・寺脇																									●
新潟・葎生								●	●				●		●										
長野・佐野					●	●		●	○	●	●	●	●		○							●		●	
〃・保地								●															●		
〃・石神															●										
〃・中ノ沢		●						●																	
〃・上ノ段								●																	
山梨・小形山				●																					
石川・八日市新保								●																	
〃・御経塚										●															
千葉・堀之内													●												
東京・広袴			●																						
静岡・天王山	●	●						●											●						
〃・奥泉		●																							
愛知・吉胡		●		●												●				●					
〃・西屋敷		●						●																	
〃・稲荷山							●																		
滋賀・滋賀里																			●		●				
奈良・橿原		●						●										●							
〃・唐古																	●								

第4表　鑵の手文の類形と分布　（種類番号は9図参照　○印は神田氏採集品）

期の所産とすることにしばられてきたといってよい。清水天王山では中層b類乃至上層a類の時期に該当するし，稲荷山ではC1式併行のⅠ群土器に伴い，吉胡では晩期中にもっとも多く広袴では亀ヶ岡式土器としては羊歯状文のみを併存すること[15]，堀之内貝塚B地点でも伴存する亀ヶ岡式土器はBC式とC1式であること[16]，あるいは葎生でBC式風の体部文様が飾られる壺に12の形態が併用されていることなどである[17]。それ以外の遺跡でも，必ずといってよいほど，同期に比定される土器の混在が認められている。

他方，文様自体についても，すでに述べたように羊歯状文が直接あるいは間接に鑵の手文の起生に関与しており，また，整然とした横帯としての文様帯化，連鎖状三叉文との併用など

(15) 杉原荘介・外山和夫「豊川流域における縄文晩期の遺跡」考古学集刊2ノ3
(16) 鶴川遺跡調査団により昭和40年発掘調査された。
(17) 杉原荘介・戸沢充則「千葉県堀之内貝塚B地点の調査」考古学集刊3ノ1

も，羊歯状文との関係を物語る様相といってよいであろう。更に大洞C_2式に伴う事例は今のところ見当らないが，大洞A式の時期になると変形した20が吉胡晩期新に出現し，そして多分，唐古式の雷文に系統をつなぐことになるのである。

佐野における37の綾絡状入組文が24の入組文の伝統を受け継いだものであることは疑いのないことである。38のような変化および鍵の手文との同時代性は，佐野での同一個体にみられる併用によってはっきりしている。だが，佐野では唯一例である39は，入組部分が波頭状をなし，安行Ⅲ式での動向を参照すれば，若干後出的な形態と考えてよいかも知れない。

Ⅳ　D群　直線的な縄文帯の種類，(附) 類似する縄文帯の種類

原則として沈線による区画帯の中に斜縄文が附けられる種類で，文様帯は直線をなす。それに附随して他の形の縄文帯が飾られるものも含めた。縄文の原体は全部LRの撚りである。

〔i〕　DⅠ類　直線的な縄文帯の種類

(a)　浅鉢形土器（*40・41*）

側面がやや彎曲をもった浅鉢で，皿形に近い。*40*では口縁部とその下に2条，*41*では口縁部に1条の沈線に画された縄文帯がある。*40*では口縁内側にも縄文帯があり，また，縄文帯の部分は赤色塗装されている。図示のほかに数個体はある。

(b)　深鉢形土器（*43・44・45*）

いずれも口縁が少し内彎する。*43*の口唇には斜行する押圧による刻み目があり，*44*では1対の円形凸起がみられる。しかし，この凸起が何組つけられていたか明らかでない。2条の縄文帯が間隔を置いて附けられている。

〔ii〕　DⅡ類　綾絡状の結節がつけられる縄文帯の種類（*42*〈第10図69〉・第10図70）

皿形土器にみられる。*42*は斜縄文帯の上下に別に綾絡状の結節がつけられ，第10図70は斜縄文と同種の原体を用い整った綾絡状結節を押捺したものである。

〔iii〕　DⅢ類　直線的縄文帯に他の形の縄文帯を伴う種類

(a)　浅鉢形土器（*46*）

3条の直線帯の間に，2条の連続山形文帯を挟む。縄文部分は赤色塗彩される。

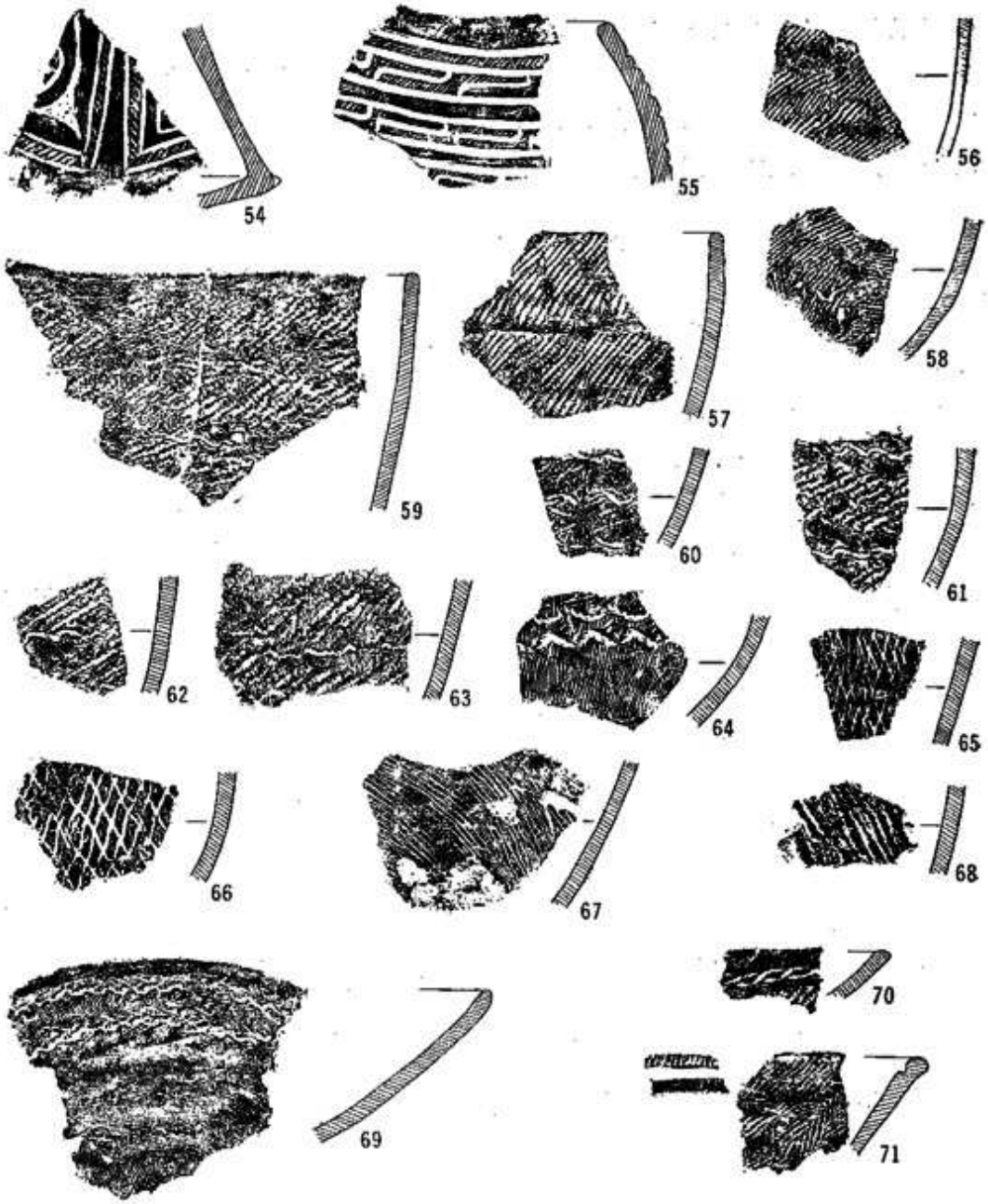
(b)　鉢形土器（*47・48*）

小形で*47*は綾杉状，*48*は弧状の縄文帯を体部文様として存する。

(c)　甕形土器（*50*）

外屈する短い口縁の甕で，広口の壺ともみられる。口縁には斜縄文が飾られ，胴部には連弧文がある。

なお，第10図71の鉢を併記しておこう。口縁内側に太い1条の沈線がめぐり，それより上部



第10図　A群土器(56～68)　B群土器(54)　C群土器(55)　D群土器(69～71)　F群土器(72～85)　(1：3)

の口縁内側と，外側には斜縄文が飾られる。回転の方向は一定していない。

D群のような縄文帯は，晩期前半を通じて広く使用されているが，中部山地を西限とした地方に類形が多くみられるのは，当然の現象であるといえるだろう。また，DⅡ類のような綾絡状の結節文は，直接には新潟地方に結びつく存在である。

V　E群　刺突列点文帯の種類

原則的に2本の平行沈線の間の円形刺突列点として存在し，本質的には口頸部の加飾として行われ，他の文様帯に併用されない種類である。

(a)　浅鉢形土器（*51・53*）

頸部がくびれる浅鉢の形態をとるが，*53*は口縁の外屈が急で，胴部が張る類例の少ないものである。口縁には斜縄文LRが施され，くびれ部に1条の刺突列点文帯が飾られる。

(b)　壺形土器（*52・54・57・58*）

口縁が短かく強い外屈を示めす点，共通した特徴をもつ壺である。*52・54*は口縁に縄文（LR）が施されるもので，*52*では口唇の細かい刻み目，*54*では口縁内側の刺突文が目立つ。列点文帯はくびれ部と，そこに近い上胴部にも加飾される。2段乃至数段が密接して重なる例はない。E群の中では最も多い。

(c)　甕形土器（*55・56*）

*55*は口縁の外屈度が弱く胴もあまり張らない形態で，口唇には細かい刻み目がつけられる。口縁部には縄文が施され，刺突列点はくびれ部にある。*56*は形態といい，口唇の加飾といいC群とした鍵の手文の種類の甕と全く同じである。刺突文はくびれ部から上胴部にかけて3列に描かれるが，沈線を失っていることが特異である。

刺突列点文土器について　E類の刺突列点文の源を探ぐれば，おそらく亀ヶ岡式土器の2溝間の刻み目に到達するであろうことは，間違いないであろう。その2本の沈線の間の截痕は，亀ヶ岡式土器において，羊歯状文に伴っても雲形文に伴っても，口頸部の加飾としてあるいは文様帯の上下を画する加飾として使用され，その痕跡は晩期後半の時期に持ち越される。その上，周辺の地域で模倣されるときには，截痕が次第に刺突風に置き換えられていく形勢を認めることができる。従って，刺突文の形態そのもので亀ヶ岡式土器の変化に対応する区分をつけることは困難である。問題は加飾の部位にある。口頸部の加飾だけが行われる種類では，羊歯状文やそれに伴う截痕の模倣は，独特の描写をもって2段から数段重ねられ，または別の沈線が加えられることが大部分であって，しかも，原則としては鉢形にだけ用いられる。他方，明瞭に2溝間の截痕を模倣したと考えられる実例は大変少ないが，E群のように鉢に限ら

ず，壺，甕の口頸部やそれに対応して上胴部に単独の加飾として加えられるのは，羊歯状文の時期よりも後に，土着的な手法となった公算が大きい。他の遺跡を見渡すと，大なり小なり雲形文またはそれに併行する土器が出土していることも，羊歯状文以後とする可能性の一端を支えていることとはいえないだろうか。

Ⅵ　F群　肥厚した口唇に装飾が加えられる種類

原則的に無文の浅鉢形にみられる口唇の加飾である。加飾の集中部の手法は沈線だけの簡単なものから，隆線や縄文を加えた複雑な形までいろいろある。この種の口唇加飾が北陸に発生的中心があり，中部山地や東海地方に拡がっていることはほぼ明らにされている。

〔i〕　FⅠ類　隆線と縄文とで加飾の集中部が構成される種類

佐野におけるF群土器の中で最も変化に富み，出土量も多い。

〈1〉　隆線の構成が複雑な種類（*63*・第10図72～77）

隆線が複雑な図案を構成し，その両側の口唇にLRの縄文が飾られていて，隆線の構成には，三叉文が取り入れられている。加飾の集中部以外の口唇全体にわたって縄文が施されているものかどうかわからない。また，しばしばみられるような沈線は併用されていない。この種類の複雑な加飾は，亀ヶ岡式土器の口唇装飾の発達と無関係ではなかったであろう。

〈2〉　隆線の構図が単純な種類（*62*・第10図78～83）

この種類は縦の隆線の並列を基調とする加飾の集中部には幾通りかの変化があり，縄文が施文される場合と（78～83）縄文を欠くもの（82）とがあり，基点が三叉文をなす沈線が口唇をめぐるものと（78・80）と，沈線を欠くもの（81）とがある。口唇の肥厚が著しい79も注意される。82はまた沈線に区切れらたロ唇上交互に縄文がつけられる。なお，器面に入組む鍵の手文帯が施される*31*の口唇加飾は，この種類に属する。

〔ii〕　FⅡ類　加飾の集中部が隆線だけで構成される種類（第10図84）

隆線だけで入組文風の構図が作られている。加飾部以外の口唇には縄文も沈線も附けられていない。

〔iii〕　FⅢ類　沈線だけで加飾が行われる種類（*49*〈第10図85〉）

外向きの三叉文の並列によって加飾が行われ，器面には上下異方向のT字状三叉文帯から発達したと思われる工字文帯が描かれている。

佐野のF群土器　佐野におけるF群土器は10数個体あると推定されるが，その過半数はFⅠ類によって占められ，FⅢ類は1個体のみである。北陸では，晩期初頭以来存在する手法であり，形態的には加飾の集中部が隆線と縄文とによって構成されるものが後出すると考えら

れている。[18]しかし，佐野でみるとFⅢ類のような沈線だけの加飾が形の整ってきた工字風文様帯に伴い，また，FⅠ類の中でも簡単な構図が鍵の手文に併用されているから，必ずしも簡単から複雑へと年代的な変化があったものではなさそうである。それとともに，FⅠ類の複雑な隆線の構成は亀ケ岡式土器にみられる口唇加飾の発達との関係を否定し得ないから，佐野においては晩期初頭にまでは遡らない手法であると考えたい。少し離れるが，吉胡貝塚で晩期旧Bの層から数例の検出もあり，[19]北陸以外では，やや出現が遅れているといってもよいであろう。

Ⅶ　G群　有文土器（雑）

B群～F群は，晩期前半と考えられる有文土器の種類を分類したものであるが，それぞれの類形に含めにくい幾つかの存在がある。G群に一括して説明しておこう。

(a)　口頸のくびれた浅鉢（51）

上下異方向の三叉状刺り込みによって形成された入組文風の横帯が上胴部に飾られる。上下には刺突文帯を附随する。

(b)　椀状の浅鉢（60）

口唇は内側から連続する押捺が加えられて小波状を呈する。胴部には弧状の区画帯が向き合い，内部は細かい刺突が加えられて赤色塗彩される。保地[20]では壺の下胴部，葎生[21]では壺の上胴部に同じ意匠の文様が飾られた例がある。

(c)　鉢形土器（61）

口唇は押捺による小波状の凹凸がみられる。上胴部には3本の平行沈線に挟まれて，沈線による2帯の綾杉文帯が描かれる。東海道から中部山地南部にかけて侵透してきている後期後半の土器にみられる綾杉文と関聯する存在であろうか。

Ⅷ　H群　工字文および工字文に類する種類

佐野における工字文の種類は，連鎖状三叉文や鍵の手文の1群とともに，地域的な様相に富み，かつ一時期の特徴を表出している種類である。かつて粗大な工字文と呼んで問題を提起したことがあった。[22]そのほか，晩期終末の変形工字文の種類や，大洞C_2式風の区画帯をもつ数例も，ここで説明しておく。

(1)　工字文土器の分類

---

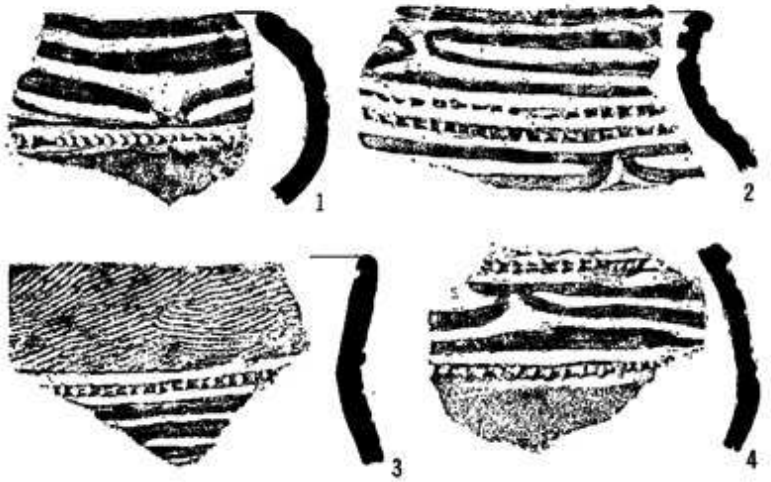
[18]　高堀勝喜　縄文文化の発展と地域性「北陸」日本の考古学Ⅱ
[19]　前掲「吉胡貝塚」註12に同じ
[20]　前掲「保地遺跡調査概報」註7に同じ
[21]　前掲「葎生遺跡」註5に同じ
[22]　前掲「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器について」註3に同じ

工字文土器には，いわゆる粗大な工字文と，三叉文手法の系列に含まれる工字文風の形態とがある。

〔i〕 H Ⅰ類　粗大化しない工字風文様の種類（49）

椀状の浅鉢形土器で，口唇は肥厚し，同一方向の三叉文の並列で加飾され，北陸地方に発生的中心をもつ肥厚した口唇が加飾される種類の亜形であろうと思われる。器面に上下をLRの縄文帯で画された巾の狭い工字状文帯が飾られる。この工字状文帯は，まだ上下に異方向のT字形三叉文を交互並列させる手法から抜け出しておらず，剔去の手法で文様を描き出す粗大工字文の種類とは，明らかに区別して取扱わなければならない。

〔ii〕 H Ⅱ類　粗大な工字文の種類



第11図　長野県小諸市石神遺跡発見の粗大な工字文土器（1：3）

この種類の土器は，器壁が中厚手で茶褐色に勝る色調を示し，焼成も非常によい点など，強い斉一性のもとに作られ，大形の土器が多い。

工字文は角ばった三叉状の彫去を交互に加えることによって半隆線状に描出される簡単な構図であるのが常である。原則としては1帯の体部文様として描かれ，2帯以上重ねられることはない。稀には口頸部にも類似の手法による文様がみられることがある。また，工字文帯の上下に粗い2溝間の截痕あるいは押し潰しを伴うのが普通であるが，それを全く欠くものや両側を深く太い沈線に画された半隆帯に置き換えられている場合もある。口縁部には多くLRの斜縄文が施文される。縄文は条が細く節も明瞭でない第11図3の参考例のように，非常に特徴的である。口縁内側の凹線もまた見逃せない様相である。太く深く2本施されるものと1本の場合とがあり，波状口縁をなす形態では三角形の彫去部が随伴する。なお，截痕のある半隆帯が独自に飾られることもある。

(a)　浅鉢形土器

次の2者がある。

〈イ〉　頸部のくびれた浅鉢（68）　工字文帯の上下に押し潰しの加えられた半隆線がある。

〈ロ〉　口縁が内彎した浅鉢（72・78）　椀形を呈し，72は截痕のある半隆線を伴わず，

工字文帯だけの例である。78は口縁に1条の截痕のある半隆線をめぐらし，他の部分は研磨されて素文となっている。

(b)　壺形土器

通常の形態の工字文を用いた種類と，やや変化した工字文がみられるものとがある。

〈イ〉 規格的な粗大工字文（70・71） 截痕のある半隆線を伴う規格的な例である。口縁の状態は明らかでない。

〈ロ〉 入組風工字文（75） 粗大な種類の構図と異なり，入組工字文風に複雑化している。截痕のある半隆帯を伴うが，工字文を形成する半隆線状の部分は粗大な工字文の種類よりもやや細弱化している状態が認められる。粗大な工字文の動態を探る上に，注意すべき存在である。

(c)　甕形土器

H群土器には大形の形態が多い。ここに甕形に分類した種類の形態は，むしろ壺の系列に属するといってよいが，壺とするにはあまりにも大形に過ぎるので，甕として取扱った。69・73・74には規格的な粗大工字文がみられ，69・73では押捺のある半隆線を伴い，後者では更にくびれ部に1条附加してある。74は截痕のない半隆線の例である。また，短い口縁は外屈し，器面に斜縄文を，内側に2条の太い凹線が附けられるもの（69・81・82・84）がもっとも多く，縄文の施文のない73・74もある。74には口縁内側に2本の凹線がある。79・80は波状をなす口縁の形態をとり，79では波頂部とその両側に小突起が飾られている。口縁内側の2本の凹線のうち，上の条では波頂部の位置が三角状の彫去部分となっている。83は口唇が押し潰しによって連続した小波状となっている例で，内側の凹線は1本である。

第11図は千曲川流域の小諸市石神出土の粗大な工字文土器である。2の口頸部に入組工字文風の施文が行われ，同例は新潟：葎生[23]でも検出されている。

〔iii〕 HⅢ類　連続した楕円状区画帯が飾られる種類

近隣の地方の大洞C_2式の時期に往々出現する楕円形の区画帯の種類である。

(a)　浅鉢形土器（76）

体部文様として，細隆線による楕円形区画帯とそれに伴う平行沈線があり，区画帯の間には沈線によって短い刻点が加えられる。

(b)　肩の強く張った鉢（77）

胴部文様として沈線による2帯の連続楕円帯が飾られ，楕円区画内には1条の沈線とがある。また，区画帯の周囲を区切るような三叉状の彫去部がみられる。

---

[23] 前掲「葎生遺跡」註5に同じ

新潟：上野原[24]，同：顕聖寺[25]，石川：下野[26]などにも同類が散見される。

〔iv〕 HⅣ類　変形工字文の種類（67）

細隆線によって変形した工字文を描出するいわゆる網状浮線文土器である。埦状の皿の口縁に連孤状の細隆線文と，体部に同じ細隆線による眼鏡状の文様帯が飾られる。このような眼鏡状の変形工字文は，千曲川流域の氷Ⅰ式の規格ではなく，新潟：藤橋式の系列に属するものと考えた方がよいだろう。他に文様構成の判然としない同類の小破片がある。やはり皿の形をとるものらしい。

(2) 粗大な工字文土器の年代

粗大な工字文土器については，細隆線による変形工字文土器を標式とする小諸市氷遺跡では全く発見されておらず，かえって晩期前半の土器を主に出土する遺跡から検出されることが多いから，当初，晩期前半の所産と考え，異方向のT字形三叉文を交互に配置する文様帯のモチーフから発達してきたもので，大洞A式における工字文の手法の伝播をまたなくても生起し得るものと推定していた。その後，千曲川沿岸地方にも明瞭に大洞 C_2 式の特徴をそなえる資料が点々と発見されるようになり[27]，また，文様自体の様相と殊に浅鉢以外の器形では口縁の内側に1条乃至2条の太い凹線が彫去される特徴から大洞 C_2 式に併行する土着の様相とみなした方が，亀ヶ岡式土器の影響下におかれた晩期の動態に合致すると思い到ったのである[28]。

今でもはじめに考えたように，粗大な工字文は49のような彫去の手法を伴わない工字状文帯にある意味では脈絡を求めることができると思っている。しかし，そのような工字状の文様帯は，T字形の三叉文を上下交互に並列させるという北陸地方に発生的中心があった晩期前半における土着的な三叉文の系列に包含されるべきものであって，実際にも土着的な三叉文手法の分布圏である北陸・中部山地・東海道を含める地域で，三叉文系列の土器群の一型として僅かずつ存在が認められるにすぎない。従って，次の年代になって，型式構成上，いきなり主体的構図として登場したと考えることは非常な無理を伴う。それを推移的な状態というには，あまりにも，変異的だからである。やはり，晩期前半の土着的な三叉文手法の終焉をまって，新しい亀ヶ岡式土器の影響に土着的な文様として発生したと考えるべきだと思う。もちろん，造形意識の根底に，前代の三叉文的な手法の流れが尾を引いていたであろうことは推察がつく。その意味では，三叉文の系列に属する工字状文様と粗大な工字文との脈絡を考えてもよいであろう。

最近，小稿にもしばしば引用してきている新潟・葎生遺跡の調査結果が公表され，そこにか

---

(24) 三条市教育委員会編「上野原遺跡概報」
(25) 前掲「顕聖寺遺跡」註6に同じ
(26) 前掲「縄文文化の発展と地域性―北陸」註18に同じ
(27) 前掲「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器について」註3に同じ
(28) 永峯光一　縄文文化の発展と地域性「中部」日本の考古学Ⅱ

なり多くの規格的な大洞 C_2' 式土器に伴って，粗大な工字文の同類が相当量検出されていることが解った。晩期新に分類されている種類である。中にはいわゆる入組工字文風になって大洞A式への傾斜をしめす存在もある。佐野では75の例が認められる。[28] だが，葎生遺跡のすぐ近くにある長野：二ノ倉遺跡では，亀ヶ岡式的な規格の大洞A式がほぼ単純に発見されているし，[30] また，長野：顔戸遺跡で，[31] 粗大な工字文土器とともに規格的な大洞 C_2 式土器のみが発見されている場合があるから，粗大な工字文土器は，大洞A式土器の伝播以前における土着的な存在であることにほぼ固定してよいであろう。佐野においては粗大な工字文土器が主体となり，A群とした平行化した雲形文の飾られた鉢や，HⅢ類に含めた楕円区画帯の浅鉢や鉢を随伴して，大洞 C_2 式併行期の有文土器群を構成していたものと考えられる。

粗大な工字文土器の分布に関して，はじめのうちは，千曲川沿岸地方を中心とした中部山地一帯に及ぶものと考えていたし，遠く東海の各地や一部は近畿に達するという指摘もあった。[32] しかし，その時点では筆者自身三叉文系列の工字状文様と混同していたので，拡がりについては再検討が必要であるが，今のところ，中部山地でも北寄りの地域にかなり偏在したものになるのではないかと推察している。

Ⅸ　Ⅰ群　凸帯文の種類

東海道に分布の中心を置き，口縁に押捺のある凸帯をめぐらした無文土器の種類である。

(a)　鉢形土器 (65)

比較的丈の浅い鉢形となるものと思われる。口縁には円形の押捺痕をつけた凸帯がめぐり，やはり同様の押捺痕がある凸起が口端から凸帯にかけて，5ヶ所に配置される。

(b)　深鉢形土器 (66)

5個の山形をもつ波状口縁の深鉢で，頸部がくびれ，口縁は外反する。口縁をめぐって円形押捺痕のある凸帯が1条みられ，口縁の波頂部には刻み目が加えられており，また，波頂部間の口端にも円形浮文が飾られている。

なお，連鎖状三叉文のつけられた深鉢(16・25)や非連鎖状三叉文の飾られた深鉢(27・29)の口縁における円形突刺文のある凸帯は，この種の東海系土器の影響による手法かもしれない。

Ⅰ群の凸帯文土器が吉胡晩期旧Aの規格を受け継いでいることは明らかである。千曲川沿岸地方における晩期の遺跡で，佐野はこの種類の土器の混在率がもっとも低い。地理的な位置に関係する現象であろうか。

---

(28)　前掲「葎生遺跡」註5に同じ
(30)　上水内郡信濃町二ノ倉　故神田五六氏調査
(31)　飯山市外様顔戸　高橋桂氏資料
(32)　前掲「長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾」註10に同じ

X　J群　口端に加飾のある無文土器

凸起を使う場合と刻み目によるものとがある。

〔i〕 JI類　凸起を加飾する種類

凸起は小形の土器に加えられる場合が多い。

(a) 浅鉢形土器

〈イ〉 棒状凸起が飾られる種類（87・88）　椀の形をした小形土器で，器面は研磨される。87は棒状の凸起に刻み目がつけられ，横の穿孔がある。凸起は1個である。88の棒状凸起は，縦に1孔があけられ，刻み目はない。凸起数は1個である。

〈ロ〉 1対1組の山形凸起の種類（86・89）　86は口頸がくびれる形，89は椀形の形態である。口端に1対1組の小突起が何組か附けられていたものと思われる。

(b) 深鉢形土器（85・90）

85は口縁部が内彎する種類で，1対1組の小凸起は，口端の外方に向く。1組の加飾がある。90は1対1組の小さい山形凸起だけではなく，口唇に細い刻み目を伴う。

(c) 甕形土器（92）

1対1組になった小凸起がつけられる。

〔ii〕 JII類　刻み目による加飾の種類

(a) 浅鉢形土器（94）

坏のような器形，口唇に沈線による連続山形の刻み目が描かれる。

(b) 深鉢形土器（91）

押捺によって斜めの刻み目が表出されている。

(c) 甕形土器（93）

刺突による加飾である。

J群のように口端に加飾のある無文土器には晩期後半に降る土器との伴出が明瞭な例はないようである。

XI　K群　研磨されている無文土器の種類

膨大な数量にのぼる佐野の無文土器のうち，丁寧な仕上げとはいえないが，器面を整えた後で更にともかくも研磨が加えられている一群がある。浅鉢形土器がもっとも多い。

(a) 皿形土器（96～99）

非常に浅い盤状の形態。97の口縁内側には，細い沈線が1条ある。

(b) 壺形土器（95）

短い口縁が直立に近い状態をしめす。

(c)　甕形土器（*108*）

口縁が外屈する形態で，口端はそがれて稜をなす。

(d)　鉢形土器（*100・101・111*）

口縁がやや内彎する種類（*100・101*）と円筒状の形態をとる*111*とがある。いづれも小形である。

(e)　浅鉢形土器（*102～107・109*）

概して小形の形態が多く，口縁が内側に肥厚してその部分がにぶい稜をなす種類（*102・103 105*）が目立つ。また，*109*の口端には篦そぎされたような稜が器面に残っている。

XII　L群　無文土器の種類

沈線のある無文土器とともに，佐野における粗製土器の主体となっている存在である。深鉢形が大半を占め，少量の浅鉢形がある。

(a)　浅鉢形土器（*110・112～119*）

*109・110・112*のような口頸にくびれのない器形が微量にあるが，大部分は口頸がくびれる形態である。総じて器の丈は深いらしい。*117*のような浅いものは稀である。

(b)　深鉢形土器

形態的な変化に乏しく，口縁のやや開くものと内彎するものとを両極として，その間に僅かづつの違いが認められる。

〈イ〉　口縁がやや開く種類　*120～133*があげられよう。*120・121*などから判断すれば，口径の大きさの割にすぼまった下胴部をもっているらしい。

〈ロ〉　口縁がほぼ直立する種類　*134～148*を含めて一括できよう。

〈ハ〉　口縁が内彎する種類　*149～169*がある。内彎の度に強弱はあるが，明瞭な差違とするほどの開きはない。沈線をめぐらす無文土器の同類からみれば，やはり下胴部が急にすぼまる形態となるのであろう。なお，*154*には稲妻状の沈線が描かれている。

XIII　M群　口縁に沈線をめぐらした無文土器の種類

器形の形制はほとんどL群の無文土器と同じである。深鉢が大部分を占め，少量の浅鉢および鉢・壺が加わる。沈線には比較的細く深い手法と鈍な手法とがあり，2本，3本，4本と施文上の区別がある。また，深鉢には口縁がやや開く種類と内彎する種類とがある。しかし，それらは基本的な区別とするほどの差違とは考えられない諸点がある。

(a)　壺形土器（*183*）

*183*は無頸の壺というべき形態である。この１例だけ検出されたにすぎない。

(b) 浅鉢形土器（*170・172～174*）

(c) 鉢形土器（*171・175・196・197*）

口縁の彎曲から推定すれば深鉢には至らない器高であろうし，*196・197*の小形土器も含めてよいであろう。*175*の内面には輪積みの痕が残る。

(d) 深鉢形土器

口縁が少し開く種類と内彎する種類とがある。

〈イ〉 口縁がやや開く種類　*176～181・184～190*がこの類形に一括できよう。*189*の口端には集中した刻みが数ケ所に附けられる。

〈ロ〉 口縁が内彎する種類　*182・191～195・198～201*を含めることができる。*194*にみるように下胴部が急にすぼまり，口頸から推察される程の丈が高い器形とはならないものと思われる。*182*には口唇上の刻み目が施されている。

XV　N群　輪積痕が残る無文土器の種類

原則的には器面の表側に輪積痕を残し，かえつて内面の痕を消去しているが，両面に残る場合もある。

(a) 浅鉢形土器（*202*）

内面の輪積痕は大部分消去されるが，１条だけが明瞭に残されている。

(b) 鉢形土器（*203*）

これも一例のみであって，小形であることと，器体の彎曲から推して，深鉢に含めない方がよいと思われる。

(c) 深鉢形土器（*204～208*）

ほとんどの口縁がやや開いているが，*208*では内彎し，内面の輪積み痕も完全に消去してはいない。なお，*204*では器面を意識的に擦っているらしい。*204～208*が主なものである。

粗製土器の系統と変化　佐野における有文の土着的な土器が，亀ケ岡式土器の直接間接の影響下に発生し展開したものであるのに反して，いわゆる粗製土器としての無文土器群が，亀ケ岡式の形制を襲わずに無文に終始していることは，広くいって西日本的な縄文式土器の伝統が表出された現象といえるだろう。では，どうしてそのような跛行的な現象が起ったのであろうか。

中部山地では，かの中期において独特の発展をとげ隆盛した縄文式文化の伝統は，後期初頭を過ぎる頃から急激に衰微の途をたどっている。そして，後期後半に至るとほとんど見るべき

遺跡・遺物の存在を指摘できないような状態となってしまう。その空隙へ侵透してきたのが，東海的な土器群であって，中部山地南部で，僅かながらも点々と足跡を残している。勿論，関東からの侵透あるいは新潟方面からの影響もないとはいえないが，あくまでも東海的な土器群の中の客体的存在にすぎなかったと考えられる。千曲川沿岸地方で，現在，後期後半の遺跡や遺物を指摘することがまず困難であるのは，おそらく，この地方の同期の土器が，東海的な加飾に乏しい種類のものであって，その上，分布が非常に稀薄であるため，多くは見過されていることに起因すると思っている。従って，千曲川沿岸の地方において新たに亀ヶ岡式土器の伝来によって土着的な晩期の土器群が生育していく直接の基盤になったのは，後期後半の東海系の土器群であったと考えるべきであろう。そこに土着性，保守性の強固な粗製土器に東海的あるいは西日本的な無文の土器が，晩期でも採用されている原因がひそんでいったに相違ない。

ところで，口縁に数条の沈線をめぐらす無文土器は，中部山地でも北部に偏した千曲川流域の地方に限って存在しているらしく一部は新潟：顕聖寺[33]，同：葎生[34]にも及んでいる。この系統は，後期後半から晩期初頭にかけ，東海から甲斐，南信へ侵透し，若干の展開をみせている体部に細い沈線で綾杉状あるいは斜行だけの刻線帯を飾る深鉢のうち，口縁に数条の沈線をめぐらす種類に連がるものであろう。その深鉢の手法が，土着的な晩期の土器群の生長とともに，体部の刻線帯を失い，土着的な粗製土器として長く使用されることになったと思われる。

さて，L群および口縁に沈線をめぐらすM群の無文土器は，佐野におけるいわゆる粗製土器群の主体を構成する種類である。L群とM群の間には器形の変化，製作の手法に強い斉一性が認められ，また，各々の間における器形の小変化や，沈線の数および鈍鋭の手法的差違などが基本的な形制の相違によることと考える基準や傍証が見当らないでいる。つまり，それらのバラエティを年代的な変化に置き換えて考えることはむづかしいと思われるのである。一方，有文土器には幾つかの年代的段階が認められ，土着的な様相にも年代的には少くとも２つの区切りが明瞭に存するから，有文土器の変化に，無文土器が則応した変化を示していないということにもなる。やはり粗製土器における土着性，保守性の強固さに基く現象と考える以外にないであろう。

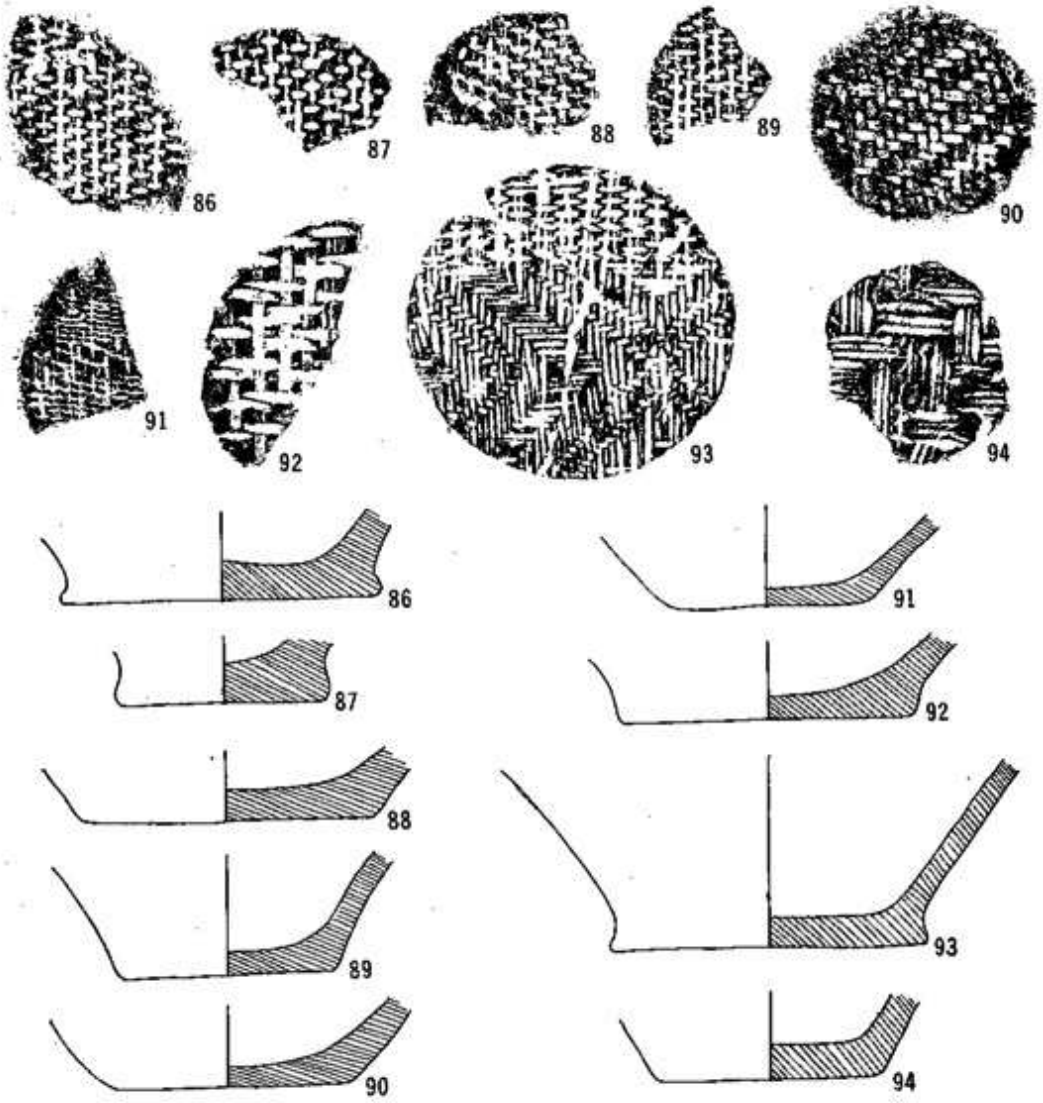
XV　網代底について

第１次，第２次を通じた２回の発掘で検出された土器底部は，およそ100個体あまりである。そのうち素文の種類が55個体で約半数，網代痕および木葉痕のあるものが50個体分あまりあっ

---

[33] 前掲「顕聖寺遺跡」註６に同じ

[34] 前掲「葎生遺跡」註５に同じ



第12図　網代底（1：3）

た。しかし，木葉痕の押されたものは3～4個体を出ない。また有文土器の底部と思われるものに網代痕や木葉痕を残すものは絶無といってよい。

網代痕についてみると，経線をなす条に対して緯線をなす条が「1本超え2本潜り1本送り」に編まれる第12図86～89と「2本超え2本潜り1本送り」の種類90～92・94などの綾編み，および雑り編み93の2種が認められる。綾編みのうち，「2本超え2本潜り1本送り」の種類が，一般的には最も普遍的な手法であるように，佐野でもまた主体的な編み方となっている。しかし，90のように経緯の原体の巾が等しく密に編まれるもの，91・92にみられる経線をなす条の間隔が粗である種類，94の如く数本づつの原体を各々経緯の1条として編む場合など，いろい

ろの変化が現れている。93のような綾り編みは一般的にも稀有な例といってよい。まず，数本の原体を1条とした経線と1本の原体を1条とした緯線で「1本超え1本潜り1本送り」のいわゆる平編みにする部分を作り，同一の原体の続きで，経緯の原体各1本を1条とした「2本超え2本潜り1本送り」の綾編みにする。そして次にはじめのように経線は数条の原体を1条にし，緯線には1本の原体を1条にして「2本超え2本潜り1本送り」に編み，更にもとに返って原体の1本を1条にした「2本超え2本潜り1本送り」の編みを繰返してある。

網代の研究については，古く明治中頃，坪井正五郎博士が試みられた域をほとんど超えることなく現在に至っているとしてよいであろう。多くの事例が年代的地域的[35]に整理されるようになると，何か傾向的な現象が把えられそうである。　　（永峯　光一）

第2節　石　　器

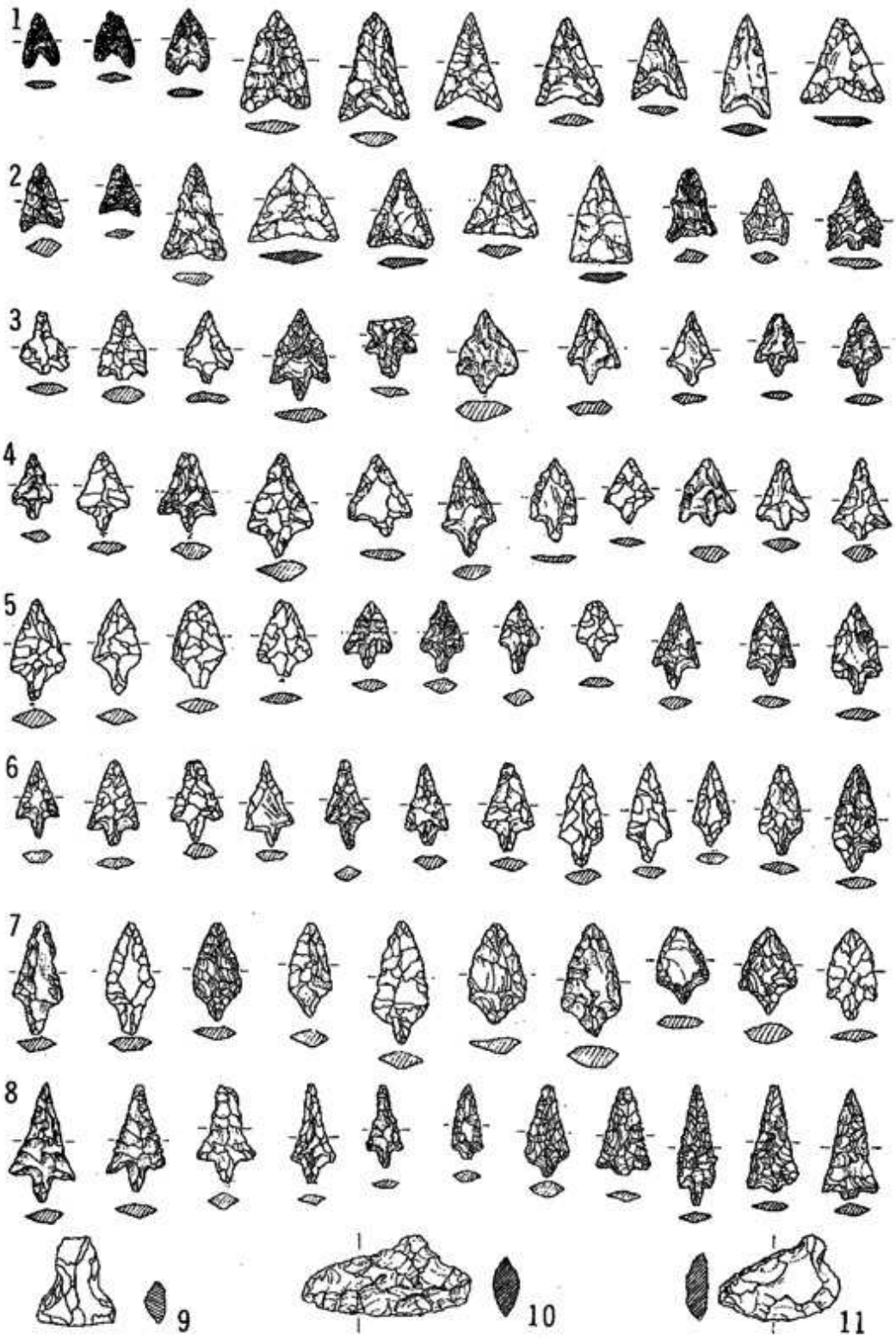
I　石鏃（第13図1列～8列・第14図12～14列・15列左より3個）

佐野遺跡で打製石鏃が多出することは，古くから知られており，故神田五穴氏の採集品だけでも500個を超えていた。発掘した分を含めると，千数百個に達する。また，その事実を裏付けるように，多量の未成品や剥片が検出されていて，石鏃の製造が盛に行われていたことを示している。概して大形品が多く，製作も比較的粗である。無茎の種類（第13図1列および2列右から2番目まで）と，有茎の種類とでは，後者の方が遙かに多量で，有茎の種類85%に対し無茎は15%を占めるにすぎない。

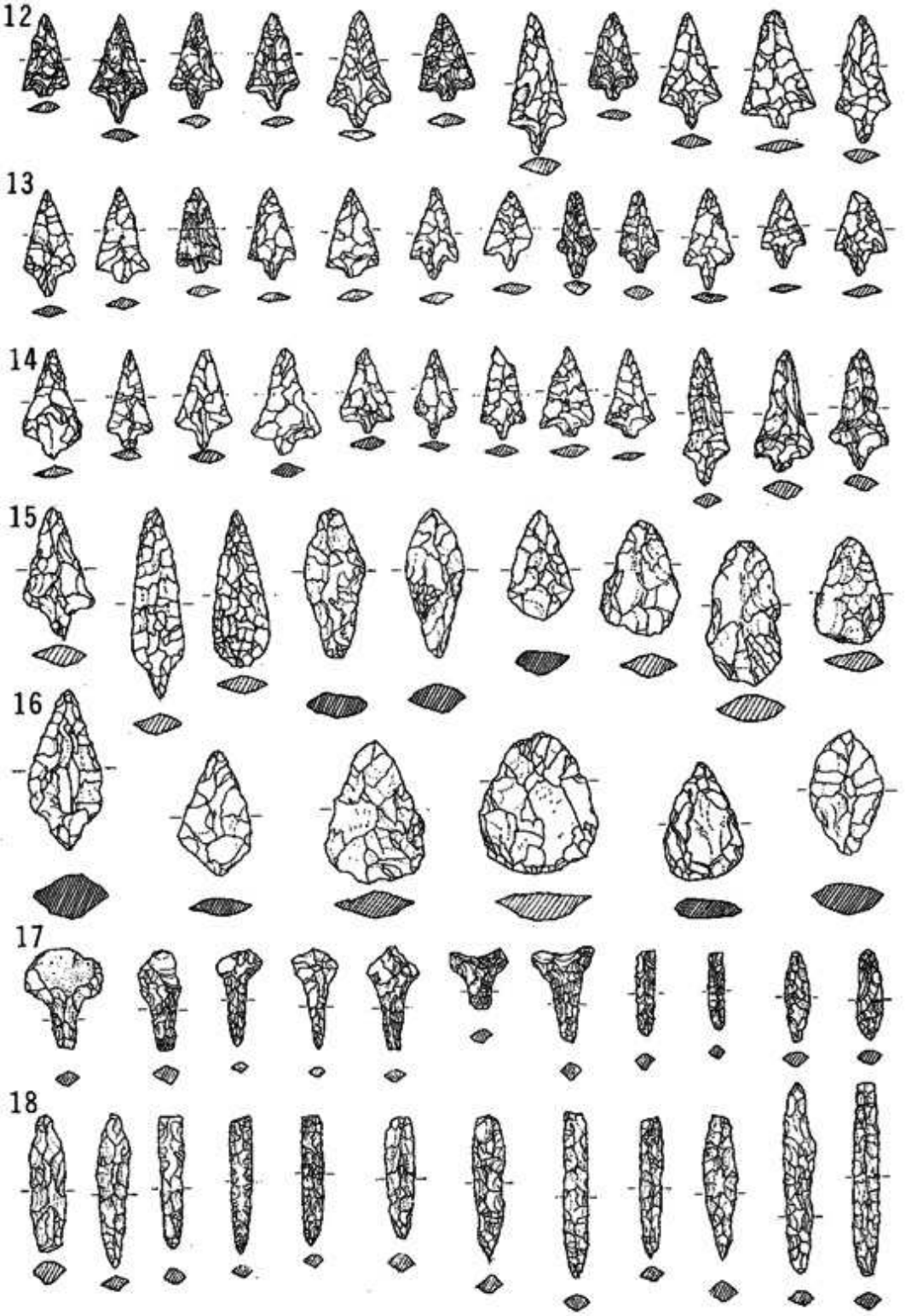
形態の変化は比較的振幅が大きく，さまざまな類形が作られている。中でも形態的な特徴のある種類は，2列目右端および，3列目の左から5個目までにみられるいわゆる飛行機鏃と，2列目右から2番目の五角形鏃である。無茎の五角形鏃と有茎の飛行機鏃との間には形態上の結び付きが強く感じられる。飛行機鏃の発掘例は，神奈川：杉田[36]，長野：唐沢岩陰[37]にあり，五角形鏃は奈良：橿原[38]や唐沢岩陰にある。石鏃の晩期的形態としてよいであろう。それらの種類に限らず，佐野の石鏃は，純粋に晩期の形制を保有する形態として記憶されてよいと思う。また，第14図の15列左から2番目と3番目の柳葉形の大形有茎鏃は，尖頭器の範囲に含めても差支えないような大形品である。

---

(35)　坪井正五郎「日本石器時代の網代形編み方」東京人類学会雑誌　14ノ161
(36)　杉原荘介・戸沢充則「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」考古学集刊2ノ1
(37)　永峯光一・樋口昇一「長野県唐沢岩陰」日本の洞穴遺跡
(38)　奈良県教育委員会「橿原」奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告17



第13図　石鏃，石匕測図（1：2）



第141図　石鏃，尖頭器，石錐実測図（1：2）

石鏃の材料として用いられる原石が数種類に限られていることも一つの特色といえるかも知れない。無茎の種類では玄武岩66%，黒耀石11%，頁岩6%，チャート17%の割合であり，また，有茎の種類では，玄武岩64%，黒耀石6%，頁岩21%，チャート9%となっている。玄武岩が主として用いられ，黒耀石の使用度は意外に低いものに止まっている。なお，第15図の19列と20列に掲げたものは，石鏃の未成品（石錐の未成品も混じる）と考えられるものであるが，工程を明瞭に跡づけるような段階の資料をそろえることはできなかった。

Ⅱ　尖　頭　器　（第14図15列左から4番目より右・16列）

14図15列左から4番目から右と16列に掲げた完形品は16個ある。狭長なもの巾広な種類いろいろあるが，概して一端は鈍くつくられている。いずれも玄武岩製。

Ⅲ　石　　錐　（第14図17列・18列）

つまみのあるものと，それを欠く種類とがあり，一般に大形である。80個程度の数量がある。玄武岩71%，頁岩0.5%，チャート26.5%の割で原石の種類が使用されている。

Ⅳ　石　　匕　（第13図9～11）

3個検出された。10・11はつまみが片寄った横形，9は縦形としてよいであろう。9・11が玄武岩製，10はチャート製である。

Ⅴ　石　　篦　（第15図21・22）

15図21・22の2点ある。頁岩を用い，両面からの打製によって作られている。

Ⅵ　磨製石斧　（第15図26～29）

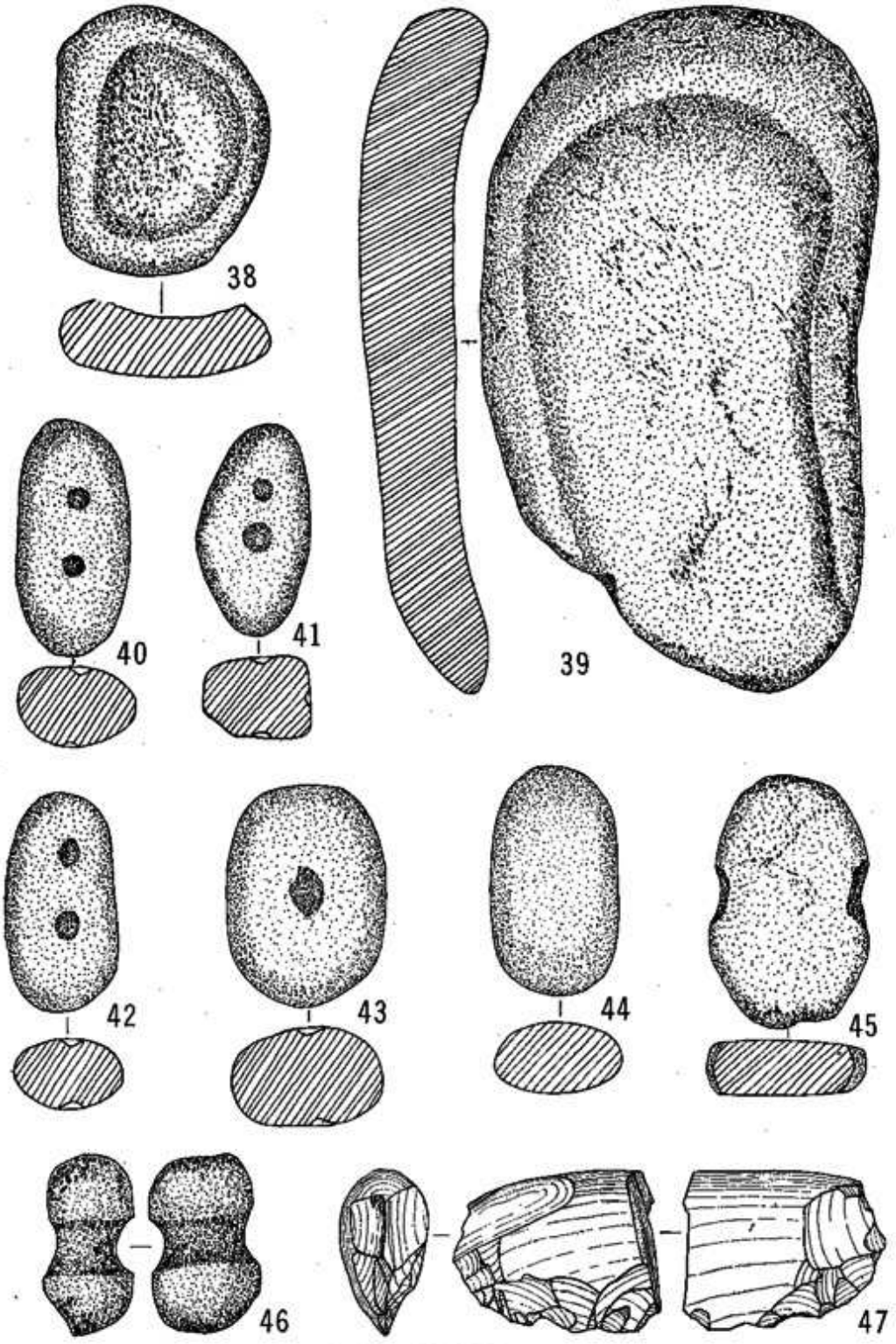
完形のものは27だけで，あとは残欠である。6個が数えられる。27の側面は直角的であるが，このような形態を定角式といってよいかどうか疑問である。他はすべて大小の定角式に属する。27は斑礫岩，28は硬砂岩，その他は蛇紋岩製である。

晩期になると石斧の種類は一様に数を減じるが，本遺跡では磨製石斧のみで，打製石斧の明瞭な出土例の認められないことは注意しなければならないであろう。

Ⅶ　打　割　器　（第16図47）

川原石の1側へ両面からの打裂により刃部を作り出してある。

第15図　石器および土製品・石製品実測図（1：2）



第16図　石器実測図（1：4）

Ⅷ 敲 打 器 (第16図45・46)

円筒状の安山岩の中央に溝を作り，両端に著しい打痕を止める(46)ものと，扁平な花崗岩の川原石を用い，両側に緊縛のための凹みを敲打して作り出しているものとがある(45)。両端にはやはり，打痕が認められる。

Ⅸ 石　　皿 (第16図39)

4例出土しているが，完全な形で残っているのは図示した39だけである。安山岩製。

Ⅹ 石　　臼 (第16図38)

長経16cmほどの不整円形をなす偏平な安山岩に凹みをつけ，凹部には敲打の痕が著しい。いわゆる石臼と考えてよいであろう。

Ⅺ 凹　　石 (第16図40～43)

全部で8個発見されている。多くは安山岩を用い，1例だけ硬砂岩の例がある。両面，稀には側面にも，1個乃至3個の凹みを敲打によって作り出してある。

Ⅻ 磨　　石 (第16図44)

円筒状の花崗岩に磨痕が残っている。整形に当っては，敲打が部分的に加えられた形跡がある。

ⅩⅢ 石　　剣 (第15図23・25)

簡単な亀頭部を作り出しただけの形態であって2例ある。23は完全な姿を止め，輝緑片岩製，25も輝緑片岩を用いている。23は節理の部分を残し，断面は凸レンズ状，擦痕が明瞭に残る。

ⅩⅣ 石　　刀 (第15図24)

石刀の残欠。片刀のような断面を有し，粘板岩製。丁寧な仕上げが行われている。

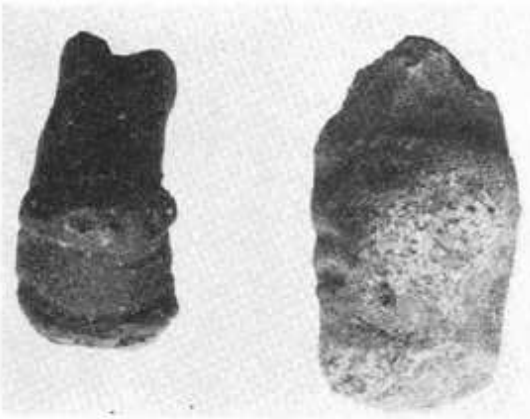
(永峯　光一)

第3節　石製品および土製品

Ⅰ　垂　　飾　（第15図27）

蠟石製の有孔垂飾の残欠と思われる。八ツ手状の溝がみられる。

Ⅱ　土　　偶　（第15図30・17図）



第17図　土偶（1：1.5）

30は板状の土偶。首部および四肢部を欠く。腹部と背面に沈線による加飾がみられる。他に，亀ヶ岡式の王冠土偶または遮光器形土偶の上肢と考えられる残欠が2個検出されている（第17図。）

Ⅲ　耳　　飾　（第15図31・32）

31は環状耳飾の残欠。素文である。32は有孔の耳栓ともいうべき形態である。表面の孔をめぐる周囲に円形の沈線が描かれている。

Ⅳ　剣状土製品　（第15図33）

短冊形の基部がやや膨んで，1孔を有する土製品。ツルハシ状に対象的な部分があって，半分が欠けていたものか，あるいは，小部分が折損したものか明らかではない。身の断面は凸レンズ状をなし，基部には三叉文状の凹線が表裏に飾られている。丁寧に整形されている。

Ⅴ　スタンプ状土製品　（第15図34）

円錐状の粘土塊を，おそらく磨消縄文を伴う三叉文系の土器の器面に捺しつけているもの。特に整形は行われず，偶然的な作品であったのであろう。

Ⅵ　円板状土製品　（第15図35・36）

土器片を利用して円板状に研ぎ上げたもので，晩期の遺跡で多出する円板状土製品の一種である。6箇発見されている。　　（永峯光一）

第4章　佐野式土器の編年

第1節　佐野における土器の組成

分類			器形 皿	壺	浅鉢	鉢	深鉢	甕	他	個体数および概数
B 三叉文の種類	Ⅰ 非連鎖的三叉文		○	○	○		○			1～2 5～6 6～7 12～13
	Ⅰ′	(1)					○			5～6
		(2)					○			
	Ⅱ 連鎖状三叉文	(1)	○				○	○		1 1 1
		(2)			○					1
		(3)	○	○	○		○		○	1 2～3 1 2～3 1
C (付)入組文鍵の手文の種類	Ⅰ 入組鍵の手文				○			○		1 1
	Ⅱ 鍵の手文		○	○		○	○	○		1 4～5 1 2 3～4
	Ⅲ 入組文			○						1
D (付)類似するもの直線的な縄文帯の種	Ⅰ 直線的な縄文帯				○		○			3～4 3
	Ⅱ 結節のある縄文帯		○							2
	Ⅲ 他の形の縄文帯を伴う種類				○	○		○		1 2 1
E 刺突文帯の種類				○	○			○		2～3 約10 3

第5表(1)　佐野遺跡出土土器文様別，器形・個体数一覧表

復原的実測図の作製の過程において，明らかにされあるいは推定された各種類形の個体の概数は総計500から520あまりである。第3章で述べたように，その検討は一通りのものに止まっているので，なお増加を見込まなければならない種類やその他にも若干の出入りはあると思われるが，大勢をうかがう場合，大きな差違となって現れてはこないであろう。こうして，A群亀ヶ岡式土器の類形を除いた土着的土器（若干の地域外の土器も含む）の類形を分類した器形の個体数および概数は第5表の通りとなる。

少数の地域外的な規格の土器も含めて，土着的な土器のうち有文土器は29.6%，無文土器は70.4%の割合を示めす。これを更にA群の亀ヶ岡式土器を含めた数量としてみると，土着的な有文土器25%，無文土器60%，AⅠ類の搬入された亀ヶ岡式土器7%強，AⅡ類の模倣された種

分類		器形 Ⅲ	壺	浅鉢	鉢	深鉢	甕	他	個体数および概数
F 肥厚口唇の加飾	Ⅰ			○					約10余
	Ⅱ			○					
	Ⅲ			○					
G 有文土器(雑)				○					1
				○					1
					○				1
H 工字文および工字文に類する種類	Ⅰ工字風文			○					1
	Ⅱ 粗大な工字文		○	○					10～12
							○		3～4
									約10
	Ⅲ 楕円状区画帯			○				–	1
					○				1
	Ⅳ 変形工字文	○							2
Ⅰ 凸帯文種の類					○				1
						○			1
J 口端に無文帯のある加飾のある土器	Ⅰ 突起の加飾			○					約10
							○		
	Ⅱ 刻み目の加飾			○					約10
							○		
K 研磨無文土器		○							5～6
			○						1
							○		1
				○					約10余
					○				2
L 無文土器				○					150余
						○			
M 口縁に無文線のある土器				○					100余
					○				
						○			
N 輪積文土器				○					1
					○				1
						○			7～8

第5表(2)　佐野遺跡出土土器文様別，器形・個体数一覧表

類8％弱となる。有文土器無文土器を一般的に呼ばれる精製土器粗製土器の大別に置き換えるならば，亀ヶ岡式土器の第2次第3次伝播圏に含まれる石川：御経塚の精製土器48％，粗製土器52％，同じく石川：八日市新保における32％，68％の比率，静岡：天王山の30％と70％[1]，滋賀：滋賀里での27.2％と72.8％[2]，あるいは埼玉：築地の姥山Ⅱ式にみられた精製30.6％，粗製58.9％[3]の数値に較べて，破格な比率とはいえないであろうが，各々に少差がある。それらは地域的な性格であるとともに，分類の仕方や数量算定の方法が異なるためもあるだろう。出土土器全体を通じての精粗の比率においては，天王山と最も近く，八日市新保，滋賀里にも近似する。しかし，御経塚は八日市新保と同じ北陸の遺跡でありながら，精粗に各々20％に達する開きがみられるのは，単に地域的年代的な相違ばかりではないような気がする。

ところが，築地遺跡における姥山Ⅱ式の場合のように，一時

(注) (1) 高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」押野村史
(2) 清水市郷土研究会編「清水天王山遺跡」
(3) 坪井清足「縄文文化論」日本の歴史1
(4) 鈴木公雄「姥山Ⅱ式土器に関する二三の問題」史学37～1

期を限った精粗両系土器の比率ということになると，なお検討を要する問題がある。佐野にはL群，M群を主とした無文土器を伴ったと考えられる有文土器には，少くとも3つの変遷があるからである。だが，有文土器の年代別の個体数を概算すると，初頭では30数個体，後に佐野Ⅰ式と区分するものには50数個体，佐野Ⅱ式では30個体程度の量が認められるから，それらにおよそ300個体の無文土器がどう配属していたか明瞭でないにしても，築地の精製30.6％，粗製58.9％という比率とは，かけはなれて違った数値が得られるようなことはないであろうと推察される。

一方，亀ヶ岡式文化の中心地あるいはそれに様相が酷似する第1次伝播圏での精製土器と粗製土器混在の実態について，古く山内博士によって粗製土器が精製土器と同数またはそれ以上を占めると指摘されながら，実数の報告された例はまことに乏しい。青森：亀ヶ岡では，粗製448：精製16または354：5という比率が算出されている。[5] しかし，これは破片数についての算定であって，個体数を想定するとすれば，どのような変化[6]を生じるか明らかでないし，その上，文字通り製法上の精粗に基準を置き，炭化物附着の有無も重要な指標となっており，かつ，中間的な存在は含まれていないから，ここで当面している有文無文の区別とは，自ら異なる意味の比率である。また，福島：寺脇貝塚においては，大洞C_2式土器について比較的正確度が高いと考えられる口縁部破片の百分率を算出したところ，有文精製48％という数値が出たという。果して，その比率が東北地方や新潟方面における亀ヶ岡式土器の趨勢を表徴し得るものかどうか[7]明らかでないが，第2次伝播圏以西にみられる精粗混在の比率に照合して，必ずしもあり得ないことではないように思う。

佐野で検出された亀ヶ岡式土器は，搬入されたAⅠ類が7％強，模倣されたAⅡ類が8％弱あって，合計土器総量の15％にも達する。大洞BC，同C_1に併行する佐野Ⅰ式だけに限ってみれば，その比率は更に増大するであろう。これを他に比較すれば，築地の0.6％とは較べものにならないし，天王山の3～6％，滋賀里の3.1％をも遙かに超えている。地理的に佐野はそれらの遺跡より第1次伝播圏に近い。だからといって，地理的な遠近だけが亀ヶ岡式土器伝播の多寡を律した条件とはいい切れないふしがある。亀ヶ岡式土器伝播の底にひそむ動態や，それを受け入れる側の体制その他，いろいろな条件が複雑にからみ合っていたことと思うが，今のところ，このような現象を明瞭に説明できる名案はない。　　（永峯　光一）

第2節　佐野式土器の編年

佐野における各種類形の土器の年代性と地域性については，それぞれの項で触れてきたつも

(5) 山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」考古学1ノ3
(6) 清水潤三「亀ヶ岡遺跡」三田史学会考古学民族学叢書3
(7) 馬目順一「後晩期土器の編年構造」「寺脇貝塚」

りである。それらを編年的に構成していくについて，まず問題としなければならないのは，BⅡ類の連鎖状三叉文の種類とC群の鍵の手文の種類である。これらの種類がもっとも佐野的な土着の土器として発生し生育していく上に，羊歯状文の直接的または間接的な影響が極めて強力であったと考えられたのであるが，では，連鎖状三叉文（殊に磨消縄文帯を伴う〔3〕の類形）と鍵の手文とを形通り羊歯状文の年代に併行させてしまってよいものであろうか。ここでまた亀ヶ岡式土器の在り方について考えてみる必要がある。

佐野では大洞B式および大洞BC式は搬入されておらず，模倣品としてB式の微量とBC式の鉢が10数個体ある。搬入された種類40個体近くのうち，1個体のC_2式を除いたほかはすべて大洞C_1式の規格的な様相によって占められる。また，C_1式の搬入品は皿によって過半数を満たされ，少量の甕，微量の注口土器，鉢が伴うにすぎない。模倣された種類でも皿が最多である。戸沢充則氏は茨城：法堂遺跡の報告[8]で，法堂Ⅱ，同Ⅲ式に客体的に存在する亀ヶ岡系土器は，BC式に当る土器が鉢または台付鉢であり，C_1式にあたるものが大部分皿という特定の形態に限られている事実の中に，亀ヶ岡系土器の在り方の本質を把える暗示が含まれているであろうことを推察しているが，それと全く同様の傾向が佐野におけるA群土器にも認められるのである。法堂と佐野ばかりでなく，広く亀ヶ岡式土器の第2次伝播圏・第3次伝播圏を通じても，共通な現象のようである。この問題の本質的な解決にはまだ幾多の曲折を経なければならないであろうが，ここでは，搬入模倣の別を限らず，大洞C_1式が圧倒的に多量であるという事実を重視したい。ということは，大洞C_1式の時期にもっとも亀ヶ岡式文化との交渉が高揚したことと考えられるからである。しかも，その深い交渉がひき起された第1の条件は，受け入れる側の体制に関係した事柄ではなかったか。晩期初頭から中葉のはじめにかけて，亀ヶ岡式土器の伝播をうけて発生した三叉文系列の土器が，土着の土器として生育し，次の時期において，更に強い交渉を亀ヶ岡式文化との間に持ち得る段階に到達したからであったに相違ないと思う。また，大洞C_1式を受け入れる側が，主として同じ亀ヶ岡式系統の影響によって生起し，成長した土着的土器であったことが，新しい亀ヶ岡式土器を抵抗なく受容する素地となっていたこともあろう。関東地方のように，後期以来の独自の伝統を強く受け継いだ晩期の場合，異質の文化に対する土着の体制の抵抗が非常に強力であったから，佐野のような事態は起り得なかったのである。

では，大量の大洞C_1式を受け入れ模倣した側の土着の土器には，どのような種類があったのだろうかというと，もっとも佐野に固有である連鎖状三叉文（特に磨消縄文を伴う〔3〕の類形）や鍵の手文の種類を除外して考えることはできないであろう。仮りに，その2種類を羊歯状文の時期だけに併行するものとして限定してしまうとすれば，大過なく大洞C_1式の時期に併行させ

(8)　戸沢充則・半田純子「茨城県法堂遺跡の調査」駿台史学18

ることができる土着的な存在は，E群の刺突文帯だけになってしまい，それにL群やM群の無文土器が加わるとしても，型式の構成上，非常にアンバランスな器形の組合せになってしまう。

あるいはこうも考えられる。土着の土器に欠ける器形を多く輸入した結果であると。たしかに，皿形という器形に限ってみれば，土着の土器の中には存在例が少ない。しかし，問題は必要上受け入れることのできる体制の有無にある。天然資源に恵まれかつ，それを獲得する技術が発達し，多量の珍稀な皿を必要とするような豊かな生活が存在しなければ，多彩な容器の形態を必要ともしないし，また輸入することもできない。よしんば，亀ケ岡式土器を持った集団の移住を考えたとしても，それを受け入れることは不可能であったろう。

従って，BⅡ類の〔iii〕とした連鎖状三叉文とC群の鍵の手文の種類は，発生的には羊歯状文と密接な関係にあっても，次の時期にまで引続いて使用されていた文様の種類と考えないわけにはいかないのである。文様自体の変化にも二つの時期に区別できるような兆候が認められなかったし，また，必ずしも亀ケ岡式土器の変化に対応した変化を示さない土着性が培われていたとみるべきであろう。しかし，文様自体にはBC式とC1式の変遷に対応するような変化が結果的には認められなかったにしても，原則的には亀ケ岡式に対応するなにかの動きがなくてはならない。それはおそらく，器形や加飾の微細な点に出ているのではないかと思われる。だが，佐野ではそのような点までの検討を可能とする資料はととのっていない。更に広い視野に立って比較ができるときになるまで，保留しなければならない問題であろう。

亀ケ岡式土器において，大洞BC式から大洞C1式への変遷よりも，C1式からC2式への移り替りの方がはるかに変革的である。そうした事情を反映してか，佐野にあっては晩期前半の三叉文系列の土器に代って，新たに工字文系の土器が誕生する。粗大な工字文土器がそれである。その際平行化した雲形文など，磨消縄文の種類ではなく，工字文が主体的な文様として土着化したのは，やはり前代に至るまでの三叉文的な造形意識が受け入れの基盤となっていたからであろうか。

ここで，佐野における土器の変遷をふり返ってみたいと思う。

晩期初頭，大洞B式の伝播によって，亀ケ岡式土器の色彩を濃厚にうけつぐBⅠ類の非連鎖的三叉文の種類が，おそらく微かな侵透をしめしていた東海地方に分布の中心を置く後期後半の土器を基盤として生起した。しかし，そこには未だ地域性が表出されておらず，明瞭な土着的な様相を抽出することは困難であるが，東海的な凸帯文土器Ⅰ群の存在も僅か乍ら認められて，東海地方との交渉は後期に引続いて持ち続けられていたと思われる。しかし，BⅠ′類の深鉢土器の変化にみられるように，晩期初頭から中葉にかけて，除々に土着的な様相が成長しつつあった。羊歯状文が流入する時期になると，三叉文の伝統に強く作用して，BⅡ類の連鎖的三叉文や鍵の手文が土着的な様相として発生し，次の雲形文の年代までも強固な土着性をもっ

て，亀ケ岡式土器の変遷に対応した変化をほとんどきたすことなく存続していた。なお，連鎖的三叉文の種類の中には，多分関東系列に属するであろう客体的な存在が認められる。この時期にはF群の肥厚口唇の加飾の種類も存し，北陸地方との交流を物語ると同時に，佐野的な文様をもつ土器にも肥厚口唇の加飾が出現する。また，東海に発生的中心をもつ入組んだ鍵の手文CⅠ類も採用せられ，一方，中部山地土着の入組まない鍵の手文の種類CⅡ類が北陸・東海や関東あるいは近畿にまで伝播していった。それらとともに更に広域的な分布を示すD群，E群，G群などの有文土器も併用され，明瞭な地方的型式を構成することになったのである。

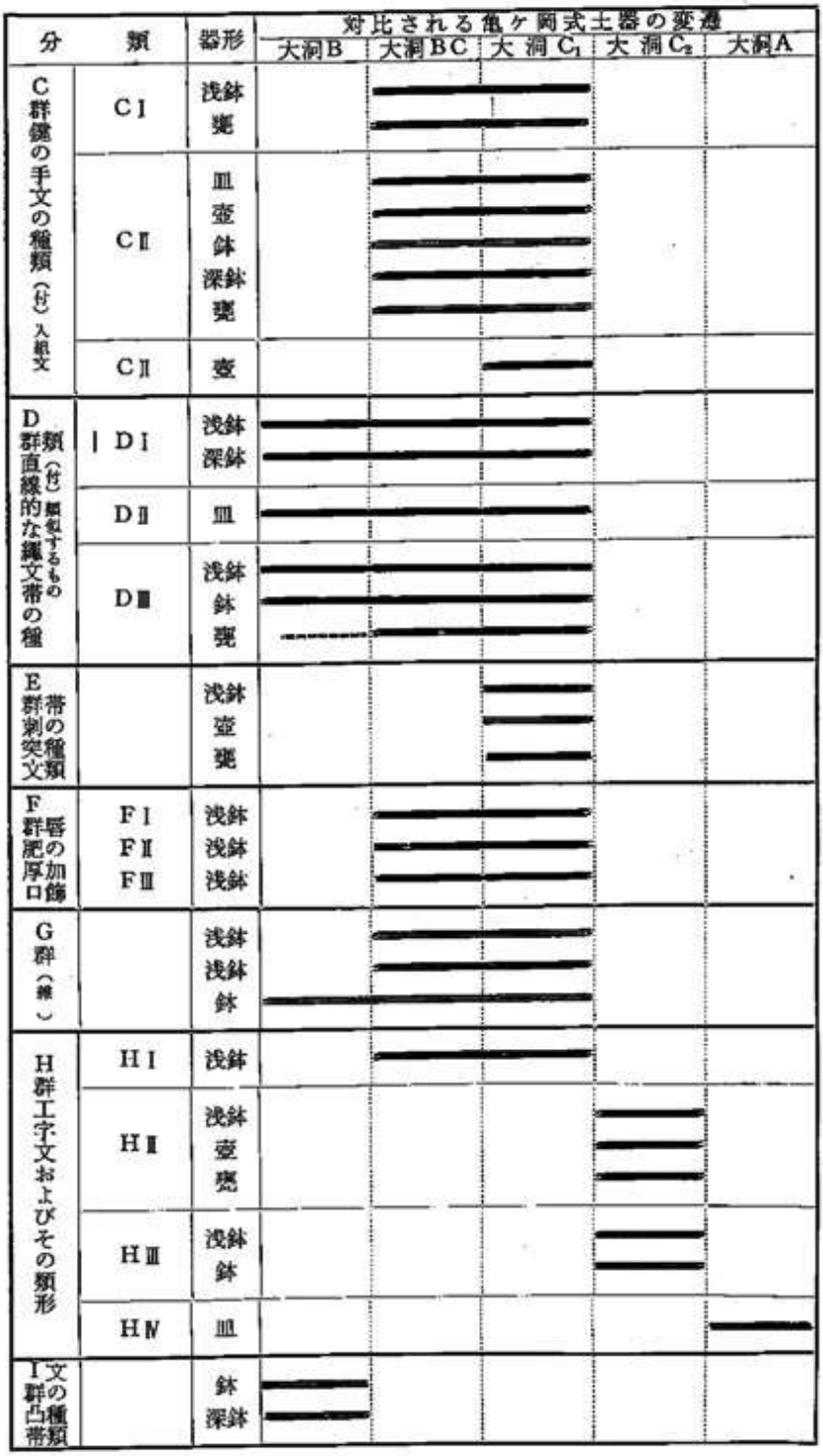
晩期後半になると工字文の伝播をうけて，土着的な粗大な工字文の発生をみ，その客体としてHⅢ類の種類の存在が認められた。粗大な工字文に続いては，細隆線による変形工字文HⅣ類が登場する。微量な存在に止まるが，千曲川沿岸地方に分布の中心をおく晩期最末の氷Ⅰ式よりも，同時期における新潟の藤橋式に近い形制をしめしている。

こうした有文土器の変遷に対し，終始強固な保守性と土着性とを保持し続けたのが，L群およびM群を主体とする無文の土器群であった。亀ケ岡式土器の変遷に対照すれば4時期の間，土着的な土器の変化については3型式にわたって，いわゆる粗製土器として多量に用い続けられていたわけである。ことに，M群の口縁に沈線をめぐらす種類は，佐野における土着性の指標となるであろう。

以上における佐野遺跡出土土器の変遷を整理したのが第6表である。それらの土器群の編年を試みるならば，はじめて明瞭な地域性が表出された連鎖的三叉文の種類と鍵の手文の種類に，口縁に沈線をめぐらした無文土器を指標として佐野Ⅰ式が設定されるべきであろうし，更に粗大な工字文の種類と同じくM群の無文土器を指標として佐野Ⅱ式を続けること

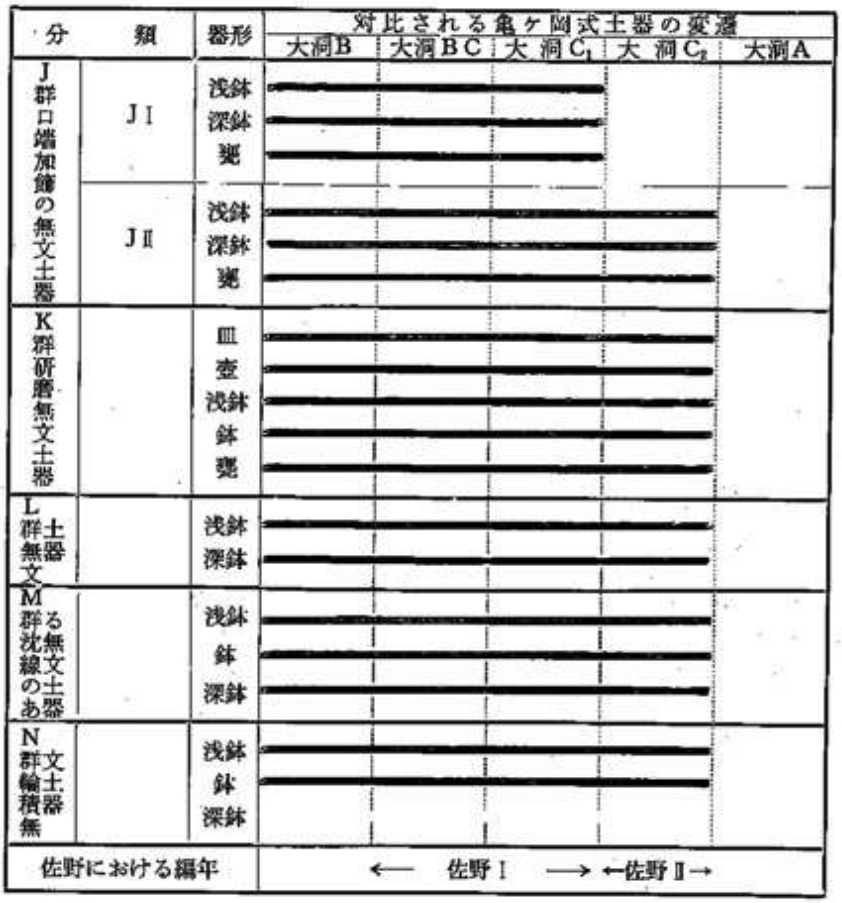
分類			器形	対比される亀ケ岡式土器の変遷				
				大洞B	大洞BC	大洞C_1	大洞C_2	大洞A
B群三叉文の種類	BⅠ		皿 壺 浅鉢 深鉢	———	———	----		
	BⅠ′	(1)	深鉢	———				
		(2)	深鉢					
	BⅡ	(1)	皿 深鉢 甕		———	———		
		(2)	浅鉢			----		
		(3)	皿 浅鉢 壺 深鉢 他		———	———		

第6表(1)　佐野遺跡出土土器の年代的区分



第6表(2)　佐野遺跡出土土器の年代的区分

ができるであろう。繰り返すまでもなく，佐野Ⅰ式は亀ヶ岡式土器に照合すれば大洞BC式とC1式に対比され，佐野Ⅱ式は大洞C2式に併行する型式であるわけである。佐野Ⅰ式では大体6種の類形が含まれ各類形に含まれる器形の種類には偏差があるが，土着性の強い，BⅡ類およびC群には基本的な器形が1通り整って存在し，無文深鉢群がそれに加わる。また，佐野Ⅱ式においても型式の組成に必要な器形の種類は過不足なくそろっている。そして，それぞれの指標の分布を手がかりにすれば，佐野式土器の分布圏は，中部山地北寄りの千曲川沿岸地方から，信



第6表(3)　佐野遺跡出土土器の年代的区分

越国境山地にかけての案外狭い範囲に止まることになりそうである。千曲川の上流，分水嶺を越えた南信地方では，例えば上の段や中の沢にみられるように，もはや佐野式の形制とはいえず，東海地方の型式の末端的な在り方とした方が適切な土器群の分布圏に属してしまっているし，中流域の保地ですら，佐野に較べれば，はるかに東海的な色彩が濃厚に現れているのである。（永峯　光一）

あとがき

佐野遺跡の調査報告を刊行しようとする話が本極りになったのは，昭和40年晩春の頃であった。それから２年有余，ここにようやく印刷の運びとなって，何かほっとした思いを禁じえない。執筆を分担することになった金井汲次・高橋桂・田川幸生３氏には本務多忙の折から大変無理なことをお願いしたし，また，発掘以来，終始斡旋の労をとって頂いた金井喜久一郎氏，あるいは山ノ内町教育委員会当局，山ノ内町公民館長宮崎仲次氏などにいろいろ御配慮を被っている。厚く感謝する次第である。

それにつけても，まことに残念に思えるのは，佐野遺跡の発見者であり，また２度にわたる発掘調査を中心になって推進された神田五六氏が，すでに冥界の人と化されたことである。この報告書の上梓によって，氏が30有余年にわたる佐野遺跡の調査に，一応の区切りがついたことを謹んで霊前に報告したいと思う。

また，膨大な資料を前にして，長嘆息を繰返していた時，援助の手をさしのべてくれたのは，磯崎正彦・小林達雄・関孝一３氏をはじめ，当時はまだ国学院大学に在籍中の安孫子昭二・可児通宏・中村貞史３君であった。３君は忙しい受講の合い間をぬって，わざわざ現地に赴き，資料の整理，実測図の作製や取拓はもとより，はては図版の組みあげすらも引受けてくれたのである。ことに安孫子君は，卒業論文に亀ヶ岡式文化の発生と展開とをテーマとして選んでおり，そのための資料を借用して執筆の参考にできたことは，何にもましてありがたいことであったし，借読した論文から啓発されたところも少くなかった。磯崎・小林・関３氏とは，折々に知識や意見の交換を計ったが，これまた常に大きなはげみと稗益とをうけていた。忘れ得ぬことどもである。明記して心からの謝意を呈したい。

こうした多くの関係者や学友諸氏の援助やはげましに支えられて，やっとの思いで書き上げたものの，内容としては意に満たぬ点ばかりが目につく。ない知恵は所詮しぼることができなかった感が深い。

諸賢の御叱正を切に期待する所以である。

昭和４２年　秋霖の日

永峯光一

あとがき

附　篇

陸奥式遺跡　佐野の石器

神田五六

1　はしがき

本文は「考古学」第3巻第3号（昭和7年6月）所載八幡一郎先生の論文「信濃国下高井郡佐野の土器」と1セットをなし，当地方陸奥式遺跡の土石器様式を決定し，編年上の位置を決定する意図のもとに書かれるものである。

土器は八幡先生の論文発表以後新資料を加えているので補遺の報告をなすべきであるが，機会を得て先生に御願いするのが至当と考えられる。故に佐野の土器については土偶が1点も発見されて居らぬという一特性のみを附記して置く。

2　資　料

(1) 石　鏃

佐野の遺跡は現在2枚の桑畑約2反歩であるが，内土石器の濃厚に散布している面積は200坪程である。この面積から5年間に約500箇の石鏃を出して居り，今後当分の間年々100箇前後は採集し得ると思われる。近接地栗林（石器を最も多く使う弥生式遺跡）の遺跡に於いて7,80倍の面積から年々3,40個採集し得るに過ぎないのに比すれば，将に150倍程の出土量といえようか。石材は附近の遺跡の石鏃にあまり使用されていない灰白色の玄武岩が豊富に使用されている。かつて東北地方の石鏃を一見した時の事を想い起すに，この石材のものが多かった様に記憶している。佐野の遺跡の石材は東北地方から将来されたものが相当含まれているものと考えられる。

石鏃の大きさは最大5cm，最小1.5cm，普通3.5cm乃至4cmである。鏑を持った部厚い頑丈なもので，ずんぐりした点が特徴といえようか。附近の繩文遺跡から出土する石鏃は薄手であり，大きさも2cm位が普通であって，佐野のものとは非常な距りがある。

石鏃製作の技術は非常に優秀で，石鏃縁辺に左右同数に突起を出し，時に長突起を交える等の美術的なものを作り，或いは正方形上に三角形を加えたる如き五角形の石鏃を作る等異形優美な石鏃も多数作られている。次に石鏃の形式と石質とに従って分類表示すれば次の如くである。

	玄武岩	頁岩	黒曜石	計	百分比
第一類⏢	7	6	3	16	6.4
第二類△	11	4	2	17	6.8
第三類◇	15	6		21	8.4
第四類⏢	132	53	11	196	78.4
計	165	69	16		
百分比	66	27.6	6.4		

石鏃として分類したるものの中に，石小刀として使用されたものと思われる卵形の石器等多数混在して居り，第四類中には，第三類との中間形式ともいうべき⏢状のものも相当数含まれて居る。石鏃と他の小石器との問題，石鏃形式の問題等は，詳細に再検討すべきであるが，他日の機会に譲りしばらく従来多数の人の考えに従って置く。

当地方縄文遺跡からは，第一類・第二類が最も多く出土して居り，第三類・第四類は僅かに1％前後出土して居るのみである。然るに末期縄文式の佐野の遺跡に於ては，第四類が断然多く，全数量の8割に達せんとしている。栗林遺跡の石鏃は大きさ・厚さ・形等佐野遺跡のものと大差なく，第四類が81％であって，形式分類の上からも相似の姿を示している。

(2) 石　錐

つまみあるもの13，内Y字状のつまみのもの―頁岩製3，扁平円形のつまみのもの―玄武岩3，頁岩2，塊状のつまみのもの―玄武岩2，頁岩3，つまみなく棒状のもの―玄武岩4，頁岩1である。大きさは棒状のもの最長4.5cm，最短2.7cm，つまみあるもの玄武部2cm以下である。当地方弥生式からは石槍が殆んど出ていないが，或いは金属器が使用されたのではあるまいかと思われ，当遺跡とは明瞭な差異を示している。

(3) 石　匙

石匙は全く末期的な貧弱な形であり，出土例は玄武岩製2例のみである。他の石器が発達した為必要がなくなって，昔の遺風を伝えているといった形である。

(4) 石　槍

黒曜石製，優美端正な形である。長さ約6cm，穂先と柄の部分とから成り，金属器を思わせるものであって，他に類例がない。当地方の他の縄文遺跡から出土している石槍は紡錘形板状，両端とも穂先となす事の出来るもので全然類を異にしている。

(5) 石　斧

打製石斧は頁岩製の破片が1点のみである。磨製石斧は，蛇紋岩製，三味線胴形の小破片1，其他2例である。2例とも長さ8cm位，蛇紋岩製，内1例は藤森栄一氏の所謂石爪と名付けたるもの，両端半円形の刃部を形作り断面は薄く蒲鉾状である。他の1例は刃部が開いてバチ形であり，断面は矢張り薄い蒲鉾状である。

(6) 石 棒・石 刀

各1例宛であり，共に緑泥片岩様の石で作られた破片である。石刀破片は断面卵形であって，尖った部分が幾分刃部をなすかと思われ，全形は復原し得ない。

石棒は両頭式のものの破片であろうか。先端から約1cm，下方に2cmの幅の帯状ふくらみをめぐらし，ふくらみの部分には深い擦込線の模様が施されている。土器の紋様との関連を求めたが得られなかった。

(7) 装 飾 品

硬玉製勾玉の破片1，蠟石製小玉（臼玉に近いもの）1，蠟石の勾玉未製品1等が出土している。勾玉は不整形な原始的なもので，断面は蒲鉾状，孔は片刳りである。

3 考 察

資料を通視すると

イ 石器の種類が豊富である。

ロ 石器の量が豊富である。

ハ 石鏃の形式・形，石槍の形，石斧・石棒等各特殊性を備えている。又硬玉の飾玉を作っている事も注意すべきであろう。

ニ 一般に技術が優秀で繊細優美なものを作り出している。

以上によって考えるに石器時代終末期の姿を備えているといえやうか。

有柄鏃が圧倒的に多数であって，その割合は栗林と殆んど同率である。原始的な硬玉製の勾玉を出していることも当地方初期の弥生式遺跡と同じ姿である。（栗林を始めとして4.5例あり），石槍の形は金属器を思わせるものである。これらの諸点は，土器の施紋手法，紋様構成等の類似点と共に，初期弥生式文化との濃厚な交渉を物語るものであって，佐野遺跡の編年上の位置を明白に我々に示している。即ち佐野遺跡の陸奥式文化は栗林遺跡の弥生式文化と殆んど同一年代に営まれたものであると考えられる。

次に陸奥式飛地遺跡佐野の文化がどこからどんな経路を辿って将来されたか。

石鏃の豊富な事は，狩猟即生活であることを思わせ，移動性・漂泊性を多分に包蔵した生活であることを示している。石鏃・石槍・石棒等が東北地方のものと形が類似して居り，石鏃の材料中には東北地方から将来されたと思われるものもあって，東北地方の陸奥式文化と深い交渉があったと解される。なお多分の移動性を持った文化である事を思う時，直接交渉があったと解するに困難ではない。かく考える時飛地遺跡各個の文化が集中して陸奥式文化を形成したと解するよりも，分布の濃厚な地帯に於て発展をとげた文化が，分布の稀薄な地帯へ移動したと解する方が，より自然であり，より合理的である。

結局私は，陸奥式文化南漸資料として佐野の文化を論じられた八幡先生の所論に賛意を表す

るものである。不幸私は越後の実地踏査をする機会を持たないが，八幡先生の御話によれば阿賀川沿岸には陸奥式遺跡が相当多いという事である。若し事実とするならば，越後から信濃川を溯った陸奥式文化人が佐野に定着したと考えるのが穏当であろう。私の所論は粗笨な一面観に過ぎない。諸賢の叱正を得るならば幸甚である。

跋

山ノ内町大字佐野字畑中にある佐野遺跡が，縄文晩期遺跡として注目されたのは同町穂波小学校に赴任された故神田五六氏が表面採集によって土器・石器を集められたことに端を発したのである。その後この遺物に関心をもたれた八幡一郎氏（現上智大学教授）が〔考古学〕に「信濃国下高井郡佐野の土器」の報文を発表されてから一躍学界に有名になり，また，さきごろ永峯光一氏（現日本大学講師）が〔石器時代〕に「千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて」を発表し，その中で佐野遺跡出土土器を詳細に紹介されてより，佐野遺跡はいよいよ学界の注目を浴び，いわゆる「佐野式土器」という編年形式が認められるに至った。この遺跡は東北地方北部に源流を発する文様形式をもち，縄文晩期前半に位するものと推定されている。昭和33年11月第1次，同34年8月第2次の調査が行なわれたのであるが，この間下高井教育会・地元佐野区の絶大な協力と，永峯光一・故神田五六・金井汲次諸氏の熱意ある指導をいただき，山ノ内南・中野平・平岡の諸中学校・飯山南高等学校クラブ員及び関係者延500余名の協力によって，当地方に於ける上古史の一端を究明する学術的発掘調査が行なわれた。発掘物や遺跡の研究考察については調査員方の専門的な報告をご覧いただきたい。

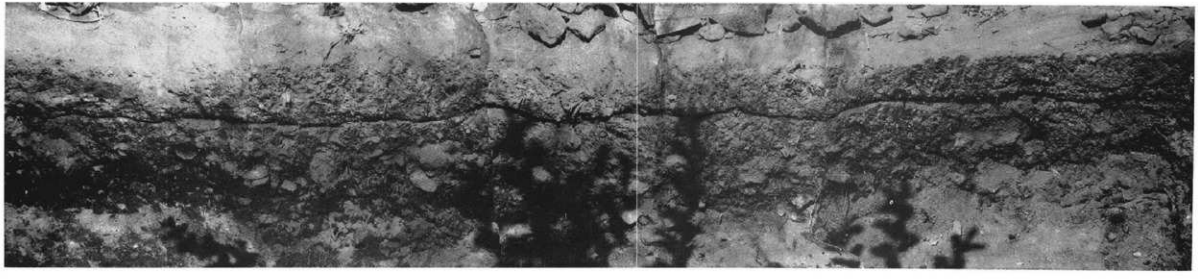
今回この報告書を刊行するにあたり，多忙な職務の間に，遺路発掘調査の任に当られたり，また調査結果の整理研究を進められ，執筆・編集等に精魂を傾けられた永峯光一・樋口昇一（現松本市松本県ケ丘高等学校教諭）・金井汲次・高橋桂（現飯山市飯山南高等学校教諭）・田川幸生（現中野市平岡小学校教諭）・桐原健（現諏訪市双葉高等学校教諭）・磯崎正彦（現京都市平安博物館）・岩野見司（現愛知県一宮市史編纂室）・上原甲子郎・関孝一（現小県郡丸子実業高等学校教諭）・安孫子昭二（東京都多摩ニュータウン遺跡調査会調査員）・中村貞史（国学院大学院）可児通宏（東京都多摩ニュータウン遺跡調査会調査員）・松沢芳宏（長野県建設局）氏等関係者各位に深甚な謝意を捧げたい。また下高井教育会・地元佐野区が寄せられた協力に対し深く感謝し，更にまた終始あたたかい支援を賜った金井喜久一郎氏（現信濃史料刊行会常任委員）及び地元各位に対し心から御礼申し上げる次第である。

昭和42年11月10日

長野県下高井郡山ノ内町教育委員会

図版1　遺跡遠望

図版2 (上)第1次発掘の状況・(下)Iトレンチ西北壁断面

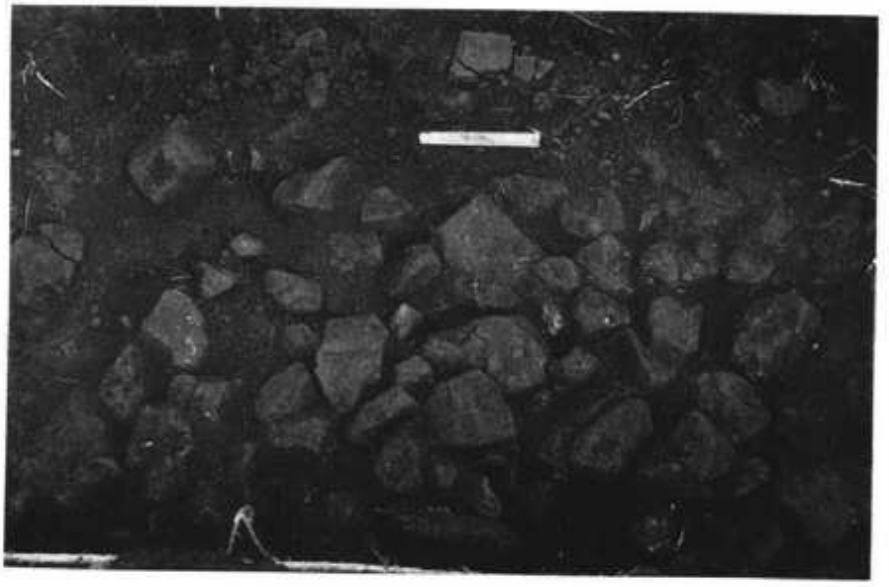


図版3

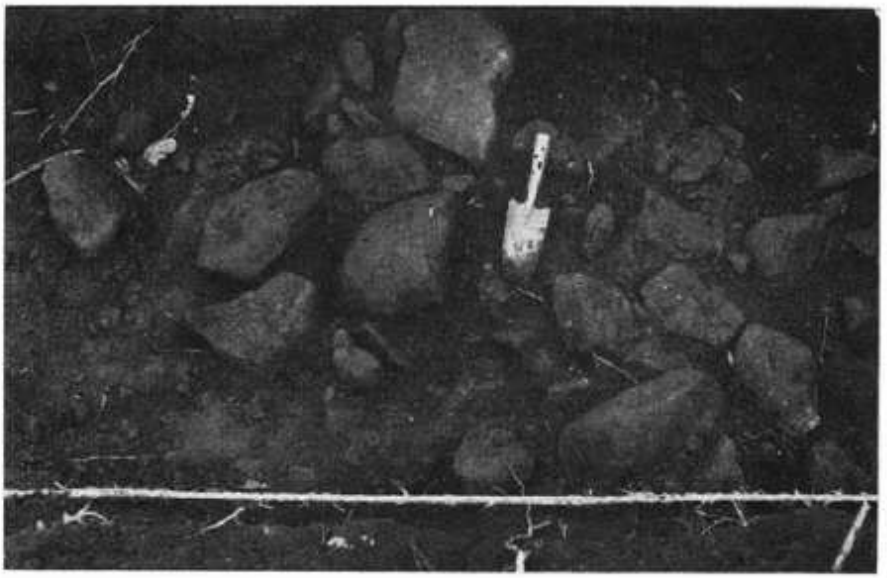
(上)A－3区集石址・(下)A－3区集石址と附近の遺物出土状況

図版4

(上)A－5区集石址(6区寄り)・(下)A－5区集石址(4区寄り)



図版5 (上)A—6区集石址・(下)B—1区集石址



図版6

(上)B—2区集石址・(下)B—2区集石址中の土器出土状況

図版7　(上)B－3区集石址　・　(下)B－3区土器出土状況

図版8

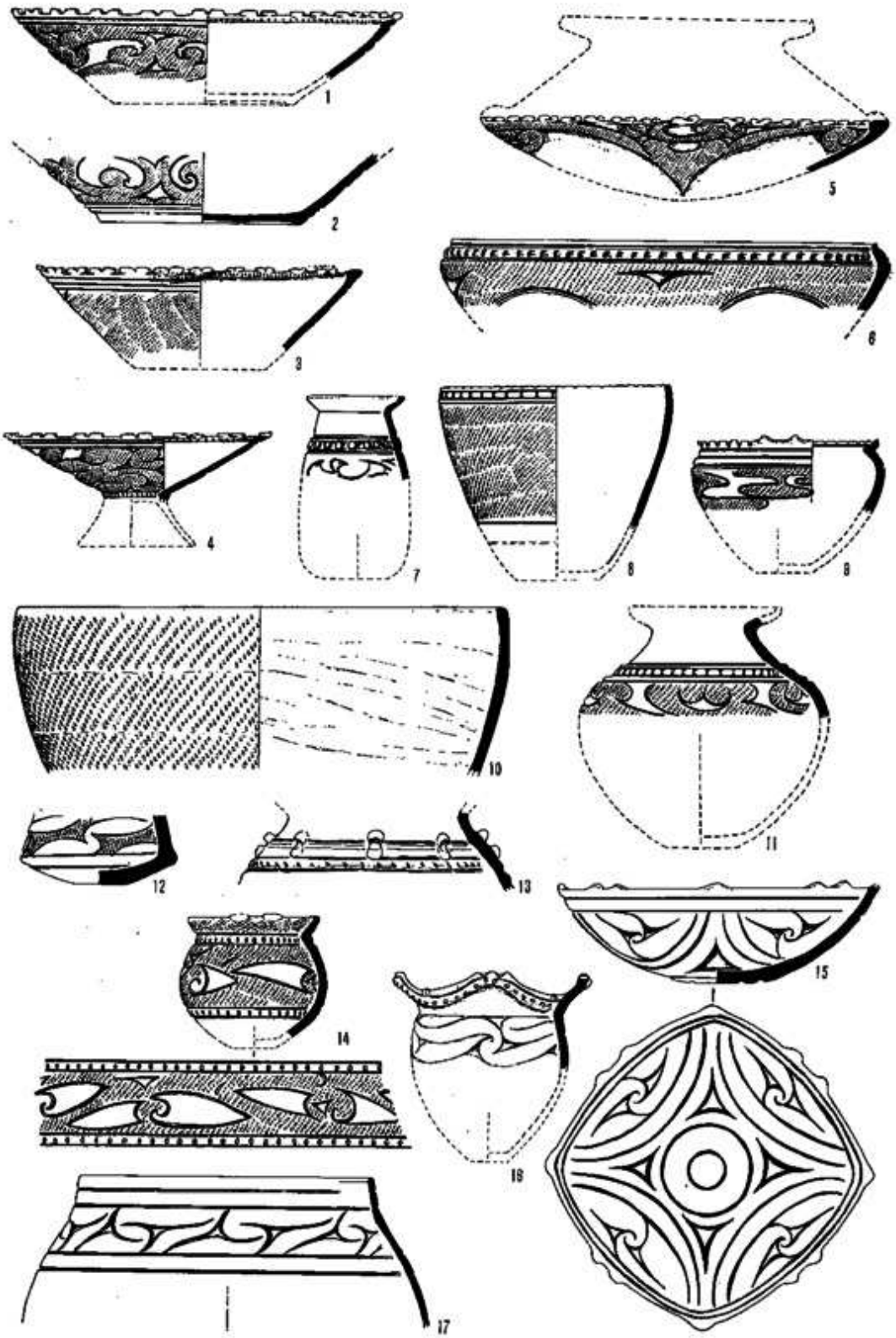
(上)第2次発掘の状況・(下)III トレンチ炉址

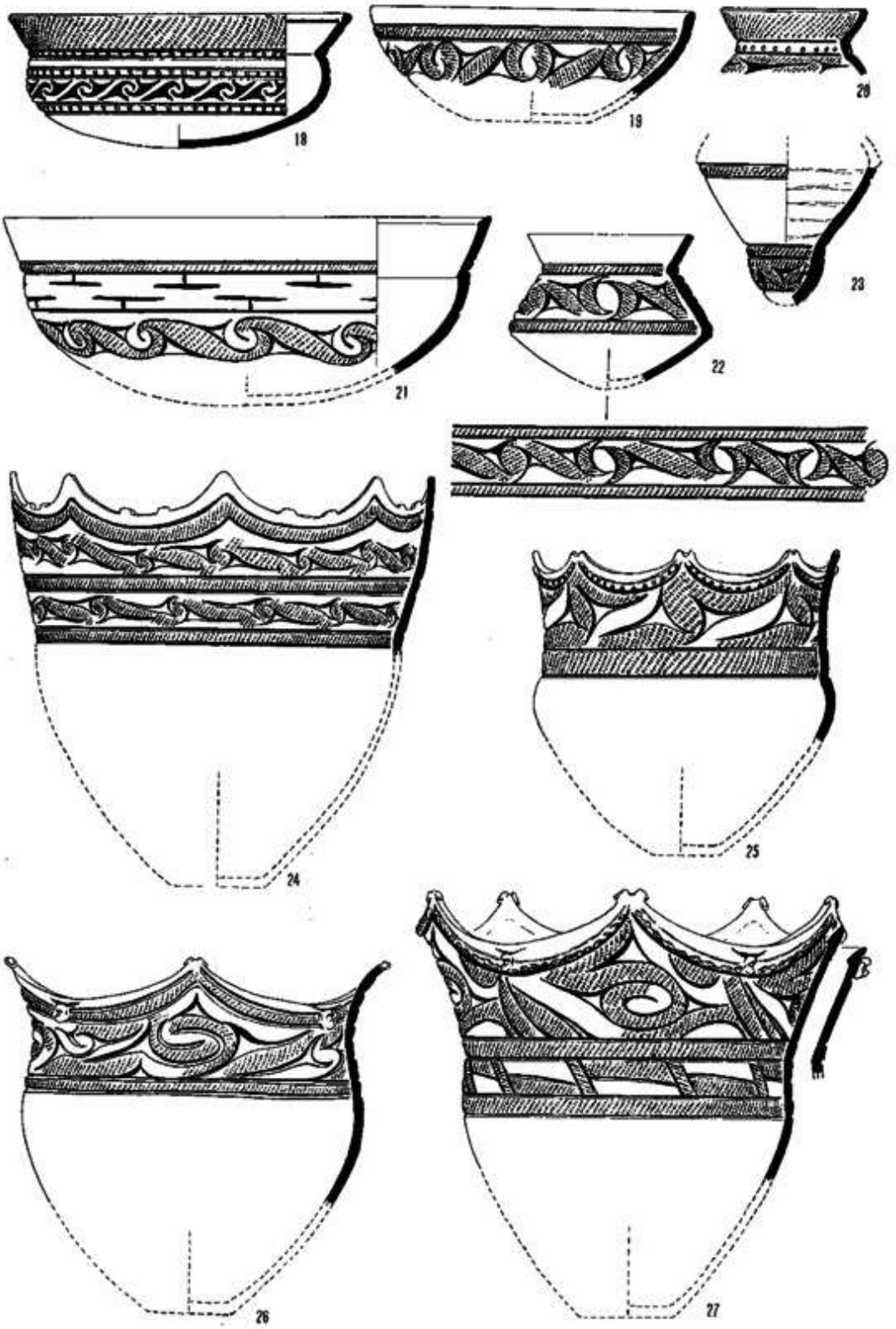
図版9 (上)I－4区埋設土器・(下)I－4区遺物出土状況

(上)II—1区土器出土状況 ・ (下)III—1区遺物出土状況

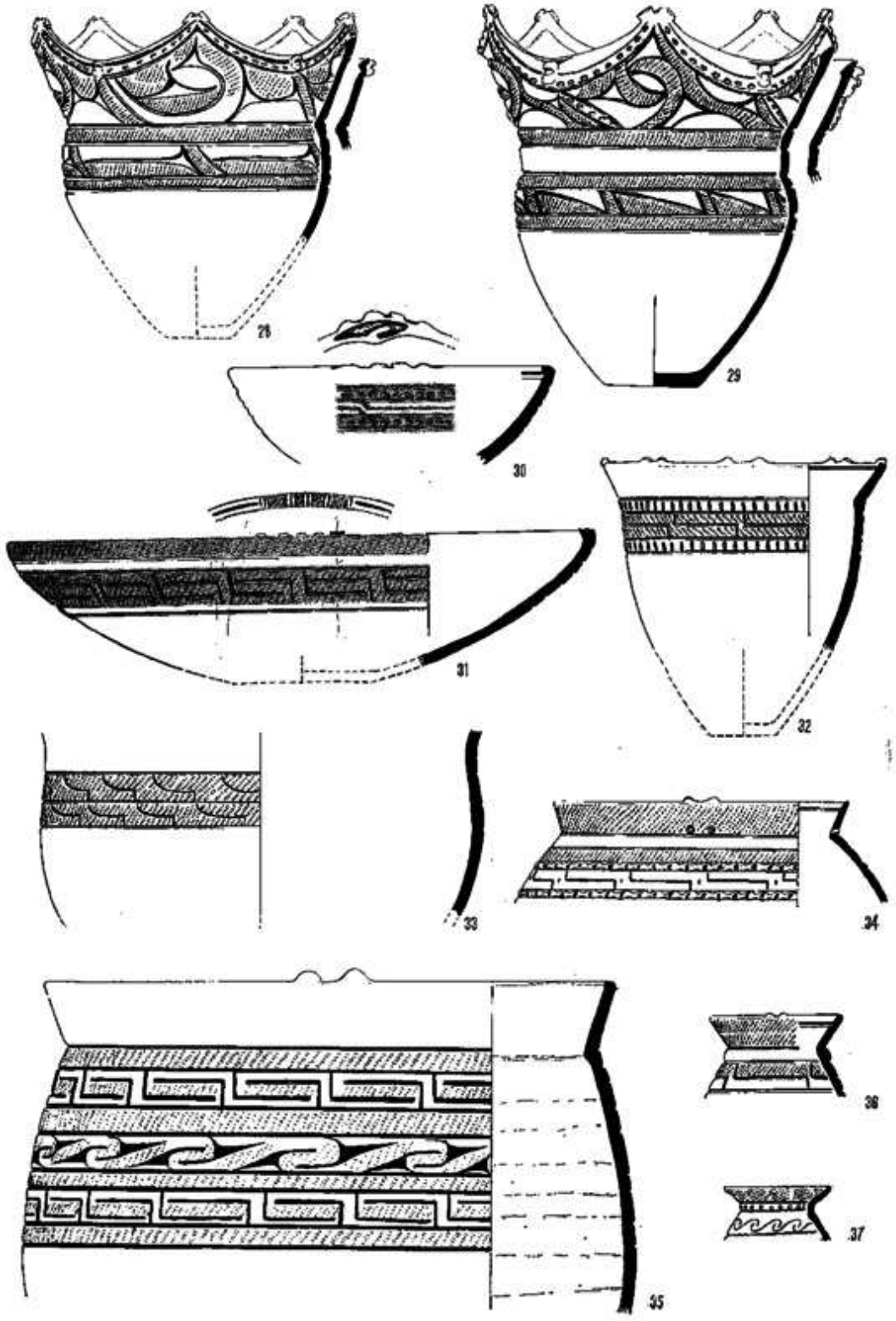
図版11 (上)I—1区石剣出土状況・(下)I—2区遺物出土状況

図版12　土器（一）　A群（1～14）・B群（15～17）（1／4）

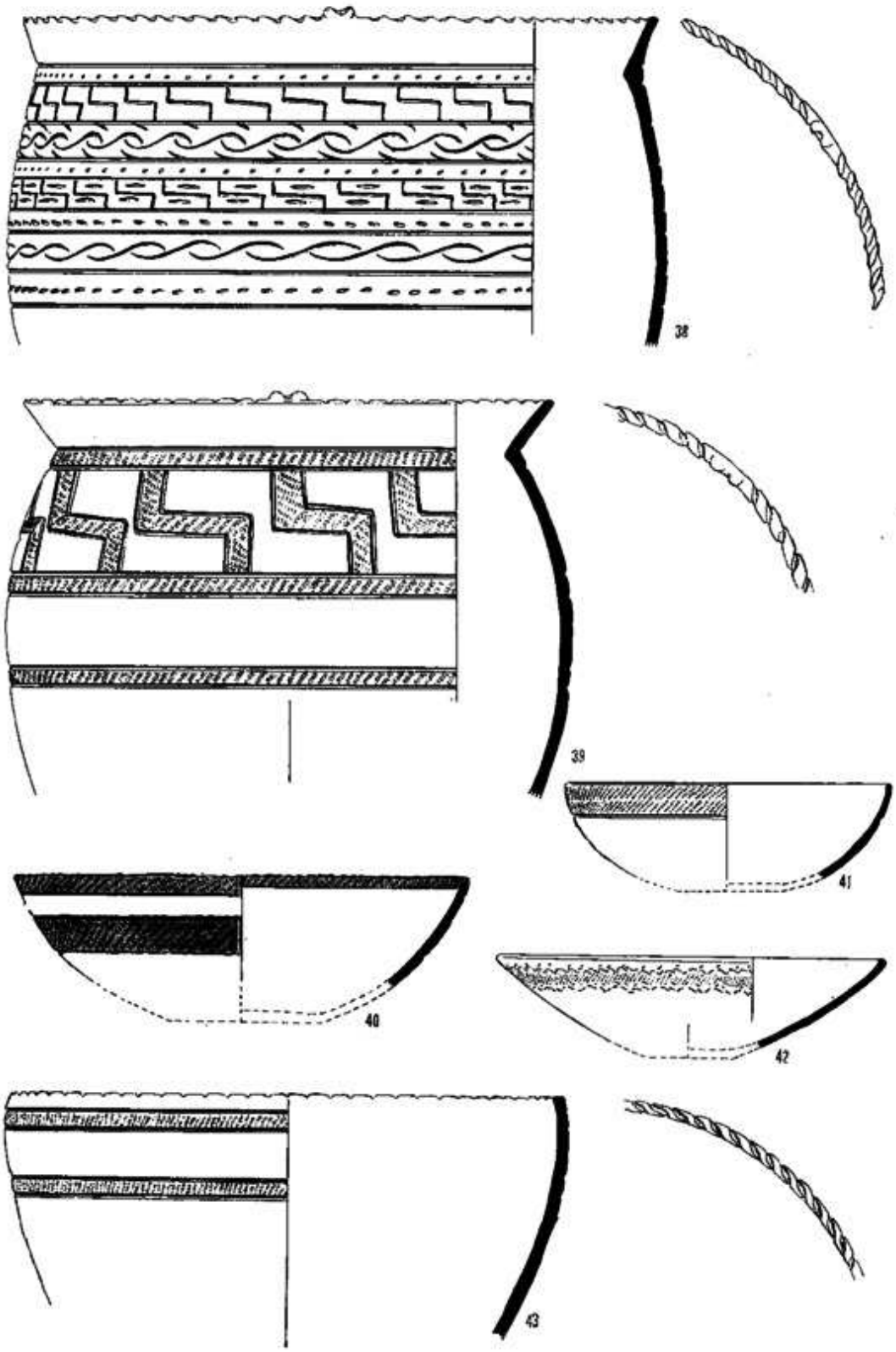



18
19
20
21
22
23
24
25
26
27

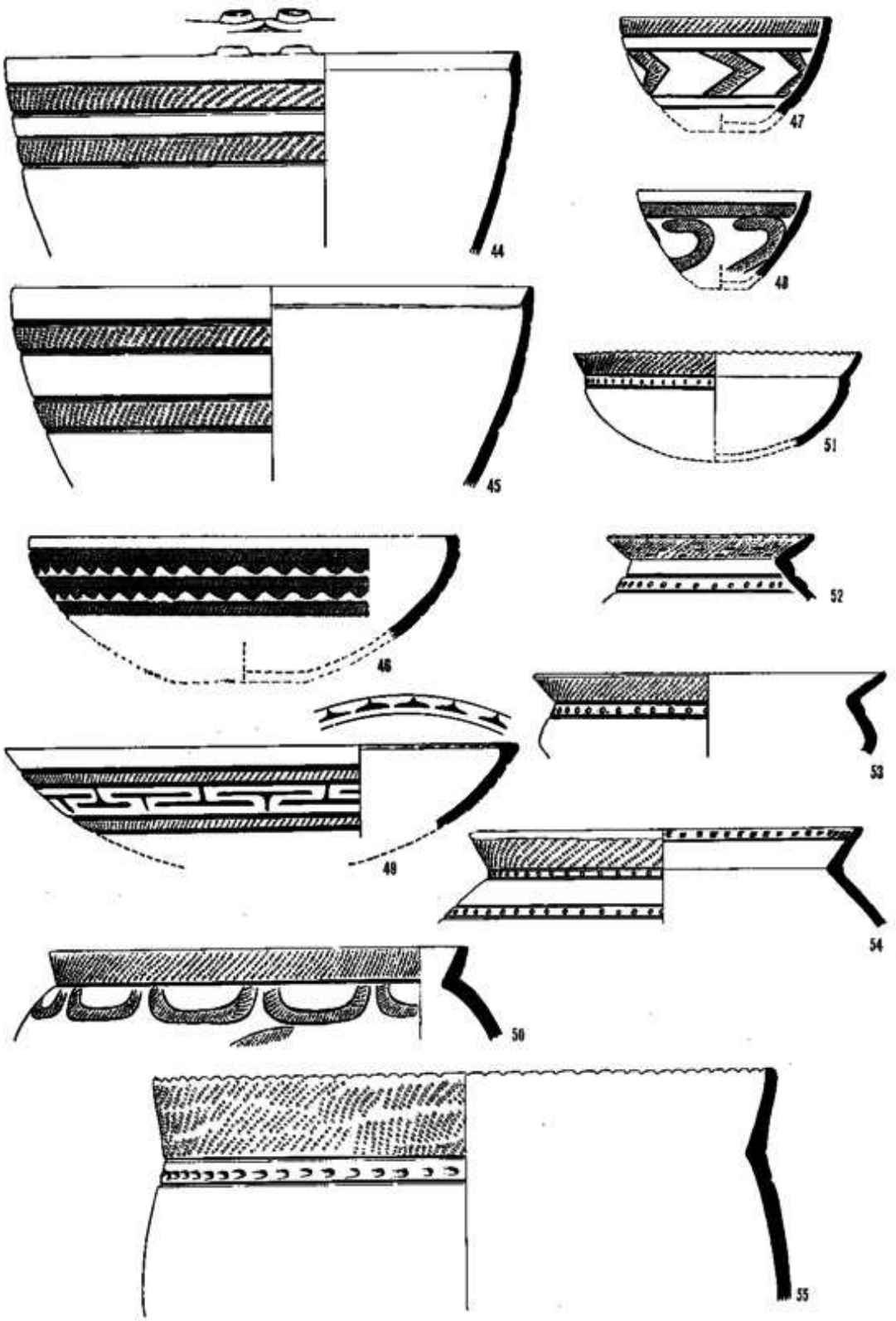
図版14　土器(三)　B群(28・29)　C群(30～37)(1／4)



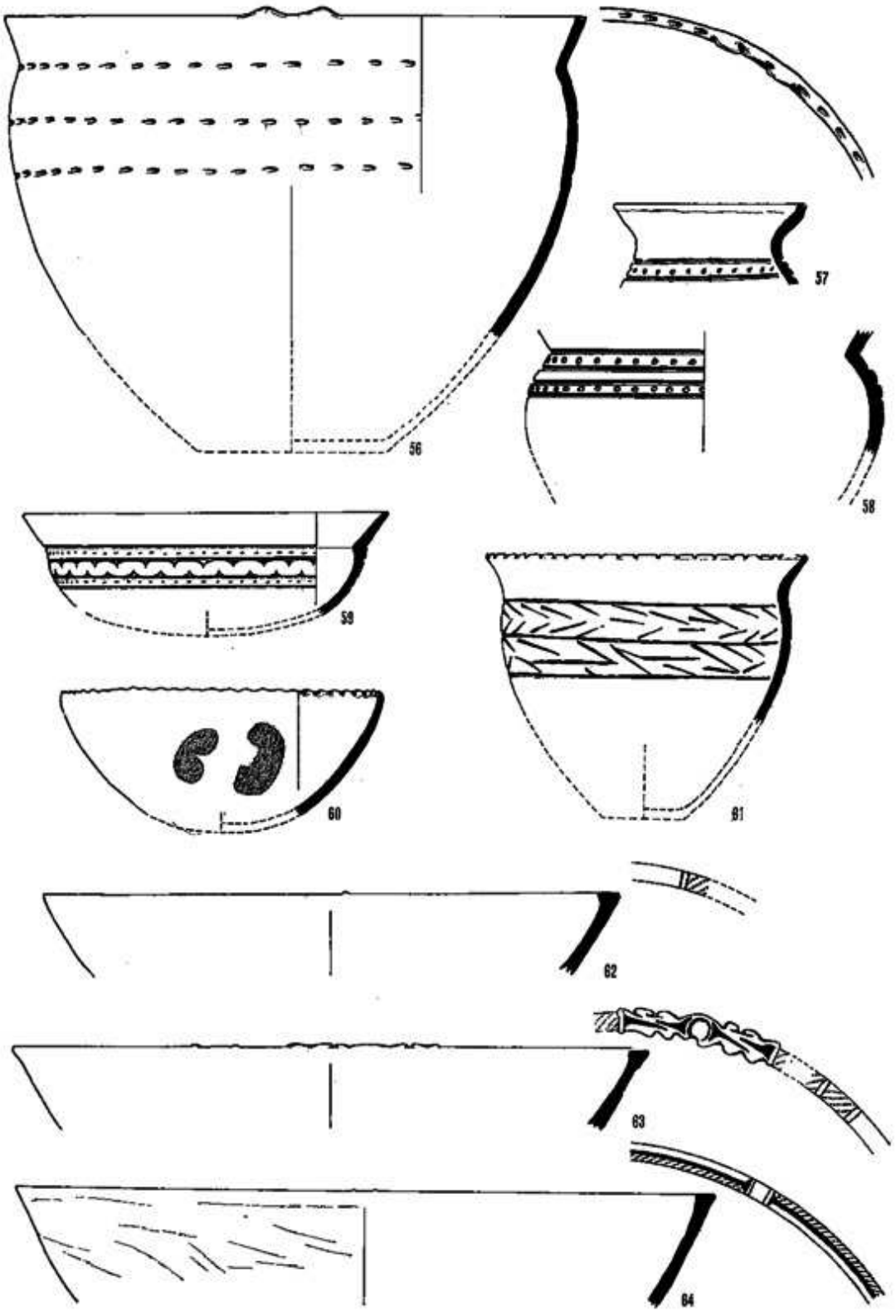
図版15　土器（四）　C群（38・39）　D群（40～43）（1／4）



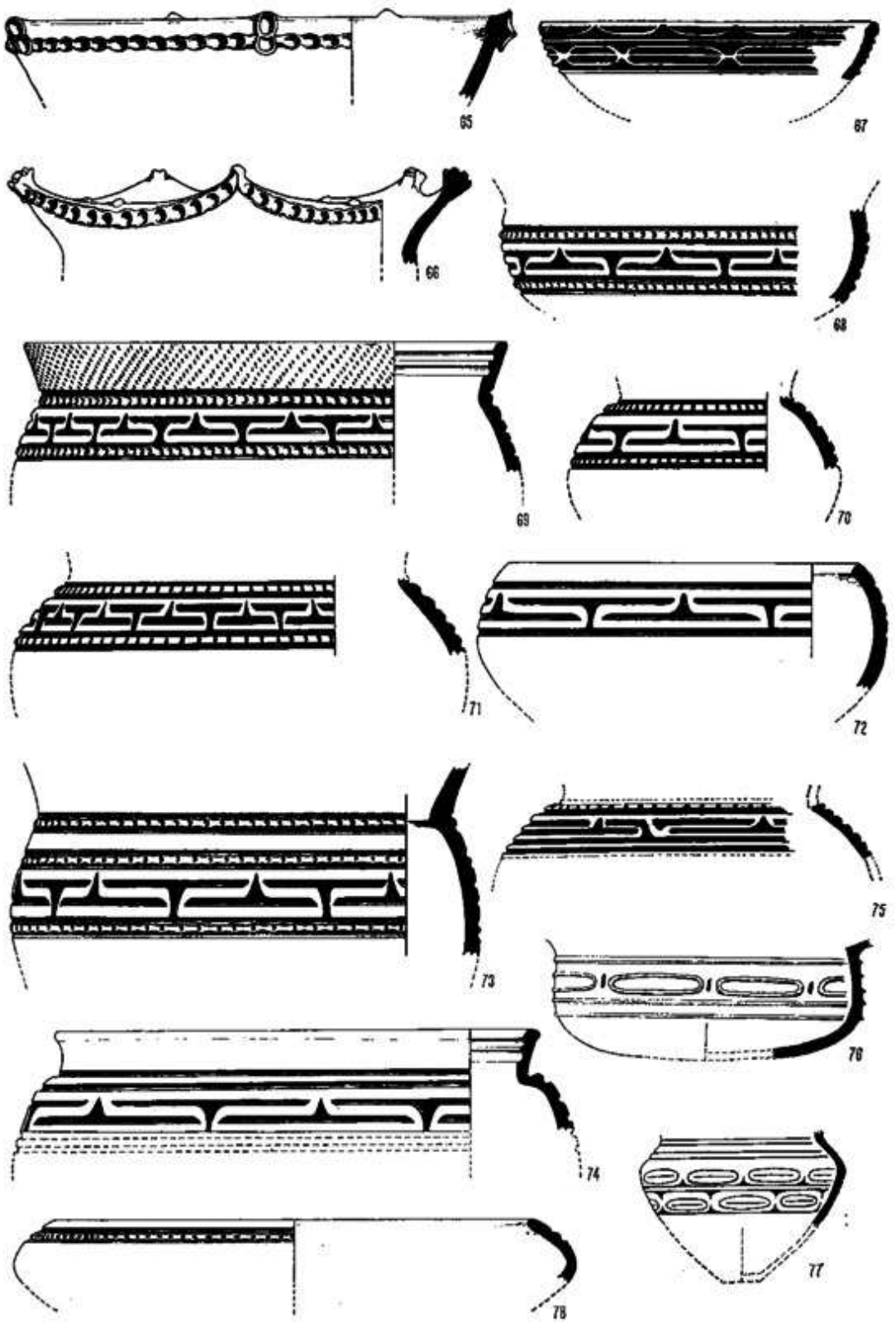
図版16　土器（五）　D群（44～48・50）　E群（51～55）　H群（49）（1／4）



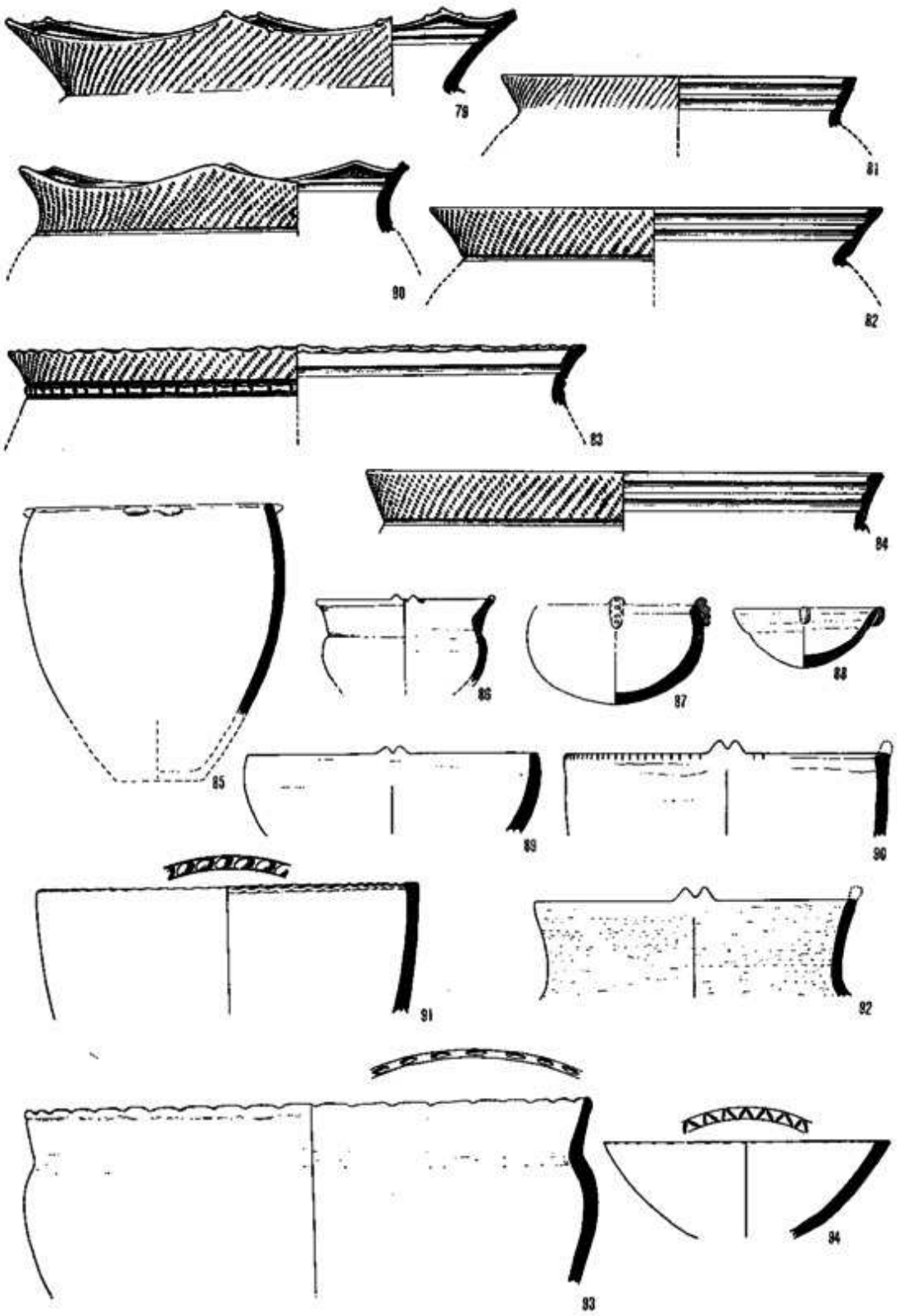
図版17　土器（六）　E群（56～58）　F群（62～64）　G群（59～61）（1／4）



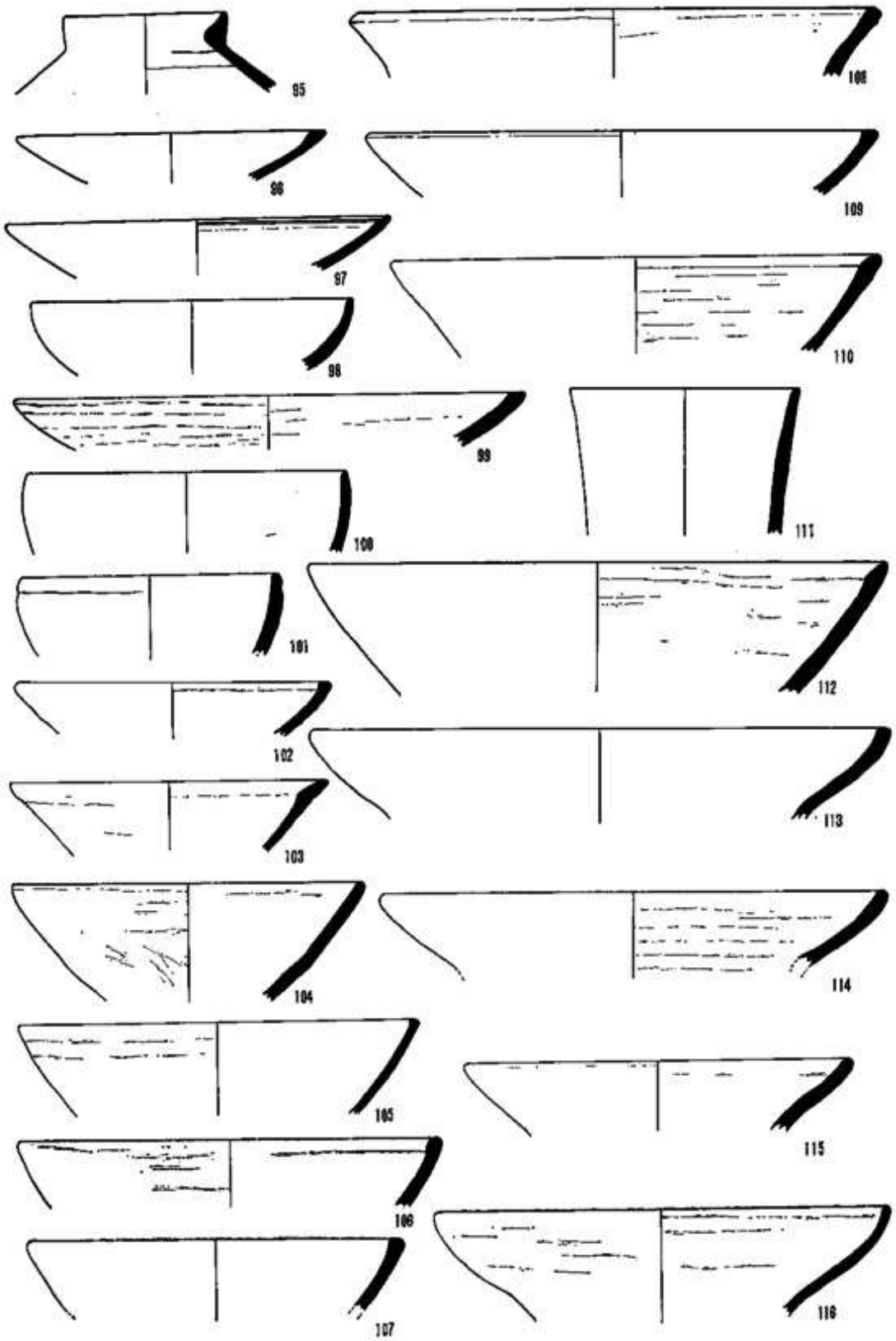
図版18　土器(七)　H群(67～77)　I群(65・66)(1／4)



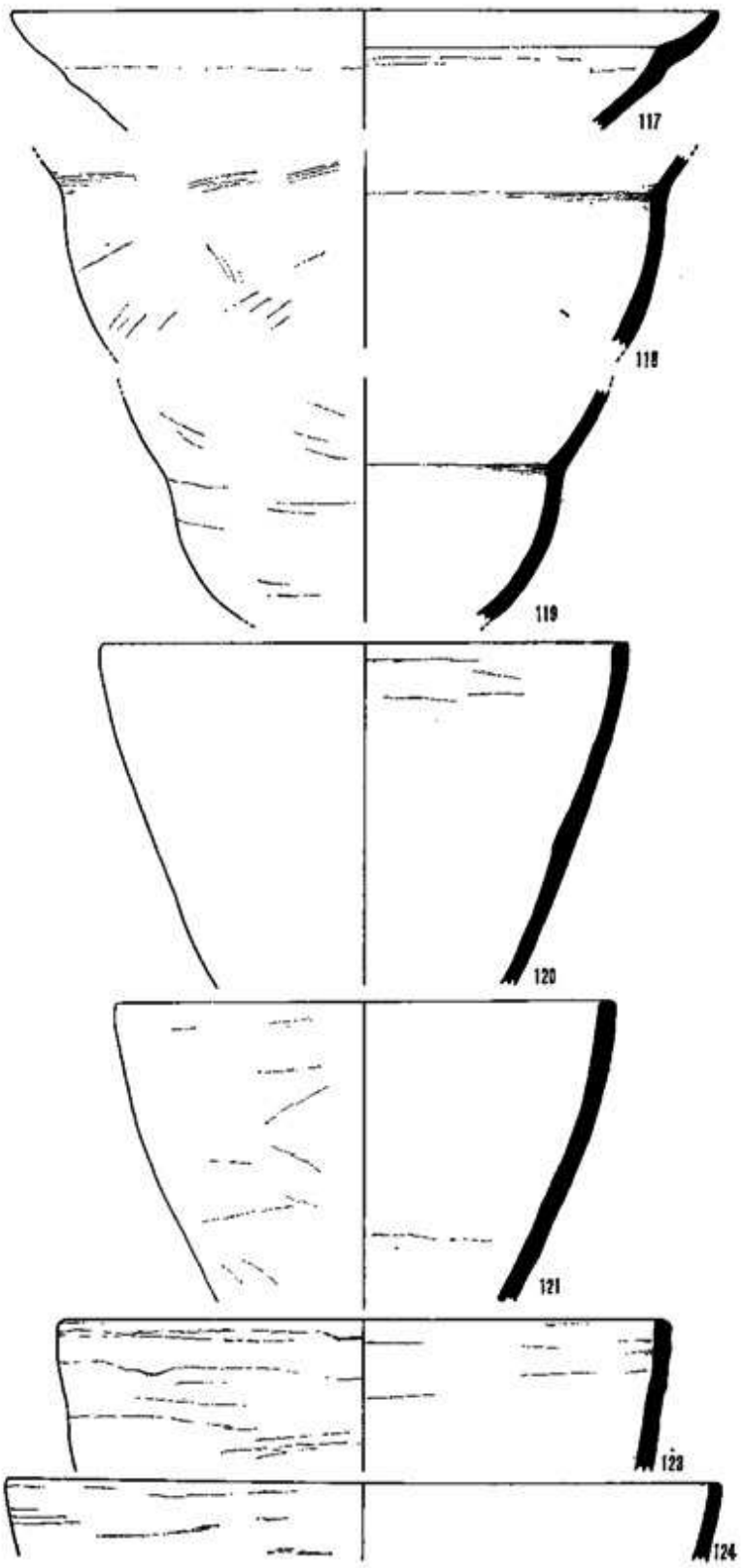
図版19　土器(八)　H群(78～84)　J群(85～94)(1／4)



図版20　土器（九）　K群（95～109・111）　L群（110・112～116）（1／4）

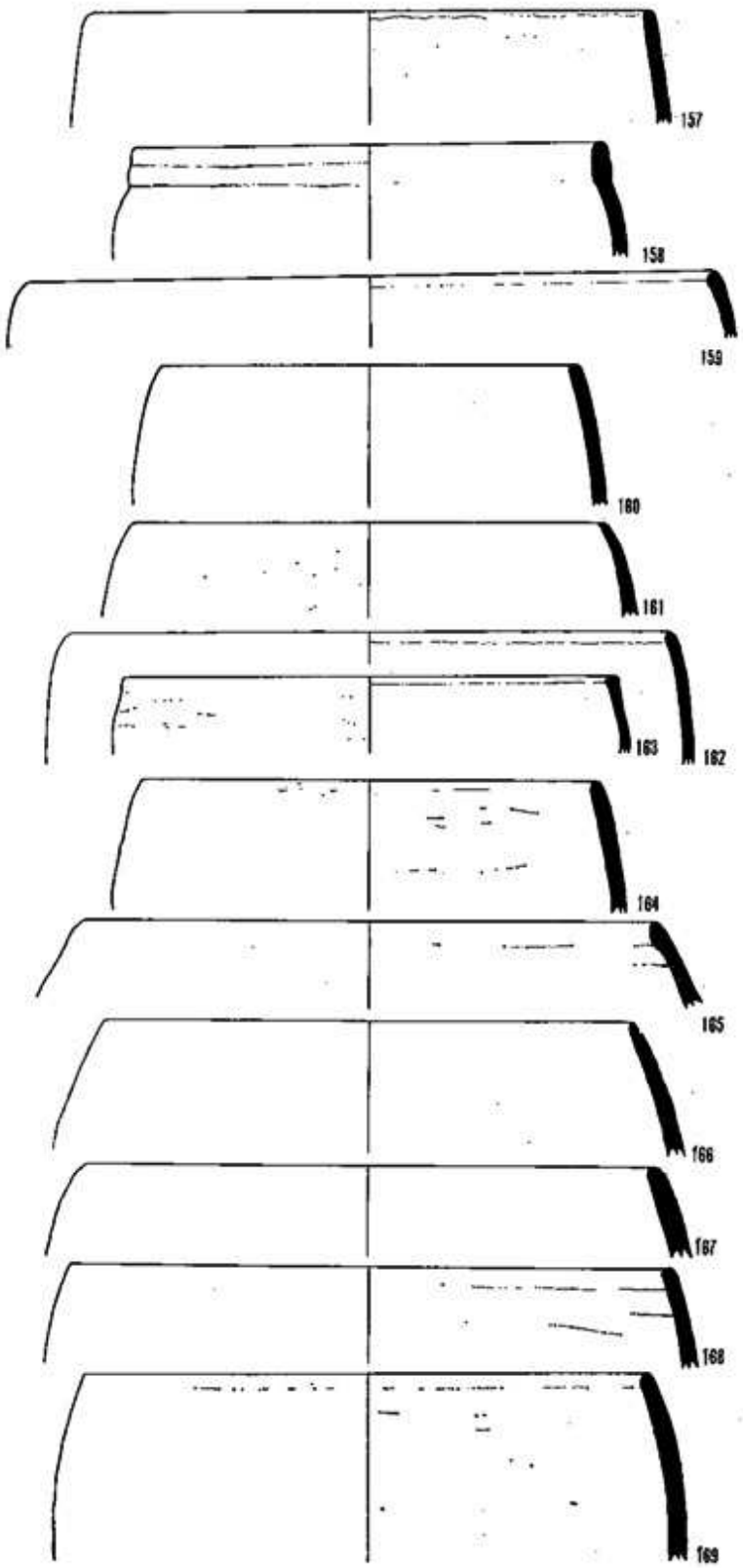


図版21　土器（一〇）　L群（117～124）（1／4）

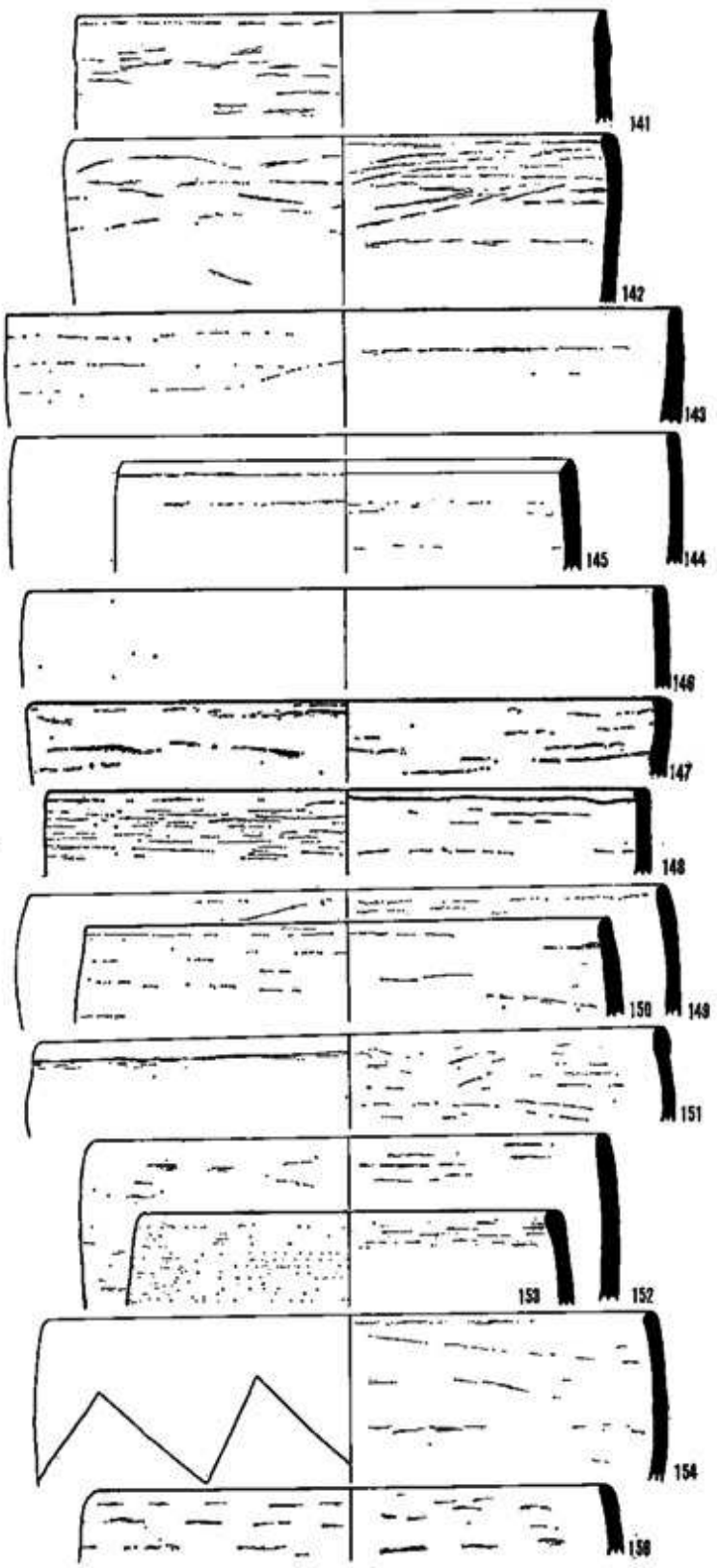


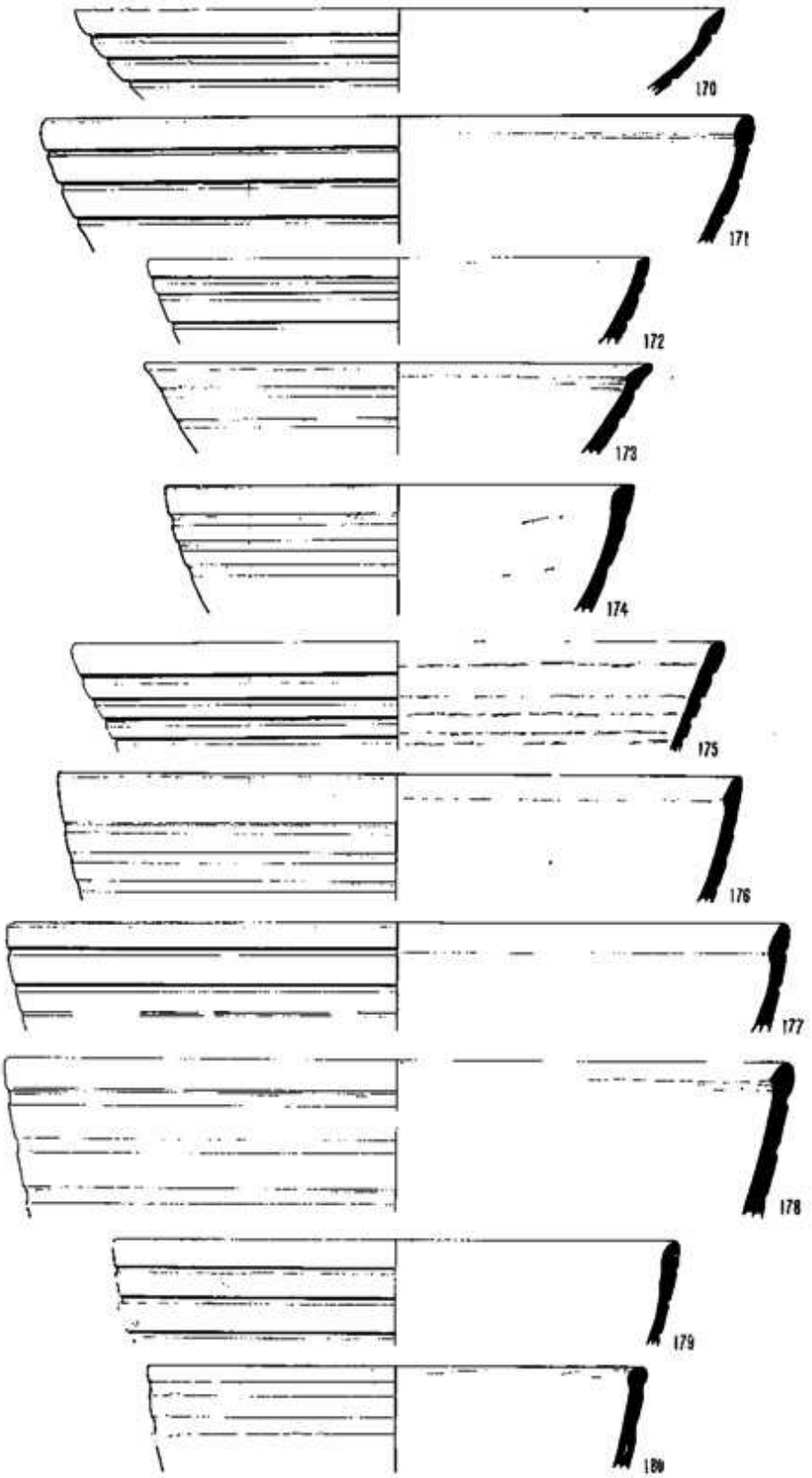
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

図版23　土器（二）　L群（141～156）（1／4）

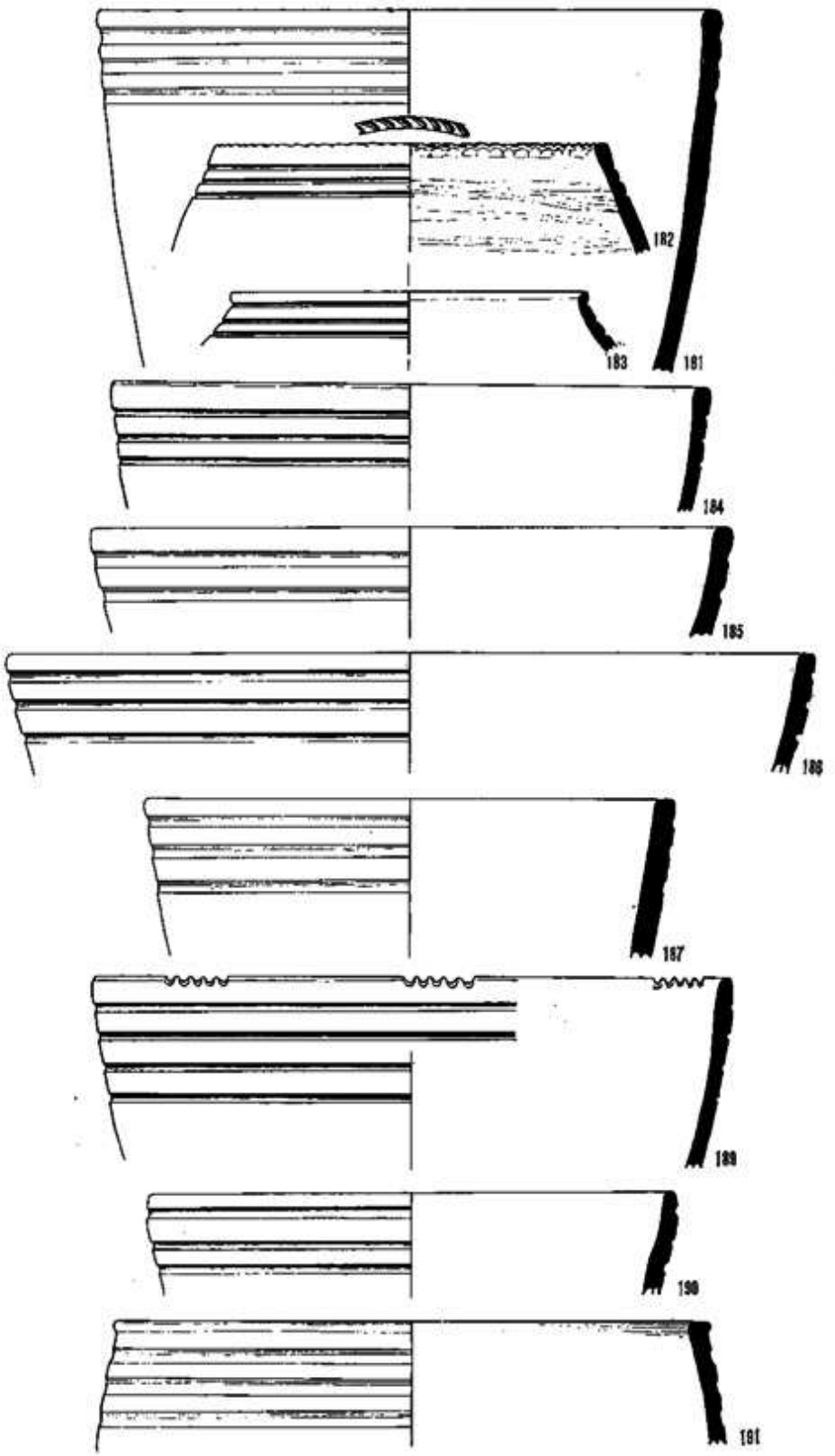


図版24　土器（一三）　L群（157～169）（1／4）

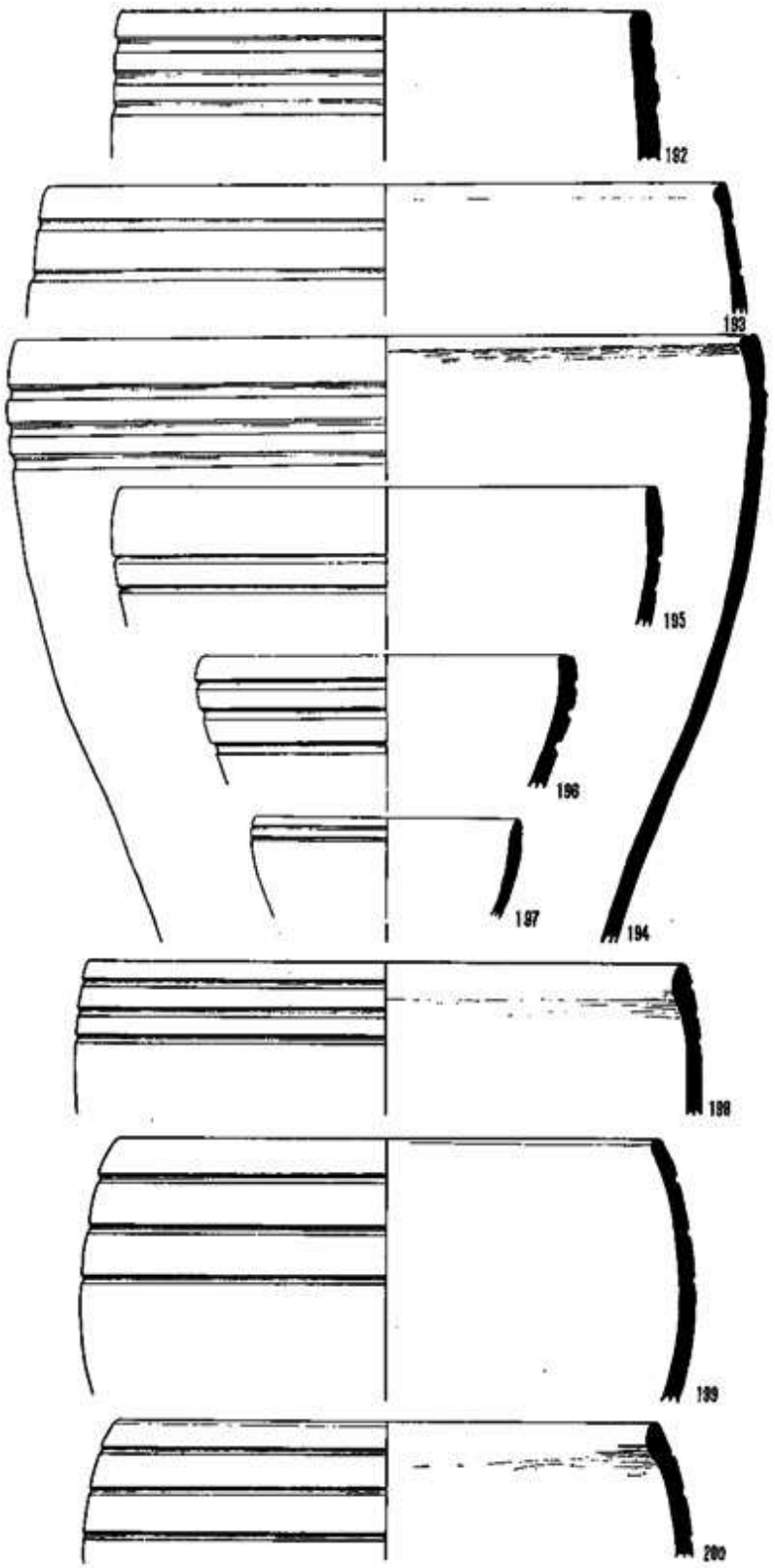



170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180

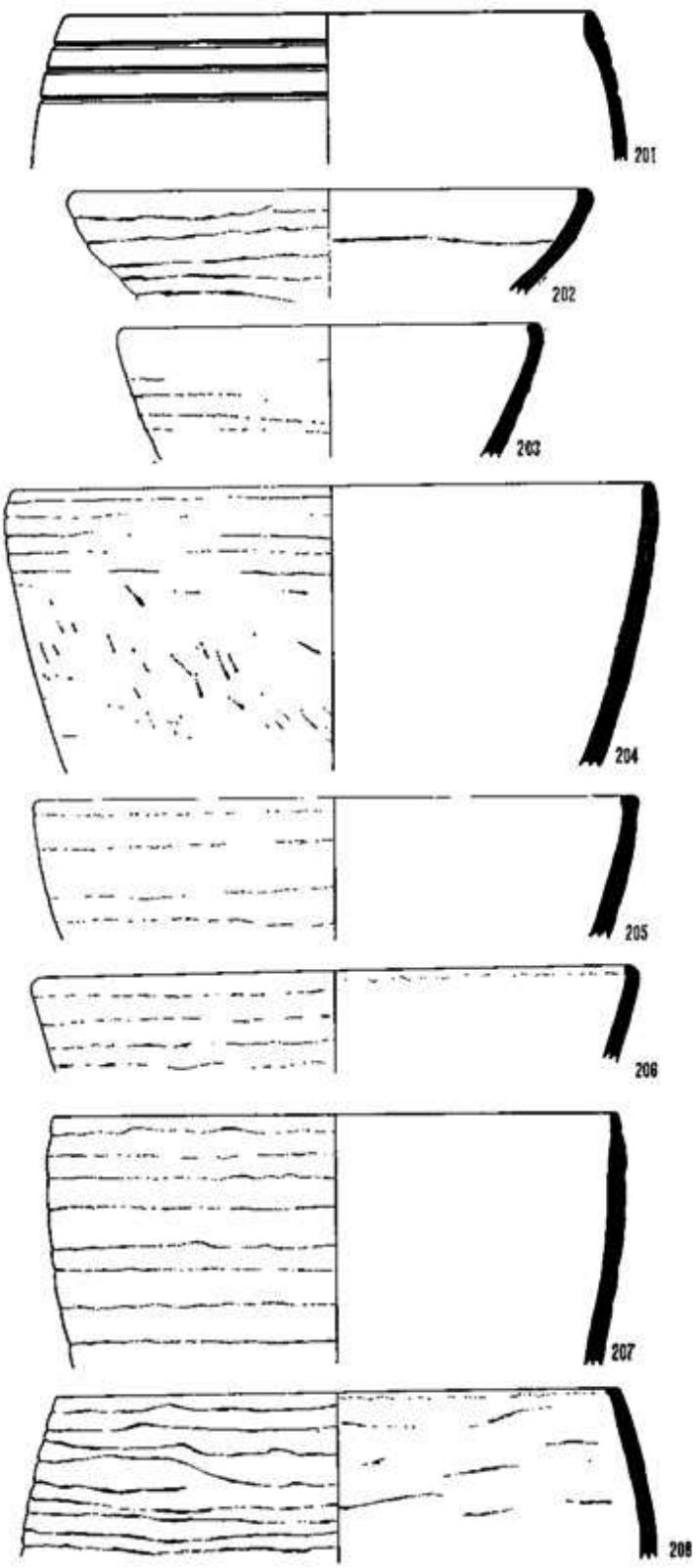
図版26　土器（一五）　M群（181～191）（1／4）



図版27　土器（一六）　M群（192～200）（1／4）



図版28　土器（一七）M群（201）N群（202～208）（1／4）



「佐　野」

昭和42年11月20日　印刷
昭和42年11月30日　発行

発行者　長野県下高井郡
山ノ内町教育委員会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
長野市西和田470